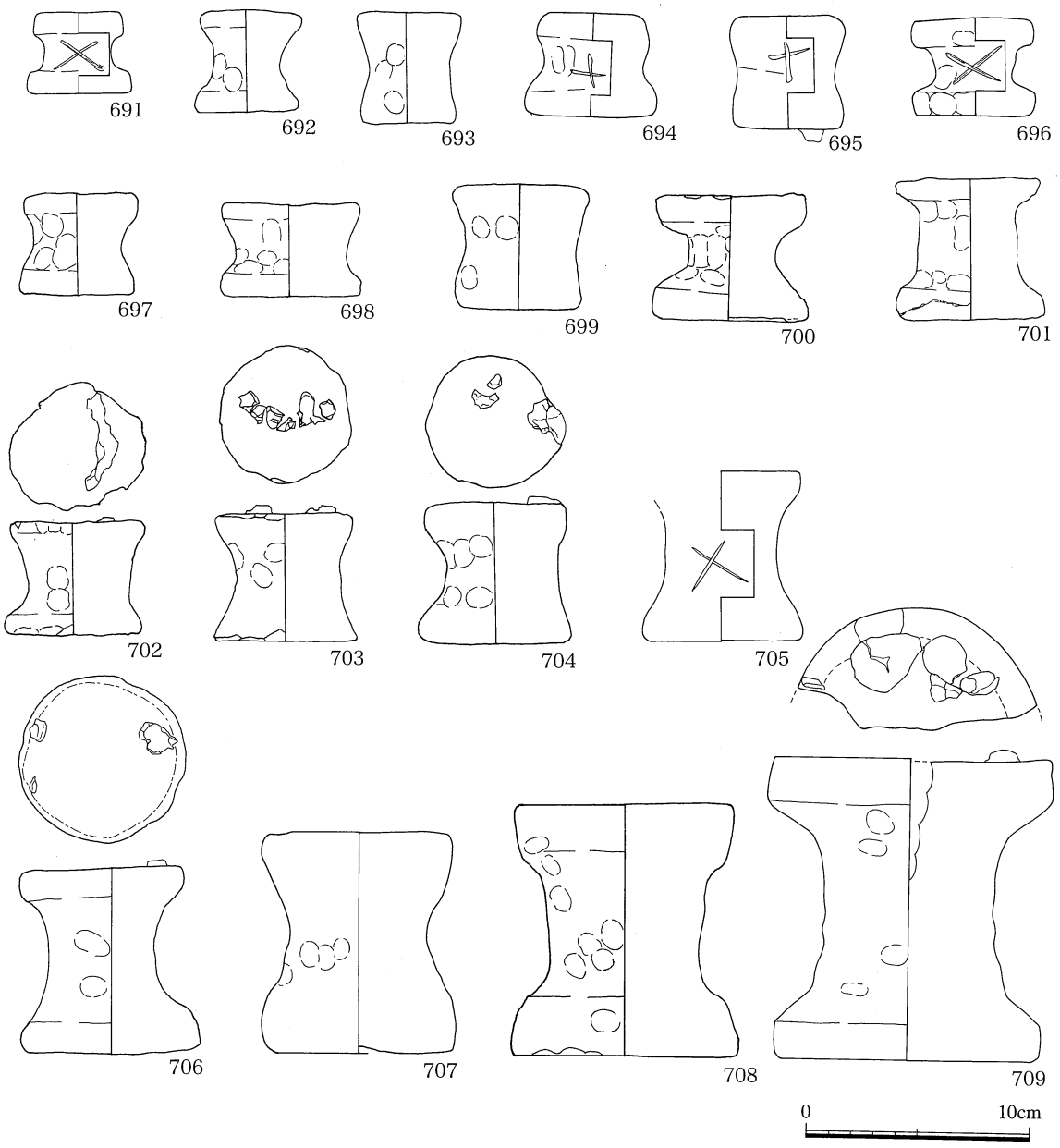


Fig.60　出土遺物実測図　窯道具—トチン (3)

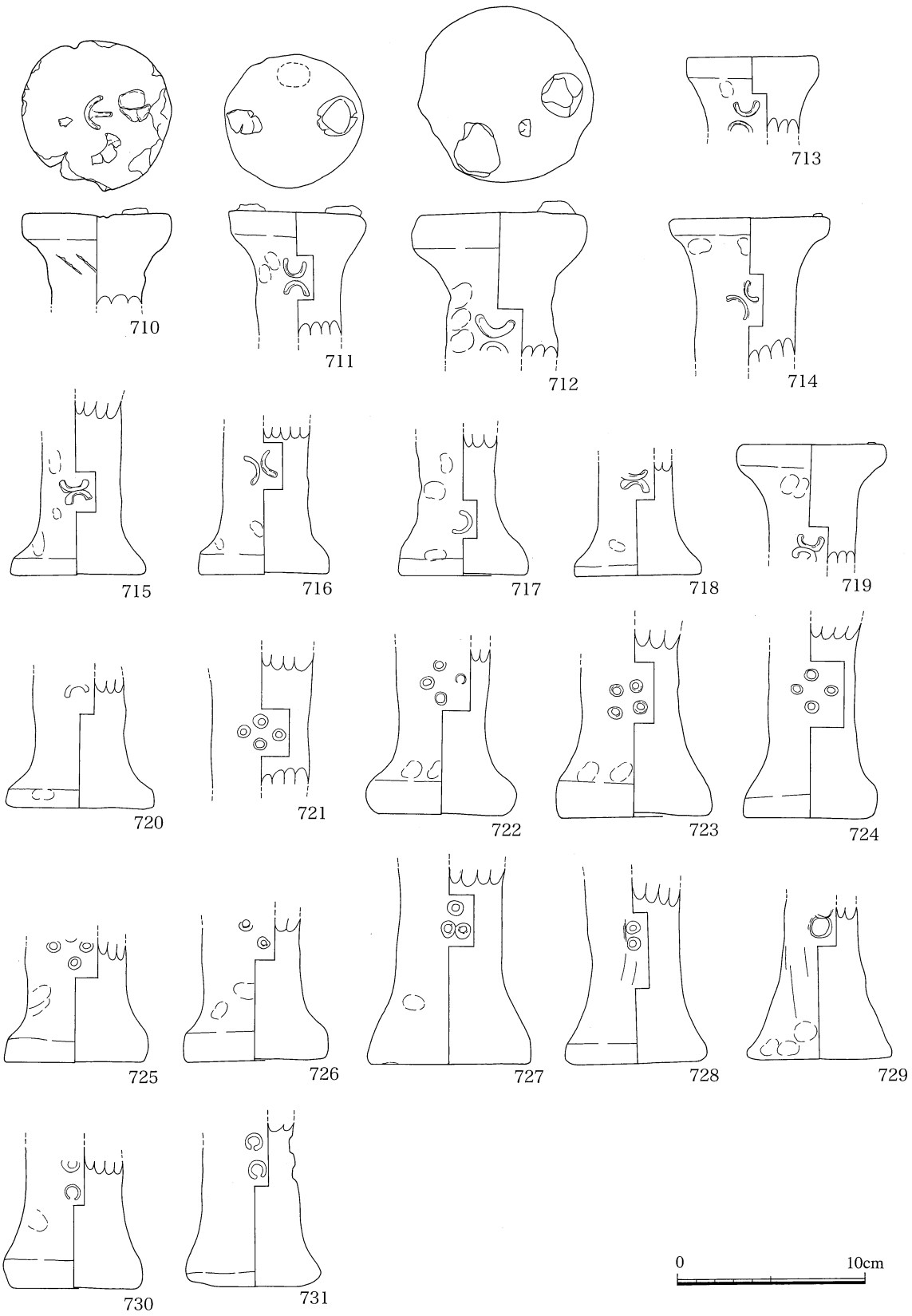


Fig.61　出土遺物実測図　窯道具—トチン (4)

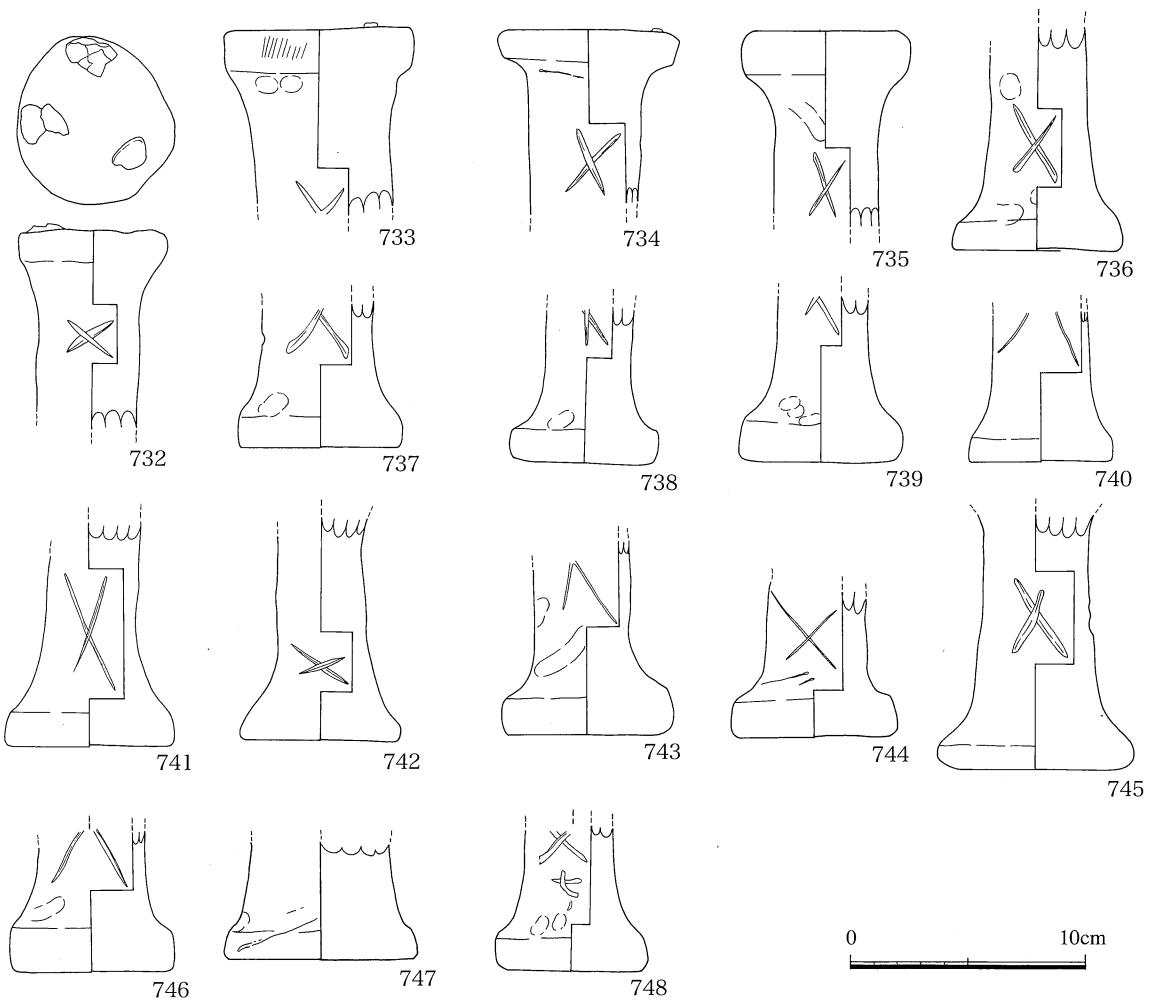


Fig.62　出土遺物実測図　窯道具―トチン (5)

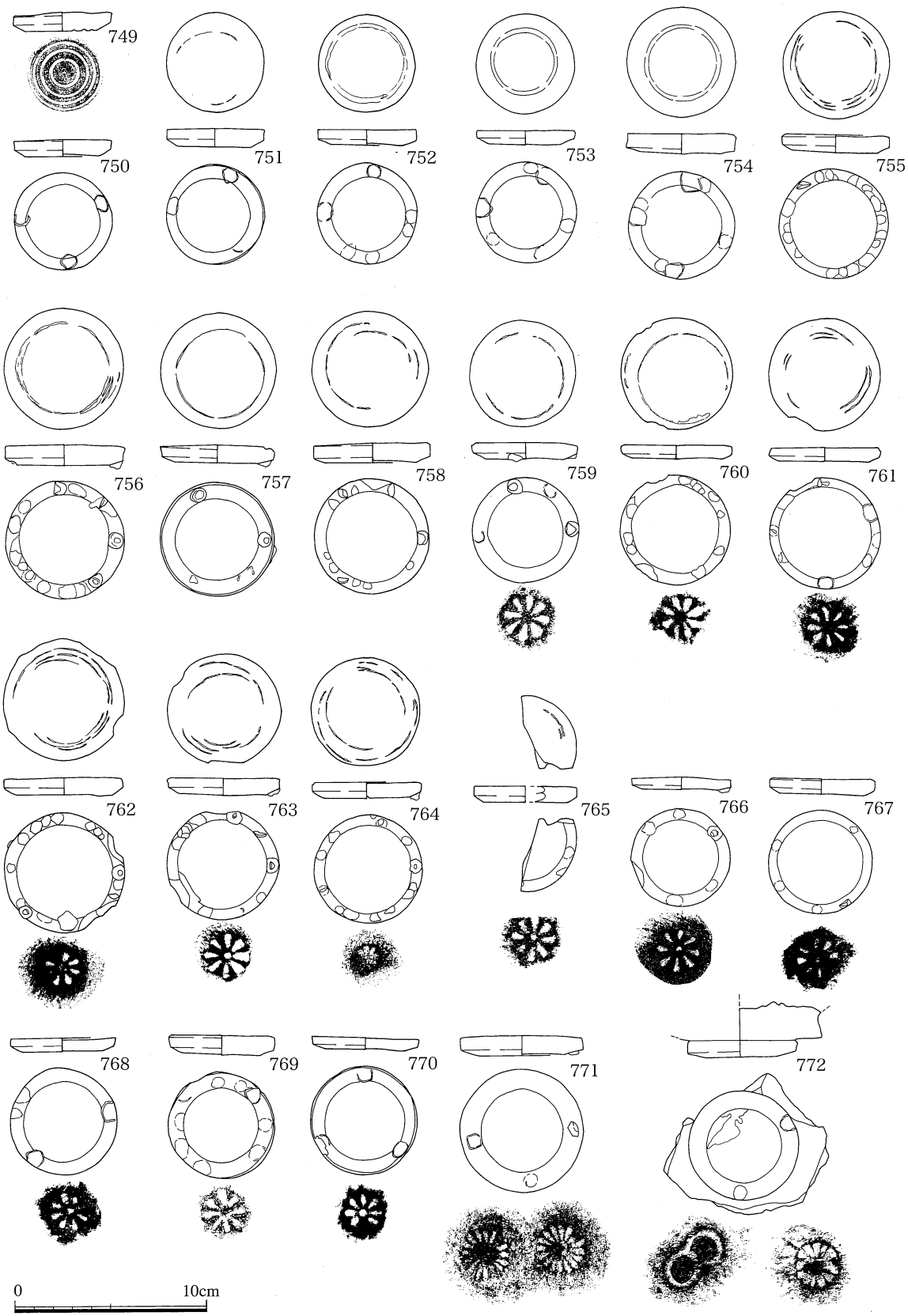
(3) ハマ

ハマは形態別に、A類:円盤形で片面側の周縁に面取りを施すもの (749～786)、B類:円盤形のもの (787～799・801・807)、C類:円盤の中央に円孔を穿つもの (800) の3タイプがある。このうちA類はロクロ成形で周縁の面取りを行った後、回転糸切りで柱状の粘土塊から切り離しを行っている。一方、B類にはタタラ成形とロクロ成形の2タイプがみられる。出土点数は破片数にして、A類106点、B類21点、C類1点である。

①ハマA類 (Fig.63・64)

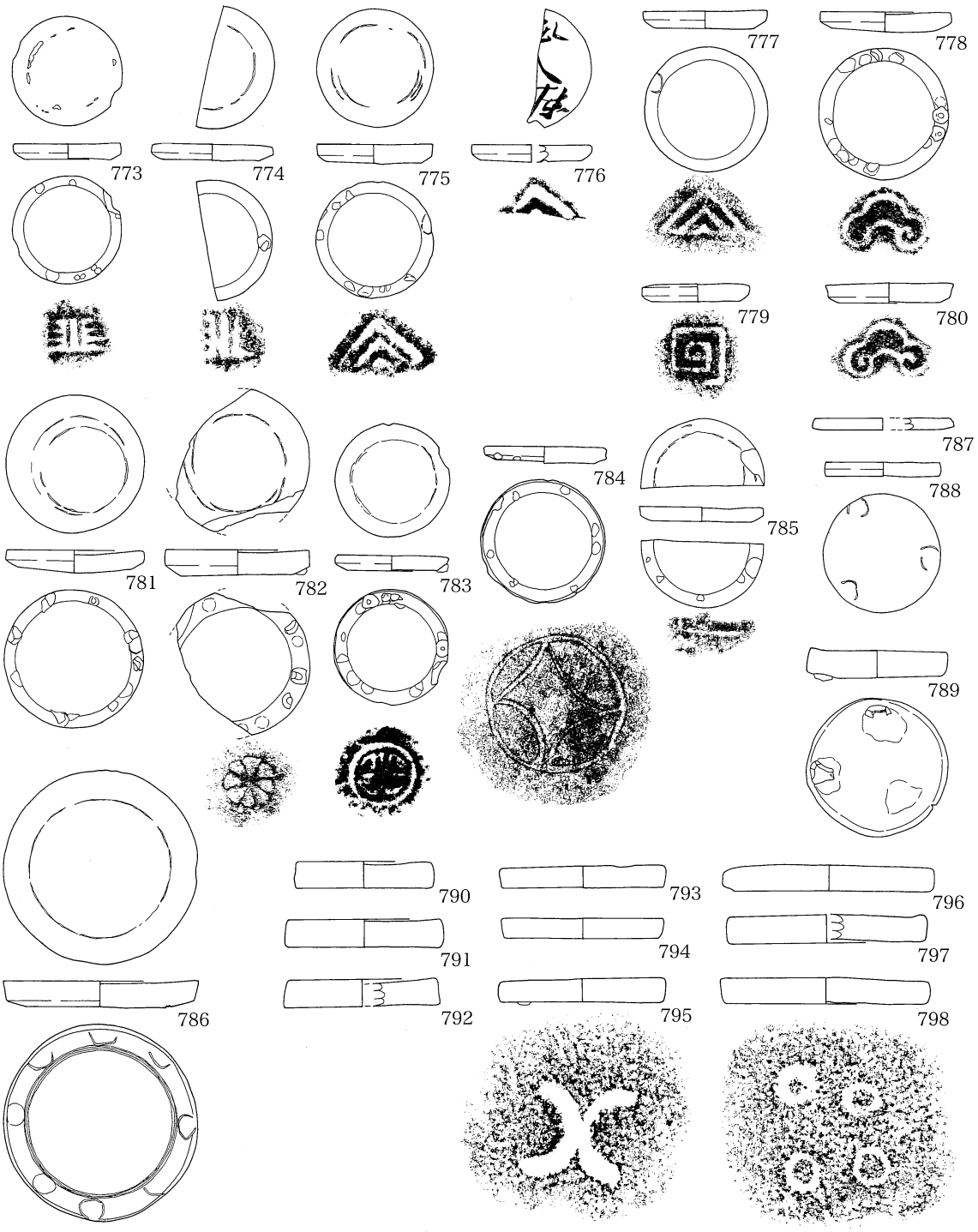
ハマA類には、法量別に径5～7cm台の小型のもの (749～785) と、径9cm台の中型のもの (786) がある。大小タイプのいずれもロクロ成形で、上面は回転糸切り、下面は面取りの後回転ナデを施している。

使用痕跡としては、上面に製品の高台痕を留めるものが多くあり、径5～7cm台の小型のハマには4cm前後の明瞭な高台痕を1～3個残すものが認められる。このうち753は径3cm台、752・754・759・760・763・766・775・779・781・783は径4cm台の高台痕を観察している。一方、径9cm台のハ



(刻印・拓本のみS＝実寸)

Fig.63　出土遺物実測図　窯道具―ハマ (1)



(刻印・拓本のみS＝実寸)

Fig.64　出土遺物実測図　窯道具―ハマ (2)

マでは、786に径7cmの高台痕が見られる。

また、円錐ピンの剥離痕を残すものも多くあり、剥離痕跡からみてもハマの複数回の使用が考えられる。剥離痕跡の多いものでは、755・756・758・760～762・764・769・775・778・781～783が足数3足とみて使用3～4回分程度の剥離痕を残している。一方、786では、8箇所のピン痕を認めている。

②ハマB類 (Fig.64・65)

ハマB類には、法量別に径5～8cm台の小型品（787～795）と、径10cm台の中型品（796～798)、径16～19cm台の大型品（799～801・807）がある。

788はロクロ成形による小型品で、下面と側面は回転ナデ、上面には回転糸切り痕を残す。下面には円錐ピンの剥離痕が3箇所に残る。790は円盤形の粘土盤の上下へ押圧が加えられたもので、上下面に凹凸、側面にヒビ割れを認める。また787・791～797も上下面に押圧による凹凸やチヂレ目を残す。798は片面に凹凸面を残し、片面にナデを施す。794では上面に円形の高台痕を残してその周囲と側面に自然釉が掛かる。789は3箇所に円錐ピンの剥離痕を留める。

799・801は径16～17cmの大型品で、上下面に凹凸をもち、側面には上下からの押圧によるチヂレや窪みが見られる。799は上面に製品の高台痕をして周囲に自然釉が掛かる。801は明瞭な使用痕跡は認められないが、上面に菊花の刻印を認めるものである。807も上面に製品痕を残して周囲が変色する。800は径19.3cmの大型品で、中央に円孔をもつ。上下面はハケとナデ、側面はヨコナデ。上面に製品の高台痕を残して周囲に自然釉が掛かる。

なお今回出土したハマには、刻印、ヘラ記号、釘彫りを認めるものがある。759～761・764・769・782・801は花弁8の菊花、762・763・765～768・770は芯をもつ花弁8の菊花、772は花弁12の菊花と輪違い文、771は花弁16の菊花、775～777は山形文、778・780は如意頭文、773・774は「亜」状の文様。779は雷文を印刻する。また、783は印刻または釘彫りによる丸文、784は釘彫りによる丸文、785も並行線2本のヘラ記号をもつ。776は下面に印刻の山形文、上面に墨書を残すもので、使用痕を認めない。

(4) 焼き台、匣蓋、その他 (Fig.65・66)

802～806・808～811・813は大型の円盤状のものであるが、明確な使用痕跡を認めにくく、匣蓋又は焼き台の可能性をもつものである。802～806は径19～22cm台のものである。802は上下面に凹凸をもち、側面には上下からの押圧によるチヂレや窪みが見られる。一方、804～806は片面にナデと凹凸面、片面に静止糸切り痕を残すものである。また803は上下面にイタナデを施す。808～811は径30～34cmの大型のものである。808は上下面に凹凸面、側面にヨコハケが観察され、上面の一部には黒褐色の胎土をもつ製品の高台溶着痕を認める。811は上面から側面にかけて自然釉が掛かる。809は上下面ナデ、側面ハケであり、焼成による使用痕跡は認められないが、上面の一部にベンガラが薄く付着している。810は片面ナデと周縁のみに回転方向の擦痕、片面に静止糸切り痕、側面ヨコハケ。813は上面全体ににぶい黄橙色の粘土が溶着する。

焼き台（812）は扁平な楕円形を呈するものか。上下面は凹凸をもち、外面に自然釉が強く掛かる。焼き台（814）は中空で、コップを伏せた形態をもつものである。ロクロ成形で、内外面ロクロ

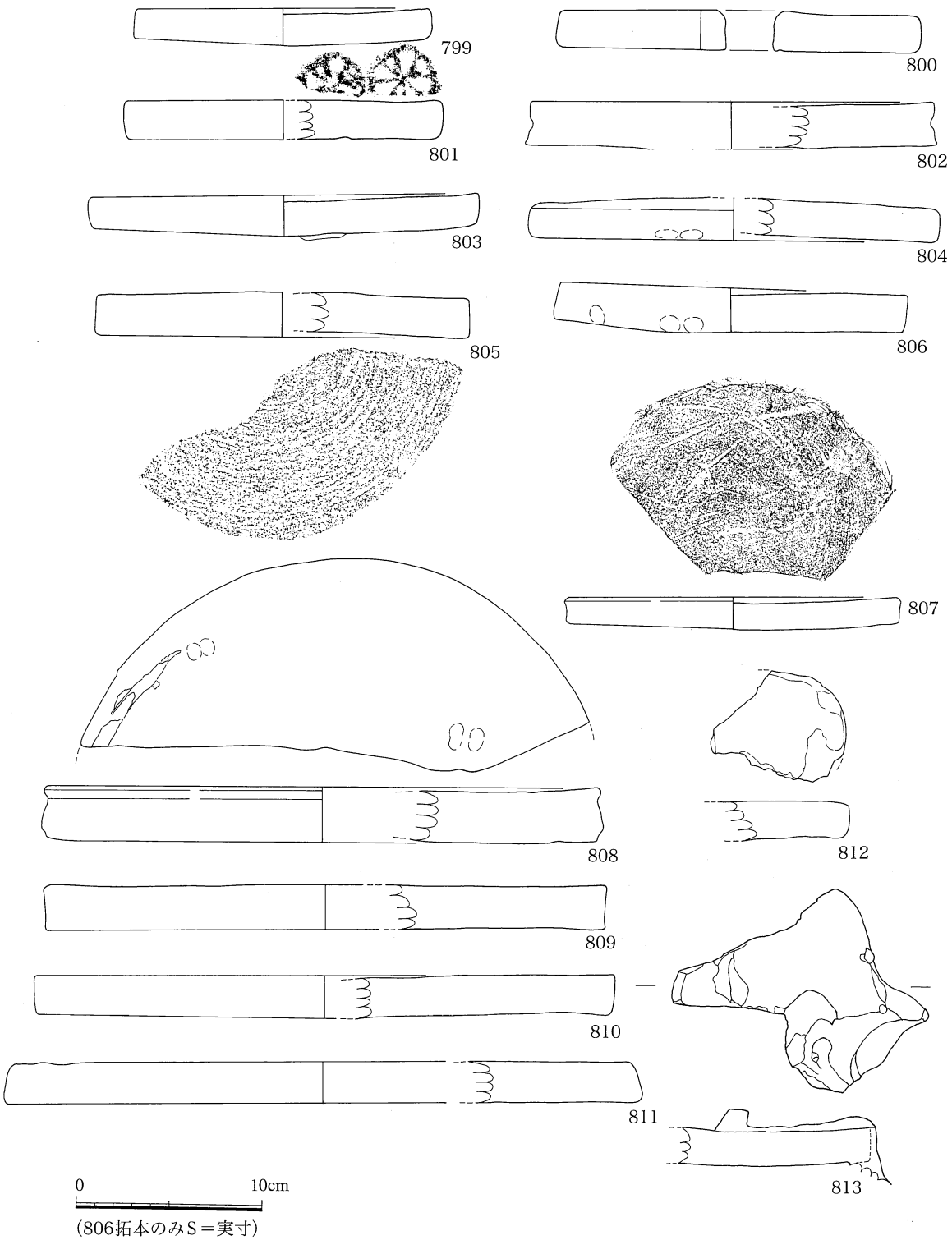


Fig.65　出土遺物実測図　窯道具—ハマ，匣蓋

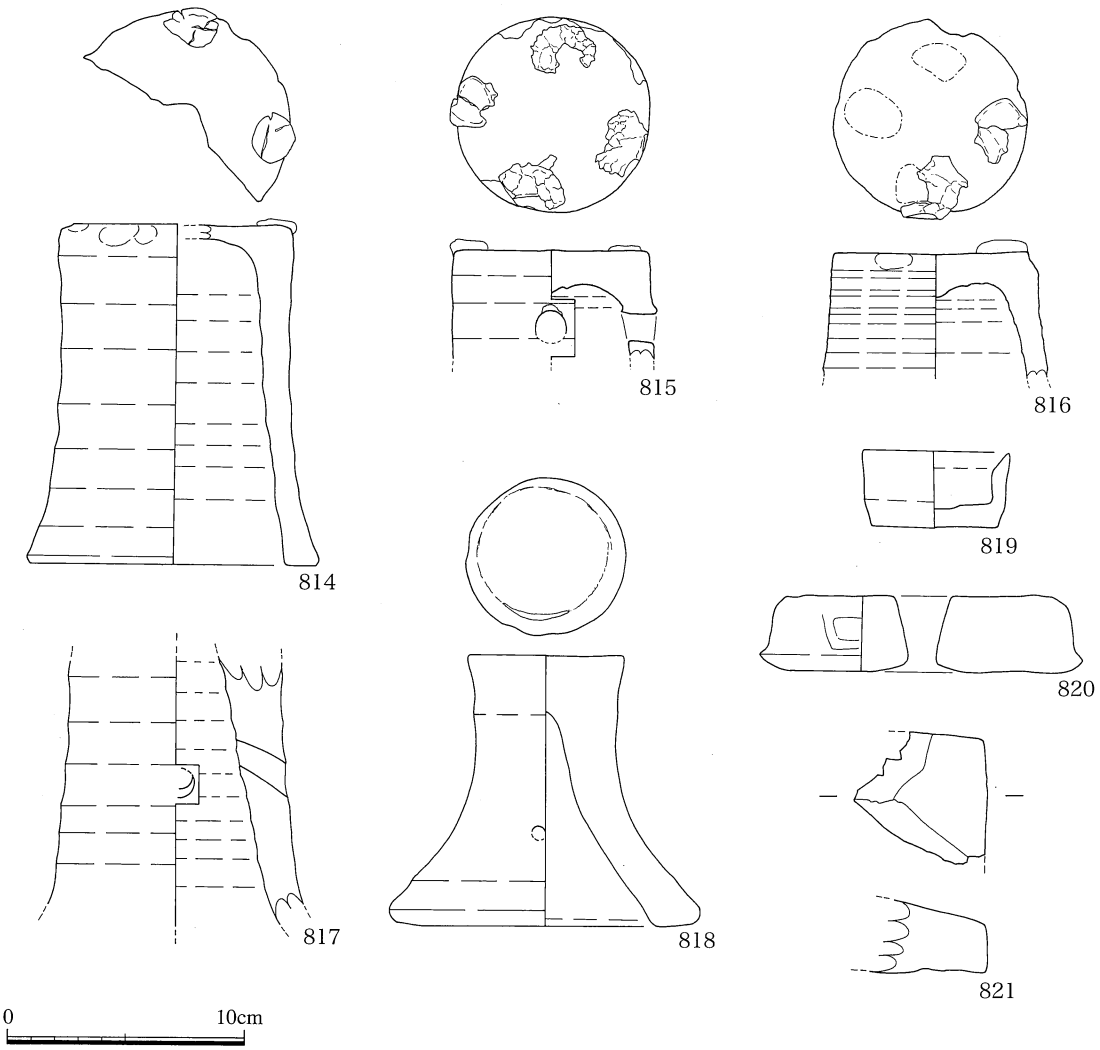


Fig.66　出土遺物実測図　窯道具―焼き台，チャツ，用途不明

目顕著。上面には回転糸切り痕が残る。脚部への穿孔の有無は不明である。上面に径5.3cmの高台痕を残して自然釉が掛かり、周縁に灰白色の扁平な粘土塊が付着する。また体部外面全体にも自然釉が掛かっている。焼き台（818）も中空で、外方に開く高い脚部をもつ。内外面回転ナデ。脚部中位に円孔を確認するが、穴数は不明である。上面には径5.4cmの高台痕を残す。815～817も814・818と同様のタイプのものと考えられる。815は上位に径1.3cmの円孔を穿つ。上面周縁の4箇所には灰白色の扁平な粘土塊が付着する。体部側面には自然釉が掛かる。816も同様のタイプであるが円孔の有無は不明である。上面周縁の2箇所には灰白色の扁平な粘土塊が付着し、2箇所に剥離痕が残る。817は脚部中位に円孔を穿ち脚部の2箇所に半截竹管を上下に組み合わせた刺突文を施す。

819はコップ状の形態をもつもので、口縁端部を細く尖らせる。口径は6cm。内外面は回転ナデ、外底は回転糸切りである。胎土は灰白色で、胎土中に長石の角礫を含む。器面は無釉で焼き締まり、内外面には自然釉が少量掛かる。チャツとして使用された可能性をもつが、出土数はこれ1点のみである。

820は焼き台か。手捏ね成形で、中央に径1～2cmの穿孔をもつ。上下面に凹凸とユビナデ、側面

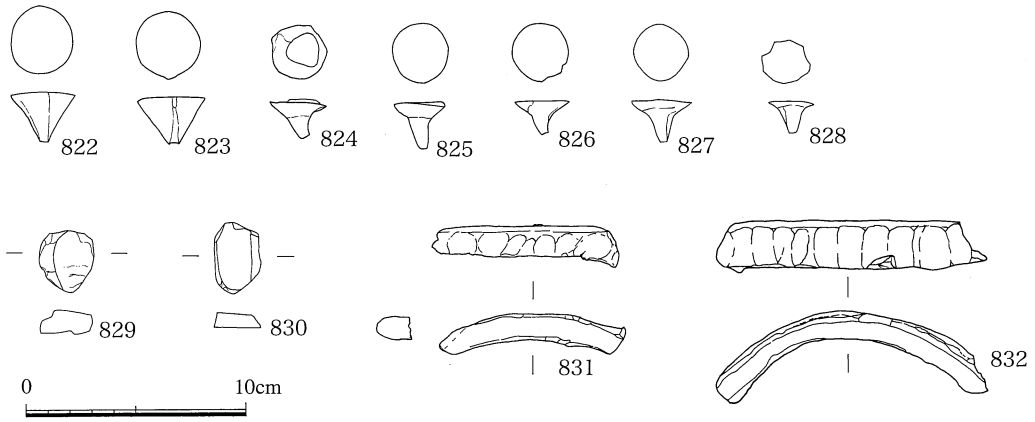


Fig.67　出土遺物実測図　窯道具—円錐ピン，その他

にユビオサエを認める。外面は灰白色を呈し、自然釉は認められない。上面に薄く煤が付着している。821は焼き台の一部になるものか。外面ナデで、外面全面に自然釉が強く掛かっている。

(5)円錐ピン、団子トチ、その他 (Fig.67)

円錐ピンは径1.0cmで円錐形のもの (822・823) と、径0.7～0.9cmで円錐の先端部分が細長く伸びるもの (824～828) がある。胎土は灰白色又はにぶい黄橙色である。

822・823は型作りの後、外面全体にナデを施すもので、ともに先端を欠損している。824～828は先端部周辺をユビオサエとユビナデし細長く尖らせている。このうち、825は先端部が残り使用痕が認められないが、その他は何れも先端部を欠損している。また、828は底部にはハマとみられる胎土の一部が溶着している。これらの円錐ピンについては単独で出土するものの他に、製品見込みへの溶着資料、ハマ下面の剥離痕跡などが確認されている。

829・830は団子トチである。ともに、灰白色の粘土を丸めた後、上下から押圧が加えられている。団子トチはトチン上面への溶着資料 (671・672・674・683～687) があり、製品とトチンとの間に挟まれて使用されている。

832は灰白色の粘土紐を約12cmの長さにちぎったもので、幅1.1cm、高さ2.4cm。側面を両側から連続的にユビオサエしている。下面には幅8mmの匣等別個体の剥離痕が残る。831も粘土紐を約8.5cmの長さにちぎったもので、側面を両側からユビオサエする。下面には幅8mmの別個体の剥離痕が残り、上面には灰色の粘土が溶着する。

(6)窯道具又は窯体の部材、型 (Fig.68)

833～838は用途不明であるが、833については長崎県波佐見町の古皿屋窯跡[(註1)]から類似した形態、使用痕跡のものが出土しており、窯の色見孔塞ぎ蓋の可能性が考えられる。833は頭部と外方に広がる脚部をもち、脚部中央に径4cm、深さ4.5cmの貫通しない円孔が設けられている。手捏ね成形で、外面はユビオサエ、ナデ。断面には頭部と脚部の接合跡が明瞭に残る。天井部径10.0cm、底径16.5cm、器高10.5cm。頭部の最大径は11.5cmである。胎土は灰白色。外面の色調も灰白色で、他の窯道具に見られるような外面の変色や自然釉の付着は認められない。頭部先端に灰釉が僅かに落ちている。834も同様の形態をもつ。上面中央に円孔を認めるが貫通するかどうかは不明である。天井部径9.7cm、頭部の最大径は10.3cmである。外面はユビオサエ、ナデ。外面は白く変色

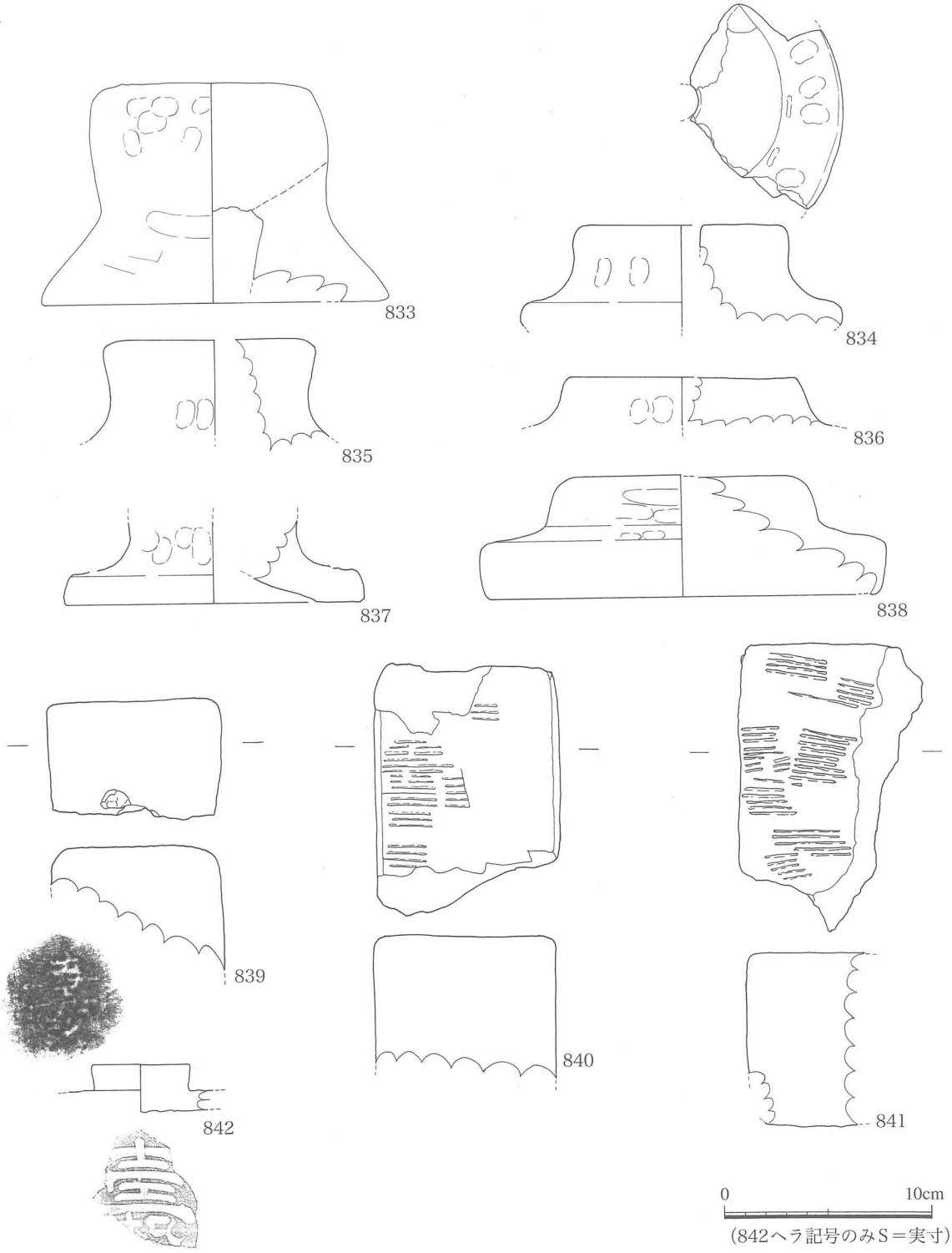


Fig.68　出土遺物実測図　窯道具，窯体の部材，型，用途不明

し、自然釉の付着は認められない。838は形態上の特徴、成形と器面調整が833に共通していることから、ここに位置付けたが底部中央を欠損しており、穿孔の有無は不明である。手捏ね成形で外面ユビオサエ、ナデ。天井部径11.0cm、底部径18.8cm、器高5.8cm。頭部の最大径は12.5cmである。胎土は断面、外面とも浅黄橙色で、自然釉の付着は認められない。835～837も同様の形態になるものか。いずれも自然釉は掛からず、836は外面が白っぽく粉状になる。

839は煉瓦又は焼き台か。839は全幅8.2cm。外面ナデ。外面はにぶい赤褐色、断面は灰白色に発色する。上面に赤褐色の粘土塊が溶着する。

840・841は煉瓦。尾戸窯に関連するものかどうか明らかでないが、被熱痕跡等からここに位置付けた。840は全幅8.7cm。外面ナデ、タタキ目。外面はにぶい橙色、断面は灰白色に発色する。外面は被熱赤変するが、自然釉は掛かっていない。841は外面ナデ、タタキ目。断面は灰白色、外面はにぶい橙色に発色し、部分的に白っぽく変色する。自然釉の付着等は認めない。

842は陽刻土器小皿の型である。把手は回転削りで作り出し、印刻面には細い針状の工具で印刻の「寿」字を削り出している。陶器質で、胎土は灰白色。把手と印刻面に白色の釉を薄く掛け、その他は無釉である。把手の上面には「寿」字のヘラ記号をもつ。

[註]

1)『古皿屋窯跡・鳥越窯跡』長崎県波佐見町教育委員会1995

Tab.1　遺物観察表 (1)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
140	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	10.5	7.1	5.1	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。円錐ピンが残存。碗2個体が溶着し、下側碗は焼け歪む。
1	TP1 上層	磁器 染付	小碗 丸形	10.0	5.2	4.0	—	断) 白	—	外面、蝶と草花文。透明釉は粗い貫入が入り明オリーブ灰色を帯びる。	肥前系。
2	TP1 上層	磁器 染付	小杯 丸形	6.8	4.0	3.0	—	断) 白	—	外面、草花文。高台外側二重圏線。	肥前系。
3	TP1 上層	陶器	小杯 丸形	5.2	2.9	2.1	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	—	外面に鉄絵、笹文。畳付外側に面取り。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。産不明
4	TP1 下層	磁器 染付	小杯 丸形	6.2	2.4	2.4	—	断) 白	—	外面、笹文。	肥前系。
5	TP1 上層	磁器 染付	小碗 折湾形	9.6	4.9	3.8	—	断) 白	—	外面、松、梅。高台外側圏線。	肥前系。
6	TP1 上層	磁器 染付	猪口 桶形	8.6	5.9	6.0	—	断) 白	—	外面、梅文。	肥前系。
7	TP1 上層	磁器 染付	皿 又は鉢	—	—	7.6	—	断) 白	—	高台外側二重圏線。見込みコンニャク印による五弁花。外底に渦福。	肥前産18C。
8	TP1 上層	磁器 染付	碗蓋	—	—	—	摘み径 4.2	断) 白	—	外面草花文。摘みに二重圏線。見込みコンニャク印による五弁花。	肥前産18C。
9	TP1 上層	磁器 染付	瓶	—	—	4.6	7.2	断) 白	—	外面、草花文。内面ロクロ目。	肥前系。
10	TP1 下層	陶器	鉢	16.2	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y5/2 断) 黄灰2.5Y4/1	石英・長石の細砂を含む。	外面に白化粧土象嵌による文字文。「思ひそ□□」。灰釉は暗オリーブ色。	産不明。
11	TP1 下層	陶器	皿 又は鉢	—	—	10.4	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白N8/	やや透明感あり。	内底に回転方向のヘラ彫り。高台脇に放射状の荒い鉋痕。高台内の一部まで施釉。灰釉c—明オリーブ灰色を帯びる半透明の釉。	産不明。
12	TP1 下層	陶器	擂鉢	35.5	—	—	—	外) にぶい赤褐 2.5YR4/3 断) 明赤褐 2.5YR5/6	長石の角礫粗砂多量、灰色系角粒粗砂含む。	口縁部内面擂目後ヨコナデ。口縁外面に凹線。内面擂目。外面ヨコナデ。	堺・明石系。
13	TP1 下層	陶器	擂鉢	—	—	18.4	—	外) にぶい赤褐 2.5YR4/3 断) 明赤褐 2.5YR5/6	長石の角礫粗砂多量、灰色系角粒粗砂含む。	内面櫛目。外面ヨコナデ。	堺・明石系。
14	TP1 上層	陶器	甕	21.6	—	—	—	外) 暗赤褐5YR3/3 内) 黒褐10YR2/2 断) 黄灰2.5Y4/1	灰黄色。石英・長石の角粒粗砂、黒色粒を含む。	体部外面に暗赤褐色の鉄釉を施釉し肩部から灰釉(褐釉)を流し掛け。体部内面に暗オリーブ灰色の釉を施釉。	丹波産18C。
15	TP1 上層	陶器	徳利	—	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰5Y6/1	石英細砂を多量、長石の粗砂を少量含む。	内面強いロクロ目。外面粗いナデ。内面無釉。灰釉—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	焼成後釘彫りによる「大」字。
16	TP1 上層	陶器	甕	39.0	—	—	—	外) 暗赤褐 2.5YR3/2 断) 褐灰10YR5/1	灰色。石英・長石の角粒粗砂、黒色粒を含む。	肩部に円形の双耳を貼付。体部外面に多段の凹線。内外面施釉。鉄釉—暗赤褐色の釉。	丹波産18C。
17	TP1 下層	陶器	漫瓶	13.7	—	12.8	19.4	外) オリーブ5Y5/4 断) 黄灰2.5Y6/1	石英・長石の角粒粗砂を含む。円孔多い。	把手は貼付。内面ロクロ目顕著。内面下位に荒いケズリ痕が残る。内面施釉。高台無釉。褐釉—オリーブ色の光沢の強い半透明の釉。	17・18同一個体。産不明。
18	TP1 上層	陶器	漫瓶	5.0	—	—	—	外) オリーブ5Y5/4 断) 黄灰2.5Y6/1	石英・長石の角粒粗砂を含む。円孔多い。	肩部紐手。内外面回転ナデ。内面施釉。褐釉—オリーブ色の光沢の強い半透明の釉。	17・18同一個体。産不明。
19	TP1 下層	陶器	蓋	笠部径 10.3	2.4	5.0	摘み径 1.4	外) にぶい黄橙 10YR6/4 断) 淡黄2.5Y8/3	石英・長石の角粒粗砂を多量に含む。黒色粒多い。円・裂孔多量。	外面に強いロクロ目。全体に錆釉を薄く掛ける。	産不明。
20	TP1 下層	土師質 土器	焙烙	—	—	—	—	外) にぶい黄褐 10YR5/3 断) にぶい橙 7.5YR6/4	石英・長石・灰黒色の角粒粗砂、金雲母を含む。	体部外面回転ナデ、下位にユビオサエ。体部内面～内底回転ナデ。外底に凹凸。	外面体部～口縁部に煤。関西産。
21	TP1 上層	土師質 土器	不明	—	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR7/2 断) 褐灰10YR6/ 1		内面にヘラ彫りによる文様。内外面ヨコナデ。底部は接合部で剥離。	産不明。
22	TP1 下層	瓦質 土器	焙烙か	17.4	3.9	12.0	—	外) 暗灰N 3/ 断) 灰黄2.5Y6/1	石英・長石の角粒粗砂を含む。	内外面ナデ・ミガキ。	外底に煤。産不明。
23	TP1 上層	土師質 土器	五徳か	27.0	6.8	22.0	—	外) にぶい褐 7.5YR5/4 断) にぶい褐 7.5YR5/4	長石の角礫、石英・長石・半透明橙色の粗砂、金雲母を含む。	粘土紐積み上げ成形。内外面回転ナデ。底部に糸切り痕。	関西産。内面と口縁端部に煤。
24	TP1 上層	瓦	軒丸瓦	瓦当径 15.8	文様区径 11.4	瓦当厚 2.0	—	外) 灰N4/ 断) 灰白2.5Y7/1	—	連珠三巴文。推定珠数11個。巴文の尾は断面ド—ム状。瓦当面にキラ粉を使用。瓦当裏面にユビオサエ・ユビナデ。	
25	TP1 上層	瓦	軒平瓦	瓦当径3.9	文様区径 2.5	平瓦厚 1.4	脇区幅3.0	外) 灰N4/ 断) 灰白2.5Y7/1	—	角内に「あ□」銘あり。中心飾りは三花文。茎は線刻一本で描く。両側に唐草文上下2反転を配する。	安芸か。
26	TP1 上層	瓦	軒平瓦	瓦当径4.2	文様区径 2.7	平瓦厚 1.4	脇区幅3.2	外) 暗灰N3/ 断) 黄灰2.5Y5/1	—	中心飾りは三巴文からなり両側に唐草文を配する。唐草は肉厚。	

Tab.2　遺物観察表 (2)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
27	TP2上層	磁器染付	鉢端反形	13.2	4.6	7.6	—	断) 白	—	口縁部稜花形。内面、窓内に宝文、竹文。外面、連続唐草文。見込みコンニャク印による五弁花。外底に渦福。	肥前産18C。
28	TP2下層	青花	中皿	26.8	—	—	—	断) 灰白N7/	—	白化粧土施釉後透明釉施釉。内面呉須による文様。	漳州窯系16C末～17C初頭。
29	TP2上層	磁器染付	碗蓋	—	—	—	摘み径3.8	断) 白	—	外面、酸化コバルトによる松・雲・鶴。雲は白化粧土で描く。摘み外側に印版による青海波文。摘み内に銘。	瀬戸・美濃又は関西系。近代以降。
30	TP2上層	磁器染付	皿	—	—	—	—	断) 灰白N8/1	—	内面、二重圏線と草花文か。	産不明。
31	TP2下層	青磁	中皿鍔縁形	23.0	—	—	—	外) 明緑灰5G7/1 断) 白	—	内面、片彫による芭蕉文。青磁結は淡緑色。	肥前産。
32	TP2上層	土器又は焼締陶器	杯	12.4	3.9	7.0	—	外) にぶい黄2.5Y6/3 断) 灰白N8/	a	内外面回転ナデ。外底回転糸切り。無釉。焼成堅致。	目痕なし。土器杯の焼成失敗品か。
33	TP2上層	土器又は焼締陶器	杯	13.0	4.5	7.0	—	外) にぶい黄褐10YR5/3 断) 灰白2.5Y7/1	a	内外面回転ナデ。外底回転糸切り。無釉。焼成堅致。内外面に自然釉が掛かる。	土器杯の焼成失敗品か。
34	TP2上層	陶器	水注	—	—	5.4	—	外) 黄 断) 灰白2.5Y8/1	—	高台の一箇所にア―チ状抉りあり。内面と高台施釉。光沢の強い黄色(レモン色)の釉、貫入が入る。	珉平焼19C。
35	TP3中層	磁器染付	中碗端反形	10.8	—	—	—	断) 白	—	外面、区画内に瓔珞文と花文、下位に雷文帯。口縁部内面に雷文帯。透明釉は粗い貫入が入る。	肥前系1820年代～19C中葉。
36	TP3中層	磁器染付	中碗広東形	—	—	—	—	断) 白	—	外面、暦手。口縁部内面二重圏線。	肥前産。
37	TP3中層	磁器染付	碗蓋	笠部径10.4	—	—	—	断) 白	—	広東形碗の蓋。外面暦手。摘み内井桁文。見込み文字文。	肥前産。
38	TP3中層	磁器染付	碗蓋	笠部径10.4	3.1	—	摘み径6.0	断) 白	—	広東形碗の蓋。見込み、岩波。高台外側二重圏線。透明釉は粗い貫入が入る。	肥前系。
39	TP3中層	磁器染付	中碗広東形	—	—	6.4	—	断) 白	—	高台に二重圏線。見込みコンニャク印による五弁花。外底に渦福。呉須は青灰色に発色。	肥前系1780年代～19C中葉。
40	TP3中層	磁器染付	小碗	—	—	3.6	—	断) 白	—	蛇の目高台。外面、水に笹。呉須は青灰色。	肥前系。
41	TP3中層	磁器染付	小杯	6.2	2.0	2.6	—	断) 白	—	外面、笹文。呉須は緑灰色。	肥前系。
42	TP3中層	青花	皿	—	—	—	—	断) 灰白N8/1	—	鍔縁形。芙蓉手。呉須は青色に発色。口縁端部の釉が部分的に剥げる。	景徳鎮窯系。
43	TP3中層	白磁	小皿菊花形	9.0	1.8	6.0	—	断) 白	—	型打ち成形。菊花形。釉は貫入が入る。	産不明。
44	TP3中層	磁器色絵	蓋物	10.0	—	—	—	断) 灰白N8/1	—	外面に赤・緑の上絵付による草花文。内面上位から口縁部にかけて無釉。	産不明。
45	TP3上層	陶器	蓋物	12.4	5.7	7.4	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白N8/	よく焼き締まり円孔を認めない。	外面に鉄絵、草花文。鉄絵は赤褐色に発色。口縁部無釉。灰釉は光沢の強い透明の釉で粗い貫入が入る。	産不明。
46	TP3上層	陶器	土瓶蓋	笠部径17.9	—	かえり径14.0	—	外) 灰白10YR7/1 断) 灰黄褐10YR6/2	黒色粒を多く含む。よく焼き締まり円孔を認めない。	かえり無釉。灰釉―光沢の強い透明の釉。	産不明。
47	TP3上層	陶器	擂鉢	—	—	10.4	—	外) 黒褐7.5YR2/2 内) にぶい赤褐2.5YR4/4 断) にぶい赤褐2.5YR4/4	赤色。石英・長石・灰色系角粒粗砂含む。	内底まで擂目。畳付外側面取り。内面と底部無釉。外面上半に黒褐色の鉄釉。	産不明。
48	TP3中層	瓦		瓦当径9.5	—	瓦当厚4.8	—	外) 暗灰N3/ 断) 黄灰2.5Y6/1	—		
49	TP3上層	瓦	軒丸瓦	瓦当径15.6	文様区径11.4	瓦当厚2.3	—	外) 暗灰N3/ 断) 灰N6/	—	連珠三巴文。推定珠数11個。巴文の尾は断面三角形。瓦当面にキラ粉を使用。瓦当裏面にユビオサエ・ユビナデ。	
50	TP3中層	瓦	棟飾瓦か	瓦当径7.0	文様区径4.8	瓦当厚1.9	—	外) にぶい赤褐5YR5/4 断) にぶい橙7.5YR7/4	—	連珠三巴文。土師質で外面はにぶい橙色に発色。	
51	TP4下層	磁器染付	小碗丸形	9.2	5.1	3.6	—	断) 白	—	外面コンニャク印による桐文。高台外側二重圏線。	肥前産18C。
52	TP4上層	磁器染付	中碗丸形	10.0	5.1	4.0	—	断) 白	—	くらわんか手。外面、雪輪草花文。高台外側二重圏線。	肥前産18C。
53	TP4上層	白磁	小碗丸形	8.6	4.9	3.4	—	断) 灰白N8/	—	釉は白濁。	肥前系。
54	TP4上層	青磁	皿	—	—	—	—	外) オリーブ灰10Y5/2 断) 灰白7.5Y8/1	—	青磁釉は緑灰色に発色。	産不明。
55	TP4下層	青磁染付	中碗	—	—	4.5	—	外) 明緑灰7.5GY7/1 断) 白	—	高台内に「大明年製」銘。見込み手描きによる五弁花。外面に青磁釉。	肥前産17C末～18C前半。

Tab.3　遺物観察表 (3)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量 口径	法量 器高	法量 底径	法量	色調	胎土	技法・特徴	備考
56	TP4 上層	磁器 染付	小碗 丸形	8.0	4.4	3.0	—	断) 白	—	外面、雨降り文。外面ロクロ目。高台外側二重圏線。	肥前産18C前半。
57	TP4 上層	磁器 染付	小杯 桶形	5.0	3.0	3.2	—	断) 白	—	外面、風水文、東屋。呉須は青色で滲む。	肥前産。
58	TP4 中層	磁器 染付	蓋物 腰張形	9.7	5.0	4.7	—	断) 白	—	外面、雪輪・竹・梅。高台外面二重圏線。呉須は青灰色。透明釉は貫入が入る。	肥前産。
59	TP4 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.4	2.7	—	摘み径4.0	断) 白	—	内外面に雲竜文。呉須は紺色。摘みに二重圏線。	肥前産。
60	TP4 上層	磁器 染付	水滴	—	3.6	—	注口径0.6	断) 白	—	型押成形。底部貼り合わせ。内面に直線方向のナデ。注口部径5.5㎜。内面無釉。呉須は青灰色。透明釉は淡青色を帯びる。	肥前産。
61	TP4 上層	陶器	小碗 半球形	8.4	5.6	3.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	剥離面はなめらかで砂粒を認めにくい。	外面に鉄絵。高台は鋭角的にケズリ出し高台内平坦。畳付外側に面取り。高台無釉。灰釉c—灰白色を帯びる光沢の強い透明の釉。	京都系か。
62	TP4 上層	陶器	小碗	—	—	2.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	文様の有無は不明。高台内を鋭角的に削り出す。畳付外側面取り。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	尾戸又は京都系。
63	TP4 中層	陶器	小皿	13.6	—	—	—	外) 明オリーブ灰 2.5GY7/1 断) 灰白7.5Y7/1	石英・長石の粗砂を含む。	灰釉は3～5㎜大の粗い貫入が入る。	産不明。
64	TP4 中層	陶器 色絵	碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	石英・長石の粗砂細砂、黒色粒を含む。	外面に緑色の上絵付。内面に緩やかなロクロ目。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	京都系か。
65	TP4 上層	陶器	擂鉢	37.0	—	—	—	外) 赤褐2.5YR4/6 断) 赤褐2.5YR4/6	赤色。石英・長石・灰色系角粒粗砂、長石角礫を含む。	口縁部内面擂目後ヨコナデ。口縁外面に凹線。	堺・明石系。
66	TP4 上層	陶器	擂鉢	36.6	—	—	—	外) 灰赤2.5YR4/2 断) にぶい赤褐 2.5YR4/4	灰赤色。石英・長石・雲母の角粒粗砂を含む。	口縁部内面擂目後ヨコナデ。口縁外面に凹線。体部外面ヨコナデ。	堺・明石系。
67	TP4 上層	陶器	擂鉢	34.0	14.2	15.0	—	外) にぶい赤褐 2.5YR4/4 断) 赤褐2.5YR4/6	赤色。石英・長石・灰色系角粒粗砂含む。	口縁部内面ヨコナデ後擂目。内面と内底に擂目。体部外面ヨコナデ。外底凹凸あり。	堺・明石系。
68	TP4 上層	陶器	擂鉢	35.2	13.9	15.0	—	外) 黒褐7.5YR3/1 内) にぶい赤褐 5YR4/3 断) 褐灰10YR4/1	石英・長石の角粒粗砂を含む。	口縁部内面擂目後ヨコナデ。内底に不定方向の擂目。内面と底部無釉。外面上半に黒褐色の鉄釉施釉。	産不明。
69	TP4 中層	陶器	甕	24.2	—	—	34.0	外) 灰赤2.5YR4/2 断) 灰赤2.5YR4/2	赤灰色。石英・長石の粗砂、橙色の風化礫を含む。	上位に多段の櫛目。内面ロクロ目顕著。焼締。	産不明。
70	TP4 上層	陶器	甕	17.0	—	—	29.5	外) 暗赤褐 2.5YR3/3 内) 灰オリーブ 5Y5/3 断) 灰黄2.5Y7/2	灰黄色。石英・長石の角粒粗砂、黒色粒を含む。	粘土紐積み上げ成形。体部外面に暗赤褐色の鉄釉を施釉し肩部から灰釉(褐釉)を流し掛け。体部内面に灰オリーブ色の釉を施釉。	丹波産18C。
71	TP4 上層	土師質土器	焙烙	32.0	—	—	—	外) にぶい褐 7.5YR5/4 断) にぶい褐 7.5YR5/4	石英・長石の角粒粗砂、金雲母、赤色風化礫、橙色半透明の粗砂を含む。	体部外面回転ナデ。内面回転ナデ。外底に凹凸。	外底と口縁部外面に煤。内底に斑状の焦げ痕。関西産。
72	TP4 上層	瓦	軒丸瓦	瓦当径 14.4	文様区径 11.0	瓦当厚2.1	—	外) 灰N4/ 断) 灰N6/	—	連珠三巴文。推定珠数11個。巴文の尾は断面ドーム状。	
73	TP4 上層	銅製品	煙管 吸口	全長 8.6	全幅 1.4	—	—	—	—	吸口。外面に文様あり。	
74	TP5 上層	青磁	中碗 半筒形	10.6	7.9	5.2	—	外) 明オリーブ灰 2.5GY7/1 断) 灰白N8/	—	口縁部外面に印刻による雷文帯．内面ロクロ目。光沢の強い明オリーブ灰色の釉。粗い貫入が入る。	産不明。
75	TP5 上層	磁器 染付	中碗 丸形	9.8	5.5	4.2	—	断) 白	—	外面コンニャク印による丸文・桐文。高台外側二重圏線。高台内渦福。呉須は青灰色。	肥前産18C。
76	TP5 上層	磁器 染付	中碗	—	—	4.8	—	断) 白	—	外面、草花文か。見込み手描きによる五弁花。高台内渦福。呉須は青色。	肥前産18C。
77	TP5	磁器 染付	小杯	6.4	2.3	2.6	—	断) 白	—	外面、笹文。呉須は暗緑灰色。	肥前系19C前半～中葉。
78	TP5 上層	磁器 染付	小杯	6.8	2.4	3.2	—	断) 白	—	外面、笹文。呉須は暗緑灰色。	肥前系19C前半～中葉。
79	TP5 上層	磁器 染付	中皿 丸形	21.0	2.8	14.0	—	断) 白	—	内面、岩に植物。外面、連続花唐草文。	高台内ハリ支え。肥前産17C末～18C前半。
80	TP5 上層	陶器	小碗 半筒形	7.8	5.8	4.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y8/1	石英・長石の粗砂を多く含む。裂孔あり。	外面に呉須による笹文。呉須は暗緑灰色に発色。高台無釉。灰釉は灰白色を帯びる。	産不明。
81	TP5 上層	陶器	小皿 平形	12.7	3.5	4.4	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	石英・長石の細砂を含む。黒色粒を多く含む。	高台脇に放射状の鉋痕が残る。灰釉と緑釉の掛け分け。外面下半無釉。灰釉—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。貫入なし。	内底に砂目。産不明。

Tab.4　遺物観察表 (4)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
82	TP5上層	陶器	蓋物丸形	12.4	5.3	5.5	—	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰白5Y7/1	—	口縁部外面に印刻による雷文帯．黒色の釉を象嵌。高台施釉。透明釉。	産不明。
83	TP5上層	磁器染付	鉢	31.0	—	—	—	断) 白	—	口縁部輪花形。内面、岩・松。外面、雲文か。	肥前産。
84	TP5上層	土師質土器	焙烙	25.0	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい褐 7.5YR5/4	石英・長石・雲母・灰色系鉱物の粗砂を含む。	内面回転ナデ。体部回転ナデ。底部との境にヘラによる面取り。外底チヂレ目と凹凸。	産不明。口縁部外面に弱い煤。
85	TP5上層	土師質土器	焜炉	11.6	—	—	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 淡黄2.5Y8/3	石英・長石・雲母・灰色系鉱物の粗砂を含む。	体部上位に径1.2㎝、1.9㎝の円孔あり(確認数4穴)。口縁部内面回転ナデ、体部外面ナデ。	使用痕なし。
86	TP5上層	土師質土器	焜炉	—	5.5	—	—	外) 灰白7.5Y8/2 内) 灰白7.5Y8/1 断) 明褐灰5YR7/2	石英・長石・灰色系鉱物の細砂、黒色粒を多量に含む。	体部に窓あり。体部内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底回転ケズリ。三足は削り出しによる。	産不明。
87	TP5上層	土師質土器	土人形か	—	—	—	—	にぶい黄橙 10YR7/2	a	外面ユビオサエ、ナデ。上面にヘラ彫りによる文様。	産不明。
88	TP5上層	瓦	軒丸瓦	瓦当径14.8	文様区径11.4	瓦当厚1.7	—	外) 暗灰N3/ 断) 黄灰2.5Y6/1	b	連珠三巴文。推定珠数12個。巴頭は大きい。尾は断面三角形。瓦当面にキラ粉を使用。瓦当裏面に直線方向のイタナデ。	
89	TP7	白磁	中碗平形	15.2	6.1	5.0	—	断) 白	v	透明の釉。	産不明。
90	TP6下層	磁器染付	猪口腰張形	8.4	5.7	3.8	—	断) 白	—	外面、梅文。高台外側二重圏線。呉須は青色。	肥前産。
91	TP6下層	磁器染付	火入れ	11.0	—	—	—	断) 灰白N7/	—	口縁部外面に帯線。内面無釉。呉須は青灰色。透明釉は白濁。	肥前系。
92	TP6下層	磁器染付	小碗	—	—	3.8	—	断) 白	—	外面、松文。高台内銘「明」か。呉須は青色。透明釉は貫入が入る。	肥前産17C後半～18C前半。
93	TP6下層	磁器染付	小碗丸形	7.8	4.3	2.8	—	断) 白	—	外面、雨降り文。外面ロクロ目。高台外側二重圏線。	肥前産18C前半。
94	TP6下層	磁器染付	小碗丸形	7.2	3.9	3.0	—	断) 白	—	高台外側二重圏線。呉須は青色。	肥前系。
95	TP6下層	磁器染付	仏飯器	—	—	3.7	—	断) 白	—	脚外側二重圏線。外底無釉。呉須は緑灰色。	肥前系。
96	TP6下層	磁器染付	小杯端反形	6.2	3.6	2.7	—	断) 白	—	外面、笹文。呉須は青色。	肥前産。
97	TP6下層	白磁	小杯端反形	6.2	3.7	2.6	—	断) 白	—	外面ロクロ目。白濁した釉。高台施釉。	肥前産。
98	TP6下層	磁器染付	小杯丸形	6.0	2.2	2.8	—	断) 白	—	外面、笹文。呉須は暗緑灰色。	肥前系19C前半～中葉。
99	TP6下層	陶器	小皿	—	—	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	石英・長石の粗砂を含む。黒色粒を含む。	高台無釉。淡い灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	内底に灰白色の粗砂からなる砂目。産不明。
100	TP6上層	陶器	擂鉢	30.8	—	—	—	外) 暗赤褐 2.5YR3/2 断) 明赤褐 2.5YR5/6	灰赤色。石英・長石角粒粗砂を含む。	口縁部内面擂目後ヨコナデ。口縁外面に凹線。体部外面ケズリ・ヨコナデ。	堺・明石系。
101	TP7	陶器	擂鉢	35.0	—	—	—	外) 暗赤褐 2.5YR3/2 断) 黄灰2.5Y5/1	灰赤色。石英・長石角粒粗砂を含む。		堺・明石系。
102	TP6下層	土師質土器	かわらけ	8.2	1.3	4.2	—	にぶい黄橙 10YR7/3	石英・長石・灰色系鉱物の細砂を含む。	内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	産不明。
103	TP6下層	土師質土器	かわらけ	6.9	1.6	3.2	—	にぶい橙 7.5YR7/4	石英・長石の細砂、灰色系粗砂，黒色粒を含む。	内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	産不明。
104	TP6下層	土師質土器	杯	8.4	2.6	4.0	—	にぶい黄橙 10YR7/3	石英・長石の細砂、灰色系粗砂，黒色粒を含む。	内外面回転ナデ。外底ヘラ切り。	産不明。
105	TP6下層	土師質土器	杯	9.2	3.2	5.0	—	にぶい黄橙 10YR7/3	石英・長石の細砂、灰色系粗砂，黒色粒を含む。	内外面回転ナデ。外底ヘラ切り。	産不明。
106	TP6下層	陶器	中碗丸形	11.9	9.1	5.6	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/2	a	口縁部外面に白化粧土象嵌による二重圏線と幾何文。内外面にごく緩やかなロクロ目。高台無釉。灰釉は著しく焼成不良で灰白色。	目痕なし。焼成不良。
107	TP4	陶器	中碗丸形	11.6	8.9	4.8	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	外面に白化粧土象嵌による二重圏線。その他の文様の有無は不明。高台内に小さい渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕4足。
108	TP4・6上層	陶器	中碗丸形	11.6	8.4	6.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面中位に削り出しによる幅広の凹線。高台無釉。灰釉c—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
109	TP1下層	陶器	中碗丸形	11.9	8.3	5.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる透明の釉。御本が入る。	目痕3足。焼成不良気味。
110	TP1上層	陶器	中碗丸形	12.1	8.4	5.6	—	外) 暗赤褐5YR3/3 断) 褐灰10YR6/1	b	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。褐色の半透明の釉で、部分的にオリーブ色・灰白色に発色。	目痕3足。円錐ピンが残存。内面片側に別個体碗が溶着。

Tab.5　遺物観察表 (5)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
111	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	12.4	9.1	5.4	—	外) にぶい赤褐 2.5YR4/3 断) 灰白10YR8/2	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。鉄釉と褐釉の掛け分け。体部に褐色の鉄釉。口縁部から体部上位に黒褐色～オリーブ色の半透明の釉を掛け分け、釉は部分的に黄白色に発色。	目痕3足。円錐ピンが残存。内面片側に別個体碗の口縁部片が溶着。
112	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	12.0	9.0	5.4	—	外) 黒褐5YR2/2 断) 灰黄2.5Y7/2	b	高台内に渦状の鉋痕。高台脇に抉りあり。高台無釉。鉄釉と褐釉の掛け分け。体部に黒褐色の鉄釉。口縁部から斜め方向に飴色の半透明の釉を掛け分け、釉は部分的に青白色に発色。	目痕あり。円錐ピンが残存。
113	TP6 上層	陶器	中碗 丸形	11.9	8.2	5.4	—	外) 暗赤褐5YR3/2 断) 灰白10YR7/1	a	外面下半削り後ナデ。高台内に浅い渦状の鉋痕。高台無釉。鉄釉と褐釉の掛け分け。体部に赤褐色の鉄釉。口縁部から黒褐色の釉を掛け分け、釉は部分的に白濁。	目痕3足。
114	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	11.4	8.5	5.2	—	外) 暗赤褐 2.5YR3/2 断) 灰白N7/	a	体部下位に荒い放射状の鉋痕。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。鉄釉と褐釉の掛け分け。体部に暗赤褐色の鉄釉。口縁部から飴色の半透明の釉を掛け分け、釉は部分的に青白色に発色。	目痕3足。
115	TP5 上層	陶器	中碗 筒丸形	10.8	8.8	5.5	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、稲束文。体部外面ロクロ目。高台外側に鉋痕が残る。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
116	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	10.9	7.9	5.1	—	外) 浅黄5Y7/3 断) 灰白5Y8/2	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—浅黄色を帯びる光沢の強い透明の釉。	目痕3足。
117	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	10.4	7.8	5.1	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	体部下半に粗いケズリ痕が残る。高台脇に抉りあり。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる光沢の強い透明の釉。	目痕3足。
118	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.8	7.8	4.8	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/2	a	体部下半ケズリ後ナデ。内底に楕円状のナデ。高台内に小さい渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉a—淡黄色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。片側が焼成不良。
119	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.0	7.4	4.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕なし。焼成時失敗品で器壁の一部が盛り上がる。
120	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	10.4	8.0	5.1	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	目痕3足。円錐ピン先端が残存。焼成時失敗品で釉は気泡を吹く。
121	TP6 下層	陶器	中碗 丸形	10.0	7.9	4.8	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/2	a	高台無釉。灰釉は焼成不良で灰白色。	目痕なし。片面が焼成不良で釉は粉状。
122	TP6 下層	陶器	中碗 丸形	10.6	8.0	4.4	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/2	a	外面に緩やかなロクロ目。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	目痕なし。焼成不良気味。
123	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	10.8	8.0	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/3	a	体部下位ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	目痕なし。
124	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.5	7.8	4.7	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半にケズリ痕が残る。高台内はやや鋭角的に削り出す。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる光沢の強い透明の釉。	目痕なし。
125	TP5 上層	陶器	中碗 丸形	10.8	7.6	4.7	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面ロクロ目。高台脇に抉りあり。高台内平坦。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
126	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	12.8	8.6	5.6	—	外) 暗赤褐5YR3/3 断) 灰白2.5Y7/1	b	高台脇に抉りあり。高台無釉。鉄釉と褐釉の掛け分け。体部に暗赤褐色の鉄釉。口縁部から体部上位に飴色の半透明の釉を掛け分け、釉は部分的に黄白色に発色。	目痕3足。
127	TP6 上層	陶器	中碗 丸形	12.4	8.5	5.6	—	外) 暗赤褐5YR3/2 断) 灰白10YR7/1	a	外面下半削り後ナデ。高台無釉。鉄釉と褐釉の掛け分け。体部に暗赤褐色の鉄釉。口縁部から黒褐色の釉を掛ける。	目痕あり。
128	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	12.5	8.3	5.9	—	外) オリーブ黄 5Y6/3 断) 灰白5Y7/1	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。鉄釉と褐釉の掛け分け。釉は焼成不良気味で体部が赤褐色、口縁部から体部上位はオリーブ色に発色。	目痕3足。焼成不良。
129	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	12.4	8.0	5.0	—	外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) 灰白10YR8/1	b	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。鉄釉と褐釉の掛け分け。体部に暗赤褐色の鉄釉。口縁部から体部上位に飴色の半透明の釉を掛け分け、釉は部分的に黄白色に発色。	目痕3足。
130	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	11.7	7.8	5.6	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰5Y6/1	a	外面上位にロクロ成形による幅広の凹線3条。体部下半に荒い鉋痕が残る。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる光沢の強い透明の釉。	目痕3足。焼け歪みあり。
131	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	11.2	7.6	5.4	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。内底直線方向のナデ。高台内に浅い渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。円錐ピンが残存。
132	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	11.8	8.0	5.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—明オリーブ灰色を帯びる光沢の強い透明の釉。	目痕4足。焼け歪みあり。

Tab.6　遺物観察表 (6)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
133	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	12.4	8.3	5.7	—	外) 灰白5Y7/1 断) 浅黄2.5Y7/3	b	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。釉は焼成不良気味で白濁。	目痕4足。
134	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.0	7.9	5.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。口縁部が焼け歪む。
135	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.4	8.4	5.6	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰黄2.5Y7/2	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に浅い渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。焼成時失敗品で亀裂が入る。
136	TP6 上層	陶器	中碗 丸形	12.6	8.1	5.7	—	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 黄灰2.5Y6/1	a	体部外面に緩やかなロクロ目。外面下半ケズリ後ナデ。高台内に浅い渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。内底に足付ハマと円錐ピンが溶着。
137	TP1 下層	陶器	中碗 丸形	12.6	8.3	5.4	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	目痕4足。円錐ピン先端が残存。焼成時失敗品で器壁の一部が盛り上がる。
138	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	12.2	8.3	5.2	—	外) 灰白N8/ 断) 灰白2.5Y7/1	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。釉は焼成不良気味で白濁。	目痕3足。円錐ピンが残存。内底に別個体の高台溶着痕が残る。
139	TP1 下層	陶器	中碗 丸形	11.8	7.8	5.8	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。円錐ピンが残存。内底に別個体陶器片が溶着。焼成時失敗品で釉は気泡を吹く。
141	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.1	7.9	5.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。2個体が溶着。
142	TP6 下層	陶器	中碗 丸形	12.8	7.7	5.8	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 黄灰2.5Y6/1	a	外面に鉄絵、注連縄文。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
143	TP6 上層	陶器	中碗 丸形	12.4	7.7	5.9	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰5Y6/1	a	外面に鉄絵。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
144	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	13.8	8.1	5.7	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、蕨文。体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
145	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	11.8	8.4	5.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、文字文。体部下半にケズリ痕が残る。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。口縁部が焼け歪む。
146	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	11.6	7.9	5.7	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、笹文。体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。口縁部が焼け歪む。
147	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	12.0	8.3	5.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白N7/	b	外面に鉄絵、笹文。体部外面緩やかなロクロ目。体部下位にケズリ痕。高台内に乱れの強い渦状の鉋痕。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	目痕3足。
148	TP5 上層	陶器	中碗 丸形	13.0	8.5	5.2	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y7/1	b	外面に鉄絵、笹文。外面下半にケズリ痕が残る。高台内に小さい渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	目痕4足。片側が焼成不良。
149	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	11.8	8.3	5.4	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、笹文。体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。円錐ピンが残存。内面片側に別個体碗の口縁部片が溶着。
150	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.3	8.1	5.6	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	b	外面に鉄絵、宝文。体部下半に荒いケズリ痕が残る。高台内に乱れた渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる光沢の強い透明の釉。	目痕3足。円錐ピンが残存。内底に別個体の高台片が溶着。
151	TP4 中層	陶器	中碗 丸形	12.7	8.6	5.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、宝文。内外面ロクロ目。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕あり。内底に円錐ピンと破損した別個体の陶器細片が多量に溶着。
152	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	12.0	7.9	5.6	—	外) 灰白7.5Y7/2 断) 灰白5Y/1	a	外面に鉄絵、宝文。高台内に渦状の鉋痕。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
153	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.0	8.2	5.5	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、稲束又は宝文。体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
154	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.8	8.1	5.9	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に浅い渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。口縁部が焼け歪む。
155	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.4	7.6	5.5	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
156	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.4	8.4	5.5	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰5Y6/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。円錐ピンが残存。焼け歪みあり。畳付けの三方に白色粗砂が付着。
157	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.2	8.1	5.6	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、竹文。体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。焼成時失敗品で器壁の一部が盛り上がる。
158	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.0	7.6	5.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵。体部下半にケズリ痕が残る。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉c—オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	目痕3足。口縁部が焼け歪む。

Tab.7　遺物観察表 (7)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
159	TP4 中層	陶器	中碗 丸形	10.6	7.6	4.8	—	外) 灰白10Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵と白化粧土による花文。花弁は白化粧土で描く。内外面緩やかなロクロ目。高台内渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
160	TP6 下層	陶器	中碗 丸形	11.2	8.0	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面多段のロクロ目。下半に多段の鉋痕が残る。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
161	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.4	7.3	4.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。外面片側が焼成不良。
162	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.1	7.0	5.0	—	外) 灰白7.5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—明オリーブ灰色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
163	TP6 上層	陶器	中碗 丸形	10.3	6.9	5.0	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
164	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	10.3	6.8	4.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	a	高台脇に抉りあり。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる透明の釉。御本が入る。	目痕の有無不明。
165	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.4	6.7	4.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。円錐ピンの先端が残存。焼成時失敗品で釉は気泡を吹く。
166	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	10.6	7.0	5.0	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白N7/	a	高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
167	TP1 下層	陶器	中碗 丸形	10.8	6.8	4.8	—	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。円錐ピン先端が残存。
168	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	11.3	7.2	5.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下位ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	目痕3足。焼成時失敗品で釉は気泡を吹く。
169	TP1 下層	陶器	中碗 丸形	11.2	7.0	4.8	—	外) 灰白10Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
170	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.2	7.1	4.7	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
171	TP5 上層	陶器	中碗 丸形	11.2	7.4	5.2	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。釉は焼成不良で白濁。	目痕なし。焼成不良。
172	TP6 上層	陶器	中碗 丸形	10.7	6.9	5.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面下半削り後ナデ。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕あり。焼成時失敗品で器壁の一部が盛り上がる。
173	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.0	7.2	4.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半にケズリ痕が残る。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。円錐ピンの先端が残存。
174	TP5 下層	陶器	中碗 丸形	10.2	6.9	5.5	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
175	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.2	7.3	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に浅い渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
176	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	10.4	7.3	5.1	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下位ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。円錐ピン先端が残存。
177	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.3	7.2	4.9	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。片側が焼成不良。
178	TP6 上層	陶器	中碗 丸形	10.2	7.3	5.0	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/2	b	体部外面に緩やかなロクロ目。外面下半ケズリ後ナデ。高台内に荒い渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	目痕あり。円錐ピン先端が残存。焼成不良。
179	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.4	7.3	5.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、竹文。体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。円錐ピン先端が残存。片側の内外面に別個体碗の口縁部片が溶着。
180	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.4	7.0	5.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。外面に別個体碗の口縁部片が溶着。
181	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.6	7.4	5.0	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白2.5Y7/1	a	高台無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕なし。外面に別個体碗の口縁部片が溶着。
182	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.6	7.1	5.0	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕なし。片側の外面に別個体碗が溶着。
183	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.5	6.9	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
184	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	10.4	—	—	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰5Y6/1	a	外面にロクロ成形による凹線3条。外面下位ケズリ後ナデ。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
185	TP2 上層	陶器	中碗 丸形	12.7	9.1	5.4	—	外) 黄灰2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y6/2	a	外面に鉄絵、竹文。体部外面ロクロ目顕著。高台内乱れの強い鉋痕。高台無釉。灰釉b—にぶい黄褐色を帯びる半透明の釉。	目痕4足。焼成時失敗品で内底の一部が盛り上がる。

Tab.8　遺物観察表 (8)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
186	TP2 上層	陶器	中碗 丸形	12.6	8.4	5.4	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 黄灰2.5Y6/1	a	外面に鉄絵と白化粧土による藤文。花弁は白化粧土で描く。体部外面多段の強いロクロ目。畳付外側を面取りしナデ。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉b—オリーブ色を帯びる半透明の釉。	目痕4足。内面と外面に別個碗の口縁部片が溶着。
187	TP2 上層	陶器	中碗 丸形	12.6	8.7	5.4	—	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 黄灰2.5Y6/1	a	外面に鉄絵、花文。外面に強い多段のロクロ目。高台内兜布状。高台無釉。灰釉b—オリーブ灰色を帯びる半透明の釉。	目痕4足。内底に白色系粗砂が落ちる。
188	TP2 上層	陶器	中碗 丸形	12.6	8.7	5.6	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 黄灰2.5Y6/1	a	外面に強い多段のロクロ目。文様の有無は不明。高台内乱れた渦状の鉋痕。	目痕4足。焼成時失敗品で器壁の一部が盛り上がる。
189	TP2 上層	陶器	中碗 丸形	12.4	8.9	5.4	—	外) オリーブ黄 5Y6/3 断) 黄灰2.5Y6/1	a	外面に鉄絵、笹文。外面に強い多段のロクロ目。畳付外側を面取りしナデ。高台内兜布状。高台無釉。灰釉b—オリーブ色を帯びる半透明の釉。	目痕4足。円錐ピンが残存。焼成時失敗品で内底の一部が気泡により盛り上がる。
190	TP5 下層	陶器	中碗 丸形	12.3	8.5	5.4	—	外) オリーブ黄 5Y6/3 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面に鉄絵。体部下位にケズリ痕が残る。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕4足。円錐ピン先端が残存。焼成時失敗品で内底の一部が盛り上がる。
191	TP6 上層	陶器	中碗 丸形	12.8	8.4	6.3	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面、白化粧土象嵌による二重圏線。文様の有無は不明。灰釉は焼成不良で白濁。	目痕なし。
192	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	13.3	8.7	5.6	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰黄2.5Y7/2	b	外面に鉄絵と白化粧土による梅文。花弁は白化粧土で描く。体部内外面に緩やかなロクロ目。高台脇に抉りあり。灰釉a-灰白色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	目痕3足。
193	TP4 中層	陶器	中碗 丸形	13.0	8.4	5.0	—	外) 灰白5Y7/1 断) 淡黄2.5Y8/3	a	外面に鉄絵。外面ロクロ目顕著。体部下半にケズリ痕が残る。高台内に乱れた渦状の鉋痕。高台無釉。釉は焼成不良で白濁。	目痕3足。焼成不良。
194	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	12.9	8.5	5.8	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰黄2.5Y7/2	b	外面に鉄絵、蕨文。高台内に渦状の鉋痕。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。片面は焼成不良で白濁。御本が入る。	目痕4足。外面片側が焼成不良。
195	TP5 上層	陶器	中碗 丸形	11.7	7.9	5.0	—	外) 灰白2.5Y8/2～2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面に鉄絵、注連縄文。体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	目痕3足。
196	TP5 上層	陶器	中碗 丸形	13.0	8.5	5.8	—	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、文字文。高台無釉。釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕あり。内底に別個体の砕片が多量に溶着。
197	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	12.8	8.5	5.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰黄2.5Y7/2	b	外面に鉄絵、笹文。体部外面緩やかなロクロ目。高台内に渦状の鉋痕。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	目痕5足又は4足。焼成不良気味。
198	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	11.7	7.7	5.5	—	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰7.5Y6/1	a	外面に鉄絵、草文。体部下位にケズリ痕が残る。高台内に渦状の鉋痕。灰釉a—灰色を帯びる透明の釉。焼成不良気味で部分的に白濁。	目痕3足。
199	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.4	7.9	5.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、宝珠と稲束。体部下半にケズリ痕が残る。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
200	TP5 上層	陶器	中碗 丸形	11.6	7.4	5.0	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/2	a	外面に鉄絵、花文。体部内面ロクロ目。体部下半ケズリ後ナデ。高台外側に鉋痕が残る。高台無釉。	目痕3足。焼成不良で釉は粉状。
201	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	12.2	7.3	5.5	—	外) 灰7.5Y7/1 断) 灰7.5Y6/1	a	高台無釉。灰釉b—オリーブ灰色を帯びる光沢の強い透明の釉。	目痕の有無不明。
202	TP1 下層	陶器	中碗 丸形	11.4	7.3	4.8	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	体部外面多段のロクロ目。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	目痕4足。
203	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.0	7.4	5.7	—	外) 黒2.5Y2/1 断) 灰白5Y7/1	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。褐釉—釉はオリーブ黒色に発色。	目痕4足。円錐ピンが残存。内面焼成不良。
204	TP6 上層	陶器	中碗 丸形	11.6	7.8	5.6	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白2.5Y7/1	a	体部外面下位にケズリによる強い稜を3段巡らす。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。円錐ピンが残存。
205	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	11.4	7.5	5.6	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 灰白2.5Y7/1	a	高台外側に鉋痕が残る。高台内に浅い渦状の鉋痕。高台無釉。褐釉—釉は焼成不良気味で褐色～黒色に発色。	目痕あり。
206	TP5 上層	陶器	中碗 丸形	11.6	7.9	5.0	—	外) 灰白10Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に荒い渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
207	TP1 下層	陶器	中碗 丸形	11.8	8.0	4.6	—	外) 灰白N7/ 断) 灰5Y6/1	a	外面緩やかなロクロ目。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。釉は焼成不良気味で白濁。	目痕あり。焼成時失敗品で内底に気泡が入り盛り上がる。
208	TP5 上層	陶器	中碗 丸形	11.5	8.0	4.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半にケズリ痕が残る。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
209	TP5 上層	陶器	中碗 丸形	11.0	7.7	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕なし。
210	TP5 上層	陶器	中碗 丸形	11.0	7.6	4.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。

Tab.9　遺物観察表 (9)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法･特徴	備考
				口径	器高	底径					
211	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	11.8	5.9	5.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	外面に鉄絵と白化粧土による梅文。花弁は白化粧土で描く。体部外面下位にケズリ痕が残る。高台施釉。灰釉b-オリーブ灰色を帯びる光沢の強い透明の釉。	目痕あり。
212	TP5 上層	陶器	中碗 丸形	10.8	6.3	4.6	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、松葉文。内面ロクロ目。高台施釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
213	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	—	6.3	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面、呉須による松葉文。内面ロクロ目。高台施釉。灰釉c—灰白色を帯びる半透明の釉。	
214	TP6 上層	陶器	中碗 丸形	11.2	6.3	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	高台内平坦。高台施釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
215	TP6 上層	陶器	中碗 丸形	11.4	6.6	5.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に多条の沈線。高台内平坦。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕なし。
216	TP4 上層	陶器	中碗 丸形	12.6	—	—	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面に多条の沈線。鉄釉。高台内平坦。	
217	TP7	陶器	中碗 丸形	11.0	6.6	5.4	—	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰黄2.5Y6/1	a	高台内平坦。高台施釉。灰釉a—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
218	TP5 上層	陶器	中碗 丸形	11.7	7.2	5.3	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵。外面上位にロクロ成形による幅広の凹線8条。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
219	TP1 上層	陶器	中碗 丸形	13.8	8.3	5.8	—	外) オリーブ褐 2.5Y4/4 断) 黄灰2.5Y6/1	b	外面ヘラ彫りによる印刻文。外面荒いロクロ目とケズリ痕。高台無釉。鉄釉の上に灰釉を重ね掛け、釉は半透明で飴色に発色。	目痕なし。
220	TP2 上層	陶器	中碗 丸形	13.8	8.3	5.4	—	外) 黄灰2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y6/2	a	体部外面にハケ状のナデ痕。畳付外側を面取りしナデ。高台外側まで施釉。灰釉a—オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
221	TP2 上層	陶器	中碗 丸形	13.6	8.7	6.0	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 浅黄橙 10YR8/3	b	外面にごく緩やかなロクロ目。外面下位にケズリ痕が残る。高台内平坦。灰釉は焼成不良で粉状。	目痕なし。焼成不良。
222	TP6 上層	陶器	中碗 腰張形	12.4	7.7	5.7	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 黄灰2.5Y6/1	a	鉄絵と白化粧土による梅文。花弁は白化粧土で描く。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
223	TP6 下層	陶器	中碗 腰張形	13.8	8.2	6.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	鉄絵と白化粧土による梅文。花弁は白化粧土で描く。高台内平坦。高台施釉。灰釉b—淡い灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
224	TP6 上層	陶器	中碗 腰張形	12.2	7.3	5.6	—	外) 灰白7.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面に鉄絵、蕨文。高台内に浅い渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕なし。高台の外面片側に灰白色粗砂が多量に付着。
225	TP1 上層	陶器	中碗 腰張形	12.2	7.7	5.6	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 淡黄2.5Y8/3	b	外面に鉄絵。体部下位にケズリ痕が残る。高台内に渦状の鉋痕。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。円錐ピン先端が残存。外面片側が焼成不良。
226	TP1 上層	陶器	中碗 腰張形	12.2	7.9	5.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、稲束文。高台内に渦状の鉋痕。釉は焼成不良で白濁。	目痕3足。円錐ピン先端が残存。内面に別個体碗の口縁部片が溶着。焼成不良、焼け歪みあり。
227	TP1 下層	陶器	中碗 腰張形	12.0	7.9	5.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面に鉄絵、笹文。体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
228	TP1 上層	陶器	中碗 腰張形	12.3	7.2	5.5	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白N7/	a	外面に鉄絵。体部下位にケズリ痕が残る。高台内荒い鉋痕。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。外面に別個体の陶器片が溶着。
229	TP5 上層	陶器	中碗 腰張形	11.4	7.2	5.4	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y8/2	a	外面に鉄絵、宝文。体部下半ケズリ後ナデ。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕あり。
230	TP1 上層	陶器	中碗 腰張形	12.4	7.2	5.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	高台脇に荒いケズリ痕が残る。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉c—灰白色を帯びる光沢の強い透明の釉。	目痕3足。外面に別個体の陶器片が溶着。
231	TP1 上層	陶器	中碗 腰張形	12.6	8.2	6.0	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
232	TP1 上層	陶器	中碗 腰張形	12.4	7.7	5.6	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
233	TP1 上層	陶器	中碗 腰張形	12.2	7.4	5.4	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	体部外面に緩やかなロクロ目。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕あり。
234	TP6 下層	陶器	中碗 腰張形	11.4	6.7	4.8	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
235	TP1 上層	陶器	中碗 腰張形	12.7	7.1	5.4	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	高台脇に荒いケズリ痕が残る。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕あり。円錐ピン先端が残存。
236	TP6 上層	陶器	中碗 腰張形	13.2	8.3	6.2	—	外) 灰白7.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	a	高台無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕なし。外面に別個体碗の口縁部片が溶着。焼成時失敗品で器壁の一部が盛り上がる。
237	TP6 上層	陶器	中碗 腰張形	10.4	6.7	5.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/2	a	体部外面に緩やかなロクロ目。体部下位にケズリ痕が残る。高台脇に抉りあり。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。

Tab.10　遺物観察表 (10)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
238	TP2 上層	陶器	中碗 腰張形	10.3	7.0	4.0	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に呉須と鉄絵による花文。体部外面ロクロ目。高台脇に抉りあり。高台内に緩い渦状の鉋痕。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	目痕4足。外面に2個体碗の口縁部片が溶着。
239	TP4 上層	陶器	中碗	12.0	8.7	5.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面、白化粧土象嵌による二重圏線と印刻によるクルス文。体部外面に緩やかなロクロ目。体部下半ケズリ後ナデ。高台内に小さい渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
240	TP6 下層	陶器	中碗	12.4	8.2	5.6	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 淡黄2.5Y8/3	a	外面ロクロ目。高台無釉。灰釉は焼成不良で灰白色。	目痕なし。焼成不良。
241	TP 7	陶器	中碗 半筒形	12.4	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に呉須絵、帯線と松・竹。呉須は緑灰色に発色。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
242	TP4 上層	陶器	中碗	11.4	6.3	4.9	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台施釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕あり。
243	TP1 上層	陶器	中碗	11.6	6.1	5.0	—	外) 灰白N7/ 断) 灰白N7/	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。釉は焼成不良気味で白濁。	目痕なし。
244	TP4 上層	陶器	中碗	11.7	6.6	5.0	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 淡黄2.5Y8/3	b	高台施釉。灰釉a—淡黄色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
245	TP3 中層	陶器	中碗 広東形風	11.0	6.4	5.5	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面に鉄絵、草文又は菖蒲文。外面に荒いケズリ痕が残る。高台無釉。	目痕あり。
246	TP5 上層	陶器	中碗	11.8	—	—	—	外) 灰5Y6/1 断) 灰白5Y7/1	b	外面に鉄絵と白化粧土による松葉と梅文。花弁は白化粧土で描く。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕あり。
247	TP5 上層	陶器	中碗 杉形	11.0	6.0	4.4		外) にぶい黄 2.5Y6/3 断) 灰白N7/	a	内面上位に1条沈線。口縁部外面に強いナデ。高台施釉。鉄釉は焼成不良。	焼成不良。
248	TP6 上層	陶器	中碗 端反形	11.6	7.7	5.0	—	外) 灰オリーブ 5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵。外面上位にロクロ成形による幅広の凹線3条。高台無釉。灰釉c—オリーブ灰色を帯びる光沢の強い透明の釉。	目痕あり。
249	TP5 下層	陶器	中碗 端反形	12.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	b	外面ロクロ目顕著。灰釉は焼成不良で白濁。御本が入る。	焼成不良。
250	TP5 上層	陶器	中碗 端反形	10.2	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、宝文と圏線。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
251	TP5 上層	陶器	中碗 端反形	10.4	5.3	3.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
252	TP4 中層	陶器	中碗 端反形	10.2	6.8	4.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
253	TP4 下層	陶器	中碗 甕形	9.6	7.3	4.2	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	外面上位にロクロ成形による幅広の凹線8条。高台内兜巾状。高台脇に抉りあり。高台無釉。灰釉a—灰白色の白濁した釉。	目痕の有無不明。
254	TP5 上層	陶器	中碗	11.5	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面、白化粧土象嵌による二重圏線と格子状の文様、印刻による花文。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	外面に外面に別個体の口縁部片が溶着。
255	TP5 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰黄2.5Y7/2	a	外面に白化粧土象嵌による二重圏線と印刻の菊花・クロス。内面に緩やかなロクロ目。薄手の作り。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	
256	TP5 上層	陶器	中碗	11.0	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	b	外面に白化粧土象嵌による二重圏線。その他の文様の有無は不明。内外面に緩やかなロクロ目。灰釉は焼成不良で白濁。	焼成不良。
257	TP5 上層	陶器	中碗	10.6	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	b	外面に白化粧土象嵌、印刻による雲文。内面に緩やかなロクロ目。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
258	TP4 中層	陶器	中碗	10.8	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面に白化粧土象嵌による暦手文。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	
259	TP5 上層	陶器	中碗	12.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰黄5Y7/2	a	外面、白化粧土象嵌による圏線と幾何文、暦文。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
260	TP5 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 淡黄2.5Y8/3	a	外面に白化粧土象嵌による櫛垣文。内面にロクロ目。灰釉は焼成不良で白濁。	焼成不良。
261	TP1 下層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白N7/1 断) 黄灰2.5Y6/1	a	外面に白化粧土象嵌、陰刻による花クルス文。灰釉b—透明の釉。	外面に別個体陶器片の溶着痕あり。
262	TP5 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	b	外面に白化粧土象嵌、印刻による雲文。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
263	TP5 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	内側の個体は白化粧土象嵌による暦手文。外側の個体は無文か。	2個体の胴部片と口縁部片が溶着。
264	TP4 下層	素焼き	中碗	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	a	外面にヘラ彫りによる暦手文。素焼き。無釉。	象嵌文碗の未成品か。
265	TP5 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白10Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	b	外面に白化粧土象嵌による暦手文。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	

Tab.11　遺物観察表 (11)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
266	TP5 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	外面に白化粧土象嵌による二重圏線。その他の文様の有無は不明。内面にごく緩やかなロクロ目。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
267	TP5 上層	陶器	中碗	11.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に灰釉による幾何文、無文部分は露胎。内面灰釉。灰釉は明オリーブ灰色。	内面が焼成不良。
268	TP6 下層	陶器	中碗	14.4	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面鉄絵と白化粧土による草花文。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	焼成時失敗品で釉は気泡を吹く。
269	TP7	陶器	中碗	12.2	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面に鉄絵と白化粧土による藤文。花弁は白化粧土で描く。外面に多段のロクロ目。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
270	TP6 上層	陶器	中碗	12.0	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	鉄絵と白化粧土による草花文。花弁は白化粧土で描き分ける。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
271	TP1 上層	陶器	中碗	11.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/2	a	鉄絵と白化粧土による梅文、松葉文。松葉は鉄錆、梅は白化粧土で描き分ける。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
272	TP5	陶器	中碗	12.4	—	—	—	外) 灰5Y6/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵と白化粧土による花文。花弁は白化粧土で描く。内外面緩やかなロクロ目。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
273	TP1 上層	陶器	中碗	13.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰黄2.5Y7/2	b	鉄絵と白化粧土による梅文。枝は鉄錆、花弁は白化粧土で描き分ける。灰釉b—光沢の強い透明の釉。	
274	TP6 下層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/2	b	鉄絵と白化粧土による梅文。梅の花弁は白化粧土で描き分ける。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
275	TP1 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	b	鉄絵と白化粧土による梅文。枝は鉄錆、花弁は白化粧土で描き分ける。灰釉は焼成不良で白濁。	焼成不良。
276	TP1 上層	陶器	中碗	6.0	—	—	—	外) 黒褐色10YR2/2 断) 黄灰2.5Y6/1	a	外面ヘラ彫りによる文様。鉄釉に口縁部から暗オリーブ色の灰釉を重ね掛けする。	276・277同一個体。
277	TP1 上層	陶器	中碗	—		6.0	—	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰白2.5Y7/2	a	外面ヘラ彫りによる文様。鉄釉に口縁部から暗オリーブ色の灰釉を重ね掛けする。高台無釉。	目痕3足。
278	TP1 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白7.5Y8/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面に丸彫りによる多段の稜線と陰刻文様。灰釉は焼成不良気味で白濁。	焼成不良気味。
279	TP6 下層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	外面に鉄絵と白化粧土による雲文。内面にごく緩やかなロクロ目。灰釉b—光沢の強い透明の釉。	
280	TP1 上層	陶器	中碗	—	—	6.0	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 浅黄2.5Y7/3	a	外面下位にケズリによる幅広の凹線。高台内に渦状の鉋跡。高台無釉。灰釉b—灰黄色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
281	TP4 上層	陶器	中碗	12.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	外面にロクロ成形による凹線5条。高台無釉。灰釉c—浅黄色を帯びる光沢の強い透明の釉。	
282	TP2 上層	陶器	中碗	13.4	—	—	—	外) 黄灰2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y6/2	a	外面に呉須と鉄絵による若松文。体部外面にハケ状のナデ痕。釉は焼成不良で白濁。	焼成不良。
283	TP6 下層	素焼き	中碗	13.8	—	—	—	浅黄橙7.5YR8/3	b	外面に鉄絵、松文。未焼成で鉄錆は赤褐色に発色。	素焼き。
284	TP1 上層	陶器	中碗	12.4	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	b	外面に鉄絵による松葉文。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
285	TP2 上層	陶器	中碗	12.8	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y5/2 断) 灰5Y6/1	a	外面に鉄絵、竹文。外面ロクロ目。灰釉b—灰オリーブ色の半透明の釉。	
286	TP6 上層	陶器	中碗	12.8	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	外面に鉄絵、笹文。内外面ごく緩やかなロクロ目。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
287	TP4 上層	陶器	中碗	10.8	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、竹文。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
288	TP5 上層	陶器	中碗	12.4	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	b	外面鉄絵、草花文。内面ロクロ目。高台無釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。御本が入る。	焼成不良。
289	TP4 上層	陶器	中碗	12.4	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、花文。外面ロクロ目。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
290	TP1 上層	陶器	中碗	11.2	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、葦文。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
291	TP1 上層	陶器	中碗	10.6	—	—	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 淡黄2.5Y8/3	b	外面に鉄絵、草花文か。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
292	TP6 下層	陶器	中碗	約12.4	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	外面に鉄絵、草花文。内外面ごく緩やかなロクロ目。灰釉b—光沢の強い透明の釉。	焼け歪みあり。
293	TP4 中層	陶器	中碗	12.4	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 浅黄2.5Y7/3	a	外面に鉄絵。灰釉b—淡黄色を帯びる半透明の釉。片面は焼成不良で釉が白濁。	片面が焼成不良。

Tab.12　遺物観察表 (12)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
294	TP2 上層	陶器	中碗	11.8	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1～にぶい橙7.5YR7/3	b	外面に鉄絵、網代文。鉄錆はオリーブ黄色に発色。外面ロクロ目。高台無釉。灰釉は焼成不良気味で灰白色。	外面片側に別個体との溶着痕あり。焼成不良気味。
295	TP1 下層	陶器	中碗	10.8	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰黄2.5Y7/2	a	外面に鉄絵。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる光沢の強い透明の釉。	
296	TP1 上層	陶器	中碗	11.2	—	—	—	外) 灰5Y6/1 断) 灰黄2.5Y6/2	a	外面に鉄絵、丸文。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
297	TP5 上層	陶器	中碗	13.4	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	b	外面に鉄絵。内外面ロクロ目。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	
298	TP4 中層	陶器	中碗	13.0	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/2	b	外面に鉄絵、凧。内面ごく緩やかなロクロ目。灰釉a—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。御本が入る。	
299	TP6	陶器	中碗	13.0	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/2	b	外面に鉄絵。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
300	TP6 上層	陶器	中碗	12.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	外面に鉄絵による宝文。灰釉c—灰白色を帯びる光沢の強い透明の釉。	
301	TP6 上層	陶器	中碗	—	—	5.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面に鉄絵、宝珠と笠文。高台内に浅い渦状の鉋痕。高台脇に抉りあり。高台無釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	目痕3足。焼成不良気味。
302	TP5	陶器	中碗	11.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	外面に鉄絵、文字文。外面下位に粗いケズリ痕。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕あり。
303	TP4 中層	陶器	中碗	13.4	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、宝珠と稲束文。外面に荒いロクロ目。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
304	TP6 下層	陶器	中碗	—	—	5.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	外面に鉄絵、注連縄文。内面にごく緩やかなロクロ目。高台内に渦状の鉋痕。灰釉a—灰オリーブ色を帯びる透明の釉．御本が入る。	目痕3足。
305	TP4 上層	陶器	中碗	—	—	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵(注連縄文か)。内面ロクロ目。外面下位に荒いケズリ痕が残る。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕3足。
306	TP4	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) にぶい黄橙10YR7/2	b	外面に鉄絵、注連縄文。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	
307	TP6 上層	陶器	中碗	—	—	5.4	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	a	外面に鉄絵、花文。外面下半ケズリ後ナデ。高台無釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	焼成不良。
308	TP6 下層	陶器	中碗	—	—	5.7	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 浅黄橙10YR8/3	b	外面に鉄絵、松葉文。外面下半にケズリ痕が残る。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
309	TP6 下層	陶器	中碗	—	—	5.3	—	外) 灰白5Y7/2 断) 黄灰2.5Y4/1	a	外面鉄絵又は呉須による圏線と文様。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	目痕なし。焼成不良。
310	TP4 上層	陶器	中碗	11.2	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	灰釉c—濃い灰オリーブ色の半透明の釉。	外面に外面に別個体の鉄絵碗口縁部片が溶着。
311	TP6 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰5Y6/1 断) 灰白5Y7/1	b	外面に鉄絵、笹文。内面ごく緩やかなロクロ目。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
312	TP6 下層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	呉須と鉄絵による若松文。葉は呉須、先端のみ鉄錆で描き分ける。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
313	TP1 下層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	a	呉須と鉄絵による注連縄文。ウラジロは呉須で描く。呉須は暗緑灰色に発色。外面に多段のロクロ目。灰釉b—透明の釉。	
314	TP1 上層	陶器	中碗	12.5	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい黄橙10YR7/2	a	外面に呉須と鉄絵による草花文。草は呉須、花弁は鉄錆で描き分ける。外面ロクロ目。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
315	TP1 上層	陶器	中碗	11.8	—	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y7/2	b	呉須と鉄絵による草花文。草を呉須、花を鉄絵で描き分ける。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる光沢の強い透明の釉。	
316	TP1 上層	陶器	中碗	11.4	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/2	b	外面に呉須による文様、山水文か。呉須は青灰色に発色。灰釉は焼成不良気味で白濁。	焼成不良気味。
317	TP4 上層	陶器	中碗	11.0	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	外面、呉須による葵文。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
318	TP5 上層	陶器	中碗	13.6	—	—	—	外) 灰白10YR8/2 断) 浅黄橙10YR8/3	a	外面に呉須絵。薄手の作り。内外面ロクロ目。灰釉は焼成不良で白濁。	焼成不良。
319	TP5 上層	陶器	中碗	10.2	—	—	—	外) 灰白N8/1 断) 灰白5Y7/1	b	外面に呉須絵、宝珠・凧。灰釉は焼成不良で白濁。	焼成不良。
320	TP6 下層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/1 断) にぶい黄橙10YR7/3	b	外面に呉須絵、宝珠・笠。内面緩やかなロクロ目。灰釉は焼成不良で白濁。	外面上位に別個体の陶器片が溶着。焼成不良。
321	TP5 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白10YR7/1 断) にぶい黄橙10YR7/2	b	外面に呉須象嵌による、印刻の桐文。外面下位無釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	焼成不良気味。

Tab.13　遺物観察表 (13)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
322	TP5 上層	陶器	中碗	—	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	b	外面に呉須絵、植物文。呉須は暗青灰色に発色。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	
323	TP6 下層	陶器	中碗	10.2	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰黄2.5Y7/2	a	薄手の作り。外面に多段の強いロクロ目。灰釉a—灰白色を帯びる透明の釉。	
324	TP1 上層	陶器	中碗	—	5.6	—	—	外) にぶい褐 7.5YR5/3 断) にぶい黄橙 10YR7/2	b	高台施釉。鉄釉—焼成不良でにぶい褐色。	焼成不良。
325	TP5 上層	陶器	中碗	—	—	4.8	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	b	高台内渦を装飾的に削り出す。高台無釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	目痕無し。外面片側が焼成不良。
326	TP6 下層	陶器	中碗	—	—	6.0	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 浅黄2.5Y7/3	c	外面下位にケズリ痕が残る。畳付外側を面取る。高台内兜巾状。内底凸状。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	焼成不良。
327	TP7	陶器	中碗	—	—	5.3	—	外) にぶい黄橙 10YR7/2 断) 浅黄橙10YR8/4	a	高台外面に強いロクロ目。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	内底に浅黄色の胎土片が多量に溶着。焼成不良気味。
328	TP6 下層	陶器	中碗	—	—	4.8	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	内底に円錐ピンとハマの一部が溶着。
329	TP6 上層	素焼き	小碗 筒丸形	9.0	6.9	4.2	—	淡黄2.5Y8/3	b	内外面回転ナデ。外面下半ケズリ後ナデ。高台内渦状の鉋痕。	素焼き。
330	TP6 下層	陶器	小碗 丸形	9.5	7.5	4.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	内面ロクロ目。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕なし。
331	TP1 上層	陶器	小碗 丸形	8.3	6.4	4.6	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白25Y7/1	a	高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕あり。
332	TP6 上層	陶器	小碗 丸形	9.4	6.4	4.8	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	体部外面に緩やかなロクロ目。高台内に小さい渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色の白濁した釉。	目痕なし。
333	TP6 上層	陶器	小碗 丸形	9.4	6.4	4.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	体部下位にケズリ痕が残る。高台内に浅い渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
334	TP6 上層	陶器	小碗 丸形	8.8	5.7	4.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	体部下半ケズリ後ナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	目痕なし。底部が焼け歪む。
335	TP6 下層	陶器	小碗 丸形	9.2	6.8	4.4	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	呉須による宝珠、笠文。呉須は緑灰色に発色。外面下位に鉋痕が残る。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕なし。
336	TP1 上層	陶器	小碗 腰張形	9.8	6.0	4.6	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 褐灰10YR6/1	a	高台無釉。鉄釉は体部褐色、口縁部は黒褐色に発色。	目痕なし。
337	TP6 下層	素焼き	小碗 丸形	9.6	6.4	4.8	—	灰白10YR8/2	b	内外面回転ナデ。外面下半ケズリ。高台内渦状の鉋痕。	素焼き。
338	TP6 上層	陶器	小碗 呉器形	9.2	5.6	4.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰黄2.5Y7/2	a	高台内僅かに凸状。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。内底に黒褐色の粘土塊が溶着。
339	TP5 上層	陶器	小碗 丸形	9.6	4.7	4.6	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	b	高台内兜巾状。高台施釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。外面は焼成不良で白濁。御本が入る。	目痕3足。焼成不良。
340	TP5 上層	陶器	小碗 丸形	8.2	4.9	4.4	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	高台施釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
341	TP5 上層	陶器	小碗 端反形	—	—	4.0	—	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	外面に緩やかなロクロ目。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕無し。
342	TP6 下層	陶器	小碗 端反形	9.4	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	灰釉は焼成不良気味で白濁。	
343	TP1 上層	陶器	小碗 端反形	9.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y8/1	a	外面に呉須による二重圏線と唐草文。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
344	TP4 中層	陶器	小碗 端反形	9.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面、呉須による圏線と花唐草文。花弁は鉄錆で描く。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
345	TP5 下層	陶器	小碗	—	—	4.2	—	外) 灰白10YR8/1 断) 灰白10YR8/1	b	高台施釉。釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
346	TP5 下層	陶器	小碗 杉形か	—	—	3.7	—	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰白2.5Y7/1	a	高台施釉。鉄釉—暗赤褐色の釉。	目痕なし。
347	TP5 下層	素焼き	小碗 丸形	8.2	4.1	4.2	—	灰白2.5Y8/1	b	外面ロクロ目顕著。高台内渦状の鉋痕。	素焼き。
348	表採	陶器	小杯 丸形	7.6	3.0	4.0	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
349	TP4 下層	陶器	小杯 丸形	6.8	2.6	3.2	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰5Y6/1	a	高台施釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
350	TP6 下層	陶器	碗蓋	笠部径 10.4	2.4	—	摘み径4.5	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	摘み内凸状。鉄釉象嵌。印刻による雲文と2条圏線。灰釉は焼成不良気味で白濁。	目痕3足。焼成不良気味。
351	TP3 中層	陶器	碗蓋	—	—	—	摘み径5.0	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	b	摘み端部無釉。鉄絵と白化粧土による梅文。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
352	TP6 下層	陶器	碗蓋	笠部径 11.2	1.6	—	摘み径4.9	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、芭蕉文。摘み端部無釉。灰釉c—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
353	TP1 上層	陶器	碗蓋	笠部径9.8	1.9	—	摘み径3.5	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	b	文様の有無は不明。摘み端部無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	

Tab.14　遺物観察表 (14)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
354	TP4 上層	陶器	碗蓋	10.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/2	a	口縁部外面に呉須による四方襷文。灰釉b—透明の釉。	
355	TP5 上層	陶器	碗蓋	笠部径9.8	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面周縁に圏線と縞状の文様。灰釉b—明オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	目痕なし。
356	TP6 下層	陶器	碗蓋	笠部径9.0	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面ロクロ目をナデ消す。灰釉c—灰白色を帯びる光沢の強い透明の釉。	
357	TP4 上層	陶器	碗蓋	笠部径10.3	2.2	—	摘み径3.8	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	摘み内兜巾状。摘み端部無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
358	TP1 上層	陶器	碗蓋	笠部径9.8	2.5	—	摘み径3.7	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	文様の有無は不明。摘み端部無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
359	TP1 下層	陶器	碗蓋	笠部径9.4	2.5	—	摘み径3.9	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 淡黄2.5Y8/3	a	摘み内兜巾状。摘み端部無釉。灰釉a—淡黄色を帯びる透明の釉。	目痕なし。
360	TP4 上層	陶器	碗蓋	笠部径9.9	2.5	—	摘み径4.0	外) 灰白2.5Y8/1 断) 浅黄橙10YR8/4	c	摘み端部無釉。灰釉は焼成不良で釉は粉状。	
361	TP6 下層	陶器	碗蓋	笠部径11.0	2.8	—	摘み径5.1	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	文様の有無は不明。摘み端部無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。焼成時失敗品で器壁の一部が盛り上がる。
362	TP4 上層	陶器	碗蓋	笠部径12.0	3.0	—	摘み径5.2	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 浅黄2.5Y7/3	c	摘み内兜巾状。外面に放射状の荒い鉋痕が残る。内面渦状のロクロ目。摘み端部無釉。灰釉b—浅黄色を帯びる透明の釉。	
363	TP1 上層	陶器	碗蓋	笠部径10.8	2.5	—	摘み径4.6	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	b	外面多条の沈線。摘み端部無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。焼成不良気味で部分的に白濁。	目痕あり。焼成不良。焼け歪みあり。
364	TP5 上層	陶器	小皿丸形	12.4	3.3	5.0	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい橙7.5YR7/4	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台脇に抉りあり。畳付外側面取り。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
365	TP5 上層	陶器	小皿丸形	6.6	2.8	5.2	—	外) 灰白5Y8/1 断) にぶい橙7.5YR6/4	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半ケズリ後ナデ。高台脇に抉りあり。高台内平坦。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	焼成不良。
366	TP5 上層	陶器	小皿丸形	12.6	3.5	5.0	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい橙7.5YR7/4	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。畳付外側面を大きく面取る。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
367	TP5 下層	陶器	小皿丸形	12.6	3.2	5.0	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい橙7.5YR7/4	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半ケズリ後ナデ。高台脇に抉りあり。畳付外側は小さく面取りしナデ。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
368	TP5 下層	陶器	小皿丸形	12.8	3.1	5.0	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい橙7.5YR7/4	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半ケズリ後ナデ。畳付外側ナデ。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
369	TP5 上層	陶器	小皿丸形	12.8	3.0	5.6	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい橙7.5YR7/4	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台脇に抉りあり。高台はケズリ後未調整。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
370	TP5 下層	陶器	小皿丸形	12.6	3.4	5.0	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい橙7.5YR7/4	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半ケズリ後ナデ。畳付外側は小さく面取りしナデ。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
371	TP5 上層	陶器	小皿丸形	13.0	3.2	5.6	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰5Y6/1	a	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半にケズリ痕が残る。高台脇に抉りあり。高台無釉。灰釉は焼成不良気味で灰オリーブ色に発色。	
372	TP5 下層	陶器	小皿丸形	13.1	3.3	5.1	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい黄橙10YR7/3	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半ケズリ後ナデ。高台脇に抉りあり。畳付外側は面取りしナデ。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
373	TP5 下層	陶器	小皿丸形	2.4	2.9	5.0	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい橙7.5YR7/4	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半ケズリ後ナデ。畳付外側はナデ。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
374	TP5 下層	陶器	小皿丸形	12.8	2.9	4.8	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい橙7.5YR7/4	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半ケズリ後ナデ。高台脇に抉りあり。畳付外側は面取りしナデ。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
375	TP5 下層	陶器	小皿丸形	13.2	2.9	5.5	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰5Y6/1	a	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下位に鉋痕が残る。高台脇に抉りあり。外面下半無釉。灰釉は焼成不良気味で明オリーブ灰色。	焼成不良気味。
376	TP5 下層	陶器	小皿丸形	13.0	3.3	5.2	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい橙7.5YR7/4	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半ケズリ後ナデ。高台脇に抉りあり。畳付外側はナデ。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
377	TP4 下層	陶器	小皿丸形	13.4	3.2	5.6	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰5Y6/1	a	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下位に鉋痕が残る。高台脇に抉りあり。外面下半無釉。灰釉は焼成不良気味で灰オリーブ色。	焼成不良気味。

Tab.15　遺物観察表 (15)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
378	TP5 下層	陶器	小皿 丸形	12.6	3.6	5.4	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい黄橙 10YR7/3	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半ケズリ後ナデ。高台脇に抉りあり。畳付外側は面取りしナデ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
379	TP5 下層	陶器	小皿 丸形	12.4	3.2	5.2	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい橙 7.5YR7/4	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半ケズリ後ナデ。畳付外側ナデ。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
380	TP4 下層	陶器	小皿 丸形	13.2	3.7	5.8	—	外) 灰白5Y7/1 断) にぶい黄橙 10YR7/3	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下位ケズリ後ナデ。高台脇に抉りあり。畳付外側に面取り。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
381	TP5 上層	陶器	小皿 丸形	12.5	3.4	6.2	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) にぶい橙 7.5YR7/4	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台脇に抉りあり。高台はケズリ後未調整。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	高台に径2㎜焼成前穿孔1穴。焼成不良。
382	TP5 下層	陶器	小皿 丸形	12.6	3.3	5.4	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 黄灰2.5Y6/1	a	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台脇に抉りあり。高台無釉。灰釉は焼成不良気味で灰オリーブ色に発色。	高台に径3㎜の焼成前穿孔。目痕なし。釉剥ぎ部の周囲に白色砂が付着。
383	TP 1 上層	陶器	小皿 丸形	9.0	3.1	4.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	b	高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。部分的に焼成不良で白濁。	目痕なし。部分的に焼成不良。
384	TP5 上層	陶器	小皿 丸形	9.0	2.8	4.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、丸文又は宝珠文。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。高台内、鉄錆による文字文か。
385	TP5 上層	陶器	五寸皿 丸形	14.0	2.9	8.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	外面下位ケズリ後ナデ。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
386	TP7	陶器	小皿 丸形	13.6	3.7	5.9	—	外) 灰オリーブ 7.5Y6/2 断) 灰白N7/	b	外面下半ケズリ。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で、粗い貫入が入る。	砂目。外面片側に別個体口縁部片、内底に別個体高台の一部が溶着。畳付に砂と別個体片が溶着。
387	TP5 上層	陶器	小皿 端反形	13.8	4.1	6.6	—	外) 灰白5Y7/1 断) にぶい黄橙 10YR7/3	b	口縁部は内面に稜をなして外反。見込み蛇の目釉剥ぎ。高台内に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	高台の1箇所に径2㎜の焼成前穿孔。目痕あり。円錐ピン先端が残存。内面に橙色の粘土塊が落ちる。焼成不良気味。
388	TP 1 上層	陶器	小皿 端反形	14.0	3.8	6.4	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。口縁部は内面に稜をなして外反。外面下半にケズリ痕が残る。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	高台に径3㎜の焼成前穿孔あり。
389	TP6 下層	陶器	小皿 端反形	15.1	4.2	6.6	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2	b	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下位にケズリ痕が残る。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	高台に径2㎜の焼成前穿孔。焼成不良。
390	TP5 上層	陶器	小皿 端反形	13.6	3.4	5.4	—	外) 灰白5Y8/1 断) 黄灰2.5Y6/1	b	外面ロクロ目。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	高台に径3㎜の焼成前穿孔。焼成不良。
391	TP4 中層	陶器	小皿 端反形	14.8	3.5	7.4	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	見込み蛇の目釉剥ぎ。口縁部は内面に稜をなして外反。外面下位ケズリ後ナデ。高台無釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	焼成不良気味。
392	TP4 中層	陶器	小皿 端反形	13.8	4.0	6.3	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 淡黄2.5Y8/3	c	外面下位ケズリ後ナデ。内底に渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
393	TP5 上層	陶器	小皿 端反形	13.8	3.8	6.6	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	b	外面下位にケズリ痕が残る。高台内兜巾状。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	高台の1箇所に径2㎜の焼成前穿孔。目痕あり。円錐ピン3個が残存。内面に橙色の粘土塊が落ちる。焼成不良。
394	TP4 中層	陶器	小皿 端反形	15.6	3.3	7.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	高台内兜巾状。高台内無釉、高台脇まで施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕4足。内底にハマの一部が溶着。
395	TP5 上層	陶器	小皿 端反形	13,8	3.4	6.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	高台内兜巾状。高台無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	内底に別個体の高台片が溶着。
396	TP3 上層	陶器	小皿 端反形	13.2	3.6	8.0	—	外) 淡黄2.5Y8/3 断) 灰白2.5Y8/2	c	外面下位と高台内に荒いケズリ痕が残る。高台無釉。灰釉c—灰白色を帯びる半透明の釉。	内底に別個体の高台痕あり。
397	TP4 上層	陶器	小皿 端反形	13.8	3.4	7.4	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	外面下位ケズリ後ナデ。高台内平坦。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	目痕あり。
398	TP6 上層	陶器	五寸皿 端反形	15.0	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) にぶい黄橙 10YR7/3	b	外面下位無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
399	TP 1 上層	陶器	小皿 端反形	10.6	1.8	5.2	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	口縁部は内面に稜をなして外反。高台内平坦。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
400	TP5 上層	陶器	小皿 端反形	10.6	3.2	5.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面下位ケズリ後ナデ。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
401	TP6 上層	陶器	小皿 端反形	10.4	2.3	5.0	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	b	口縁部輪花形。口縁部の数カ所を外方からオサエ。内面に鉄絵と白化粧土による花文。外面緩やかなロクロ目。高台施釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	
402	TP 1 上層	陶器	小皿 変形形	10.0	2.7	4.0	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5Y8/2	b	口縁部は五弁花形か。外面ロクロ目。高台内平坦。高台施釉。灰釉a—浅黄色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。

Tab.16　遺物観察表 (16)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
403	TP 1 上層	陶器	五寸皿 端反形	14.4	3.7	7.0	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 淡黄2.5Y8/3	b	内面に呉須による菊花文。見込み蛇の目釉剥ぎ。口縁部は内面に稜をなして外反。口縁部の数カ所に外面からオサエ。外面下位にケズリ痕が残る。割高台。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
404	TP5 上層	陶器	端反形 五寸皿	14.0	3.4	8.0	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	b	口縁部輪花形。高台施釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	焼成不良気味。
405	TP4 中層	陶器	小皿 稜花形	13.5	4.0	6.6	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	口縁部稜花形。高台施釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	目痕なし。焼成不良気味。
406	TP6 上層	陶器	小皿 菊花形	10.6	2.2	6.4	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	a	口錆。型打成形。外側面はヘラナデし花弁を形取る。高台施釉。灰釉a-灰白色を帯びる半透明の釉。	
407	TP5 上層	陶器	小皿 又は蓋 菊花形	13.8	3.1	5.6	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	b	外面は沈線で花弁境界を描く。高台施釉。灰釉は焼成不良で白濁。	目痕なし。焼成不良。
408	TP1 下層	陶器	小皿 菊花形	12.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰黄5Y7/1	a	型作り後、内面をユビオサエ、ナデ。外面ナデ。口錆。高台は接合部で剥離。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
409	TP5 上層	陶器	小皿 変形形 方形	15.0	4.7	5.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 浅黄2.5Y7/3	b	内面に鉄絵と呉須による暦文。口縁部口錆。方形で四辺に抉りあり。内底に段あり。高台内兜巾状。高台施釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。御本が入る。	目痕6足。
410	TP4 中層	陶器	小皿 変形形 方形	13.8	3.4	7.8	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	内面に鉄絵と呉須による縞文。方形で四辺に浅い抉りあり。内底に段あり。高台施釉。灰釉は焼成不良で白濁。	目痕なし。焼成不良。
411	TP7	陶器	小皿 方形盤形	14.6	2.3	8.0	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	方形で四辺に抉りあり。口錆。内面に鉄絵、格子文。内面に段。高台施釉。灰釉c—明オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	目痕あり。
412	TP4 上層	陶器	小皿	—	—	5.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	内面に呉須絵。呉須は淡い青色。内底に段あり。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
413	TP5 上層	陶器	皿	—	—	5.2	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y6/2	b	内底に段。高台施釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
414	TP1 上層	陶器	小皿 又は蓋	—	—	3.9	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	内面に鉄絵と白化粧土による鶴・若松。鶴は白化粧土で描き、目・口と羽輪郭を鉄錆で描き分ける。高台内兜巾状。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕なし。
415	TP3 中層	陶器	皿	—	—	6.4	—	外) 灰白N7/1 断) 灰白N7/1	b	内面に呉須による草花文。呉須は暗青灰色に発色。灰釉は焼成不良気味で白濁。	焼成不良気味。
416	TP4 上層	陶器	小皿	—	1.5	6.0	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	b	内面に呉須絵、植物文。呉須は淡い緑灰色に発色。内底に段あり。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
417	TP1 上層	陶器	皿	—	—	5.2	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) にぶい黄橙 10YR7/3	a	高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
418	TP5 下層	陶器	皿	—	—	6.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/2	b	内底に段。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
419	TP5 上層	陶器	中皿 丸形	20.8	3.3	12.8	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	a	外面に線刻による花唐草文と印刻による山形文。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
420	TP6 上層	陶器	中皿 端反形	23.0	4.4	10.2	—	外) 褐灰5YR4/1 断) 灰黄2.5Y7/2	b	高台無釉。鉄釉は焼成不良。	目痕あり。焼成不良。内面に砂礫が溶着。
421	TP4 中層	陶器	大皿 折縁形	23.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	口縁端部溝縁状。内面に鉄絵。内面緩やかなロクロ目。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
422	TP5 上層	陶器	中皿 端反形	18.0	5.4	9.6	—	外) 灰白5Y8/1 断) にぶい黄橙 10YR7/3	b	外面ケズリ後ナデ。高台内平坦。高台施釉。灰釉は焼成不良で灰白色、部分的に粉状。	目痕なし。焼成不良。
423	TP1 下層	陶器	大皿 折縁形	26.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	口縁端部溝縁状。内面に鉄絵。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
424	TP5 上層	陶器	中皿	17.8	5.2	9.2	—	外) オリーブ灰5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	b	口縁部輪花形。口縁部の数カ所を外方からオサエ。外面緩やかなロクロ目。高台施釉。灰釉b—オリーブ灰色を帯びる半透明の釉。	
425	TP3 中層	陶器	皿 端反形	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	内面にヘラ彫りによる植物文。外面ロクロ目。外面下位無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
426	TP5 上層	陶器	皿	26.0	—	—	—	外) 灰白N7/ 断) 灰白5Y7/1	b	口縁部鍔縁形。外面に緩やかなロクロ目。灰釉c—透明の釉で部分的に白濁する。	
427	TP4 上層	陶器	中皿か	22.4	2.1	16.0	—	外) 暗赤灰2.5YR3/1 断) 灰白2.5Y8/2	c	外底に荒いケズリ痕。外底釉拭き取り。錆釉。	
428	表採	陶器	中皿 方形 盤形	13.2	2.8	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/2	a	タタラ成形。方形盤形。四足を貼付。内面呉須による山水文。呉須はオリーブ灰色に発色。脚端部無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	

Tab.17　遺物観察表 (17)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
429	TP5 下層	陶器	Ⅲ	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	脚部は接合部で剥離。文様の有無は不明。釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
430	TP5 上層	陶器	Ⅲ 輪花形	—	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR7/2 断) 浅黄橙10YR8/3	b	口錆。口縁部は緩やかに外反し輪花状の切り込みあり。外面ロクロ目。灰釉は焼成不良で釉が溶けていない。	焼成不良。
431	TP6 上層	陶器	鉢 浅丸形	12.4	5.6	6.6	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰黄2.5Y7/2	b	外面中位にロクロ目。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕あり。
432	TP5 上層	陶器	鉢 浅丸形	14.6	5.2	9.4	—	外) 灰褐7.5YR4/2 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面上位に幅広の凹線1条。高台内に渦状の鉋痕。内底に渦状のロクロ目。高台施釉。鉄釉—内面は暗赤褐色、外面は焦げて黒色。	目痕なし。焼成時失敗品で外面の釉は焼け焦げる。
433	TP5 上層	陶器	鉢 浅丸形	14.6	6.1	7.4		外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄釉を刷毛塗り。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる白濁気味の釉。	目痕なし。焼成時失敗品で器壁の一部が盛り上がる
434	TP6 上層	陶器	鉢 浅丸形	14.8	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	灰釉c—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
435	TP 1 上層	陶器	鉢 浅丸形	13.2	5.4	5.2	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、草花文。外面下位にケズリ痕が残る。高台外側に抉りあり。高台内浅い渦状のロクロ目。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕3足。
436	TP6 上層	陶器	鉢 腰張形	—	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) にぶい黄橙 10YR7/2	b	外面に呉須による植物文。外面下位無釉。灰釉c—灰白色を帯びる透明の釉。	
437	TP6 上層	陶器	鉢 浅丸形	13.6	5.2	5.4	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	外面下位に荒いケズリ痕が残る。畳付外側面取り。高台内ケズリ出しによる渦。高台無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	目痕なし。
438	TP6 下層	陶器	鉢	13.6	4.8	6.6	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	口縁部輪花形。口縁部の数カ所を外方からオサエ。内底に段あり。高台施釉。灰釉c—明オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	
439	TP5 上層	陶器	鉢	9.8	6.3	4.4	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	口縁部輪花形(五弁)。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	目痕なし。片側の釉が剥離。
440	TP4 中層	素焼き	鉢	10.3	6.6	4.3	—	灰白2.5Y8/1	a	口縁部輪花形(5弁花又は6弁花)。高台内兜巾状。体部外面回転ナデ後ヨコナデ。無釉。	素焼き。
441	TP6 下層	陶器	鉢 端反形	12.8	6.2	5.2	—	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	口縁部外面に強いロクロ目。高台無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
442	TP6 下層	陶器	鉢 端反形	14.4	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	口縁部は内面に稜をなして外反。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
443	TP6 下層	陶器	鉢 端反形	15.3	5.6	7.2	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	内底に段。高台無釉. 灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕5足。高台先端と、内底に円錐ピンが残存。2個体が重ねた状態で溶着。
444	TP4 上層	陶器	鉢 端反形	13.5	5.0	5.5	—	外) 浅黄2.5Y7/3 断) 淡黄2.5Y8/3	a	口縁部は内面に稜をなして外反。内底に緩やかな渦状のロクロ目。高台内に浅い渦状の鉋痕。高台無釉。灰釉は焼成不良気味で浅黄色。	目痕3足。焼成不良。
445	TP6 下層	陶器	鉢 浅丸形	12.0	4.9	6.4	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	口縁部折縁形。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
446	TP5 上層	陶器	鉢 端反形	19.0	5.5	9.0	—	外) 灰白10Y7/1 断) 灰黄2.5Y7/2	a	口縁部輪花形。外面下位にケズリ痕が残る。高台無釉。灰釉は焼成不良気味で灰白色。	目痕なし。焼成不良気味。
447	TP4 上層	陶器	鉢 端反形	17.0	5.4	9.0	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白N8/	b	無高台。外底回転ケズリ。灰釉は焼成不良気味で白濁。	目痕なし。焼成不良気味。
448	TP6 下層	陶器	鉢 腰折形	14.5	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	文様の有無は不明。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	
449	TP5 上層	陶器	鉢 変形形	—	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	b	口縁部の数箇所に折り込み。外面、呉須による唐草文。呉須は青灰色に発色。灰釉は焼成不良気味で白濁。	
450	TP4 上層	陶器	猪口か	—	—	6.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	体部内面と高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
451	TP5 上層	陶器	高杯	8.2	9.0	6.4	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	b	杯部と脚部を分割成形。脚部外面に緩やかなロクロ目。脚部内面施釉、端部無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
452	TP4 中層	陶器	鉢か	19.2	—	—	—	外) にぶい赤褐 2.5YR4/3 断) 灰白7.5Y7/1	b	外面ロクロ目顕著。体部内外面鉄釉、口縁部内外面にオリーブ褐色の釉を重ね掛け。	
453	TP5 上層	陶器	捏鉢か	14.4	7.7	7.9	—	外) オリーブ褐 2.5Y4/3 断) 灰白7.5Y7/1	b	外面ロクロ目顕著。外底ナデ。内面と底部無釉。褐釉—オリーブ褐色の釉。	目痕なし。
454	TP5 下層	陶器	捏鉢	18.6	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR7/2 断) にぶい黄橙 10YR7/3	c	外面に強いロクロ目。外底に荒いケズリ目が残る。口縁淡部の釉拭き取り。底部無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	焼成不良。
455	TP1 上層	陶器	捏鉢	18.0	—	—	—	外) 灰赤2.5YR4/2 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面に強いロクロ目。外面下位無釉。鉄釉—灰赤色に発色。	焼成不良気味。
456	TP5 上層	陶器	捏鉢	16.4	—	—	—	外) 灰白10YR8/1 断) 浅黄橙10YR8/3	c	口縁部は肥厚。灰釉は焼成不良で白濁。	焼成不良。

Tab.18　遺物観察表 (18)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
457	TP5 上層	陶器	捏鉢	—	—	11.8	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 淡黄2.5Y8/3	c	内外面ロクロ目顕著。外面下位に荒いケズリ痕が残る。畳付内側に面取り。高台無釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	焼成不良気味。
458	TP2 上層	陶器	鉢か	16.2	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/3 ～にぶい褐 7.5YR5/3 断) 灰黄2.5Y7/2	b	内外面に緩やかなロクロ目．内外面無釉。	
459	TP2 上層	陶器	鍋蓋	笠部径 17.6	—	—	—	外) 灰褐7.5YR4/2 断) にぶい黄橙 10YR7/3	b	外面に白化粧土による文様。内面施釉。鍔部内外面無釉。灰釉b—透明の釉。	
460	TP1 上層	陶器	鍋	18.2	—	—	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 灰白2.5Y7/1	b	把手の形状は不明。内面に強いロクロ目。体部下位にケズリ痕。内面施釉、外底無釉。鉄釉。	
461	TP6 上層	陶器	土瓶蓋	—	—	13.4	—	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	かえり無釉。かえり内外面に白色粗砂が付着。灰釉c—灰白色を帯びる光沢の強い透明の釉。	
462	TP1 下層	陶器	土瓶蓋	笠部径8.0	—	かえり径6.7	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	b	文様の有無は不明。かえりと内面無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
463	TP4 上層	陶器	土瓶蓋	笠部径8.6	—	かえり径7.2	摘み径—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	a	内面に緩やかなロクロ目。内外面とかえり施釉。かえり端部無釉。灰釉は焼成不良気味で灰白色。	
464	TP 1 下層	陶器	釜類か	6.8	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰黄2.5Y7/2	b	内面ロクロ目顕著。外面のロクロ目はナデ消す。内面下位に接合痕明瞭。内面と外底無釉。口縁端部施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。部分的に御本が入る。	
465	TP5 上層	陶器	蓋	笠部径 11.6	—	—	—	外) 暗赤褐5YR3/3 断) 灰黄2.5YR7/2	a	摘みは欠損。天井部に陽刻による花文。内面施釉、端部無釉。鉄釉は焼成不良気味で暗赤褐色に発色。	焼成不良気味。
466	TP5 上層	陶器	蓋	笠部径 12.6	3.2	—	摘み径 2.3	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	摘みは貼付、梅形でヘラによる刻みを施す。体部外面ケズリ後ナデ。内面施釉、端部無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
467	TP7	陶器	蓋	笠部径 13.6	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	摘みは欠損。内面ロクロ目。内面施釉。口縁端部の釉拭き取り。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	焼成時失敗品で器壁の一部が盛り上がる。
468	TP1 下層	陶器	蓋	笠部径 12.4	—	かえり径 10.4	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面に鉄絵、笠文。かえりと内面無釉。灰釉c—光沢の強い透明の釉。	
469	TP4 上層	陶器	蓋	笠部径 12.6	—	かえり径 10.8	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に多条の沈線。内面施釉、かえり無釉。釉c—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
470	TP4 上層	陶器	蓋	笠部径 14.6	2.8	—	摘み径4.0	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	b	把手は貼付。把手中央と天井部外周にヘラ彫りによる沈線。内面ケズリ後回転ナデ。内面無釉。灰釉c—灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	焼成失敗品で、器壁の一部が盛り上がる。
471	TP5 上層	陶器	蓋	笠部径 11.6	1.9	—	摘み径2.1	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	摘みはヘラ彫りによる渦状の文様を描き、四方を折る。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
472	TP4 上層	陶器	蓋	笠部径 11.8	0.7	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	b	外面ナデ、内面回転ケズリ。内面無釉。灰釉a—灰黄色を帯びる半透明の釉。	
473	TP6 下層	陶器	蓋	笠部径 12.2	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 淡黄2.5Y8/3	b	外面ロクロ目をナデ消す。内面回転ケズリ後ナデ。内面無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
474	TP5 上層	陶器	蓋	笠部径 13.0	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 淡黄2.5Y8/3	b	摘みは欠損。内面中央に直線方向のナデ、周縁に回転方向のナデ。内面無釉。釉は焼成不良気味で白濁。	焼成不良気味。
475	TP5 上層	陶器	蓋	笠部径 11.6	—	—	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	周縁に多状の凹線を巡らす。内面無釉。灰釉b—灰オリーブ色の半透明の釉。	
476	TP1 下層	陶器	蓋	笠部径 11.6	0.7			外) 灰白5Y7/1 断) 灰黄2.5Y7/2	a	内面無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	天井部に黒褐色土塊が溶着。
477	TP4 上層	陶器	蓋	—	—	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	外面に呉須絵、唐草文。呉須は青灰色に発色。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
478	TP6 下層	陶器	蓋	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	b	外面に呉須絵、植物文。呉須は淡青色に発色。灰釉c—透明の釉。	
479	TP4 上層	陶器	蓋物	13.6	5.7	8.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	文様の有無は不明。高台内平坦。口縁部無釉。高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。内底に白色砂が落ちる。
480	TP6 上層	陶器	段重	11.3	4.4	9.2	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	内面と高台施釉。口縁部内面と端部無釉。灰釉b-灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
481	TP6 下層	陶器	段重	13.6	6.0	12.4	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	高台内を鋭角的に削り出す。内外面緩やかなロクロ目。高台と口縁端部無釉。灰釉b—明オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	
482	TP4 中層	陶器	段重	12.7	5.5	10.9	—	外) 明オリーブ灰 2.5GY7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	高台脇重ね。文様の有無は不明。内面施釉。高台内～畳付施釉。口縁端部と高台外側無釉。灰釉c—明オリーブ灰色を帯びる光沢の強い透明の釉。	内底周縁に白色砂が落ちる。高台脇に砂付着。

Tab.19　遺物観察表 (19)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
483	TP5 上層	陶器	段重	16.4	5.3	14.4	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	b	外面に呉須による若松文。呉須は青灰色に発色。内面と外底施釉。口縁端部と高台外側無釉。	
484	TP4 中層	陶器	水指	12.2	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	内面施釉。灰釉c—淡いオリーブ灰色を帯びる半透明の釉。	
485	TP5 下層	陶器	火入れ又は香炉	9.8	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	内面ロクロ目顕著。内面無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
486	TP6 下層	陶器	香炉	10.9	—	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面上位までケズリ。内面ロクロ目。内面下半無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
487	TP4 中層	陶器	火入れ又は香炉	10.0	7.0	6.0	—	外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) 灰黄2.5Y7/2	b	内外面ロクロ目。外面下位に5条の沈線。内面下半と高台無釉。鉄釉—にぶい赤褐色の釉。	目痕なし。
488	TP4 上層	陶器	火入れ又は香炉	9.8	—	—	—	外) 暗赤褐5YR3/3 断) 灰黄2.5Y7/2	a	口縁部外面に2条沈線と印刻による雲文。内面下半無釉。鉄釉は暗赤褐色に発色。	
489	TP5 下層	陶器	香炉蓋	—	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	a	屋根形。屋根の下位に窓を設ける。内面施釉、かえりのみ無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	
490	TP6 下層	陶器	不明	—	10.2	5.0	8.8	外) 暗赤褐 2.5YR3/2 断) 灰黄2.5Y6/1	a	茄子形。把手は貼付。体部上位に窓あり。体部下位に荒いケズリ痕。高台内兜巾状。体部内面施釉、高台無釉。鉄釉。体部は暗赤褐色、ヘタは黒色に発色。	
491	TP6 上層	陶器	鳥の水入れ	9.3	2.7	9.8	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白7.5Y7/1	b	タタラ成形。内外面ナデ。内底に直線方向のハケ。外底未調整で凹凸あり。外底無釉。灰釉は焼成不良気味で部分的に白濁。	焼成不良。
492	TP6 上層	陶器	鳥の水入れ	—	3.1	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	b	タタラ成形。内外面ナデ。内底に直線方向のハケ。外底ナデ。外底無釉。灰釉c—灰白色を帯びる透明の釉。	
493	TP5 下層	陶器	鳥の水入れ	—	4.0	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	タタラ成形。底部脇の接合部にユビオサエ痕。内外面ナデ。灰釉b—明オリーブ灰色を帯びる半透明の釉。	
494	TP4 排土	陶器	鳥の水入れ	—	3.3	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	c	把手は剥離。内面施釉、外底無釉。灰釉b—浅黄色を帯びる光沢の強い透明の釉。	
495	TP6 上層	陶器	鳥の水入れ	—	2.8	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	タタラ成形。内外面ナデ。内底に直線方向のハケ。外底ナデ。外底無釉。灰釉c—灰白色を帯びる透明の釉。	
496	TP6 上層	陶器	鳥の水入れ	—	2.6	—	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	b	タタラ成形。内外面ナデ。外底ナデ。外底無釉。灰釉c—灰白色を帯びる透明の釉。	
497	TP6 上層	陶器	鳥の水入れ	—	2.8	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	b	タタラ成形。把手は貼付。内外面ナデ。外底ナデ。外底無釉。灰釉c—明オリーブ灰色を帯びる半透明の釉。	
498	TP5 上層	素焼き	餌猪口	6.1	1.9	5.4	—	灰白2.5Y8/1	b	把手は貼付。外底回転ケズリ。無釉。	未製品。素焼き。
499	TP6 上層	陶器	餌猪口	5.2	2.9	4.8	—	外) 灰白5Y7/2 断) 淡黄2.5Y8/3	b	把手は貼付。内面ロクロ目。外底回転ケズリ。外底無釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
500	TP6 上層	陶器	餌猪口	—	—	—	—	外) 灰7.5Y6/1 断) 灰白5Y7/1	b	把手は貼付による。灰釉b—明オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	
501	TP2 上層	陶器	餌猪口	4.6	1.3	4.3	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰白5Y7/1	a	把手は貼付による。外底回転糸切り。外底無釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
502	TP6 下層	陶器	餌猪口	5.2	1.3	5.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	内外面と外底施釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
503	表採	陶器	餌猪口	5.0	1.8	5.0	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰黄2.5Y7/2	b	把手は欠損。外底回転ケズリ。外底無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。焼成不良で部分的に白濁。	焼成不良気味。
504	表採	陶器	鬢水入れ	—	5.5	—	—	外) 灰黄5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	長楕円形。外面に呉須による植物文。呉須は緑灰色に発色。外底に直線方向のナデ。	
505	TP5 上層	陶器	水滴	全長 6.7	全幅 4.7	器高 2.4	注口径0.4	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	たたら成形。上面ケズリ。側面と底部外面ナデ。内面と底部外面無釉。灰釉b—淡い灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
506	TP1 上層	陶器	筆筒	—	—	7.6	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 淡黄2.5Y8/3	b	外面下位に脚を貼付。外面に鉄絵、宝文。内面と外底無釉。灰釉は焼成不良で粉状。	焼成不良。
507	TP4 上層	陶器	風鈴又は釣り鐘	—	—	—	摘み径0.8	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	ロクロ成形。把手と釣部分は貼付。外面印刻による菊花文。灰釉c—明オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	
508	TP5 上層	陶器	花生か	—	—	—	—	外) 褐灰7.5YR4/2 断) 灰白10YR7/1	a	内面ロクロ目顕著。内外面に鉄釉施釉。釉は褐灰色。	
509	TP6 下層	陶器	瓶	—	—	—	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	鉄釉象嵌。印刻による雲・菊花・山形文・雷文・丸にクルス文。内面無釉。灰釉c—透明の釉。	
510	TP2 上層	陶器	瓶	—	—	11.6	—	外) 暗赤灰2.5YR3/1 断) 黄灰2.5Y6/1	b	内面ロクロ目顕著。内面施釉、外底無釉。鉄釉—暗赤灰色に発色。	

Tab.20　遺物観察表 (20)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
511	TP6 上層	陶器	瓶 又は 花生	—	—	7.2	—	外) 灰白10YR7/1 断) 灰黄2.5Y6/2	a	内外面ロクロ目顕著。外底回転糸切り。内面施釉。底部無釉。灰釉b—灰白色を帯びる半透明の釉。	
512	TP1 上層	陶器	瓶	—	—	6.6	—	外) 暗赤褐5YR3/4 断) 灰黄2.5Y7/2	b	外面にヘラ彫りによる陰刻文様。内面ロクロ目。底部クリ底。高台施釉。鉄釉施釉。釉は暗赤褐色。	
513	TP1 上層	陶器	瓶類	—	—	6.6	—	外) 淡黄5Y8/3 断) にぶい黄橙 10YR6/4	c	体部外面に縦方向の筋目あり。クリ底。体部内面と底部無釉。全体に白化粧土施釉後灰釉を重ね掛け。灰釉は淡黄色を帯びる半透明の釉。	
514	TP5 上層	陶器	瓶類	—	—	8.4	—	外) 黒7.5YR2/1 断) 褐灰10YR5/1	a	クリ底。内面ロクロ目。高台施釉。鉄釉—黒色の釉。	
515	TP1 上層	陶器	瓶類	—	—	7.0	—	外) 暗赤灰10R3/1 断) 灰黄2.5Y7/2	b	内面ロクロ目顕著。底部クリ底。高台施釉。鉄釉は焼成不良気味で白濁。	焼成不良。内底ににぶい橙色土が溶着。
516	TP5 上層	陶器	瓶	—	—	3.8	—	外) 黒褐色10YR3/1 断) 淡黄2.5Y8/3	b	内面ロクロ目。外底回転糸切り。内面と底部無釉。鉄釉は焼成不良で白濁。	焼成不良。
517	TP5 上層	陶器	茶入れか	—	—	3.0	—	外) 灰褐5YR4/2 断) 明褐灰7.5YR7/2	a	内面に多段のロクロ目。外底回転糸切り。内面と外面下位無釉。鉄釉は気泡を吹く。	
518	TP4 上層	陶器	蓋	笠部径3.7	—	3.0	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/2	a	外面型作りによる菊花文。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	上面に別個体陶片が溶着。
519	TP5 下層	陶器	不明	—	—	—	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	a	把手。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	
520	TP5 上層	陶器	壷	9.4	7.5	7.0	12.2	外) 黒褐10YR2/2 断) 灰白5Y7/1	b	内面ロクロ目顕著。外底回転糸切り。底部脇にユビオサエ。内面下半と底部無釉。鉄釉—黒褐色の釉。	
521	TP5 上層	陶器	壷か	—	—	—	約 20.0	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	外面に鉄絵、文字文。鉄錆はオリーブ黄色に発色。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	
522	TP1・6 上層	陶器	甕	18.2	—	—	28.0	外) 暗赤褐 2.5YR3/3 断) 灰白10YR7/1	c	口縁端部は丸く収める。内面ロクロ目顕著。内面施釉。体部に暗赤灰色の鉄釉を施釉し、肩部に灰釉を流し掛け。	522・526同一個体か。
523	TP3 上層	陶器	壷 又は 甕	—	—	14.0	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰黄2.5Y6/2	b	内面に強いロクロ目。底部脇に面取り。外底回転ケズリ。内面施釉、底部無釉。内面に灰釉、外面に白化粧土後透明の釉。粗い貫入が入る。	目痕あり。
524	TP1 上層	陶器	壺	21.0	—	—	—	外) にぶい赤褐 2.5YR4/4 断) 明褐灰7.5YR7/1	b	鉄釉施釉。釉はにぶい赤褐色。	
525	TP6 下層	陶器	壺か	—	—	11.2	—	外) 灰オリーブ5Y6/2 断) 灰黄2.5Y7/2	b	体部内面無釉。高台施釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
526	TP1 上層	陶器	甕	—	—	13.6	—	外) 暗赤褐 2.5YR3/3 断) 灰白10YR7/1	c	外底ユビオサエ、ナデ。内面施釉。	522・526同一個体か。
527	TP4 中層	陶器	甕	—	—	17.2	—	外) 暗褐7.5YR3/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3	c	内外面施釉。外底施釉。鉄釉は暗褐色。	内底に輪状の砂目。外底の4箇所に円形の砂目。
528	TP6 下層	陶器	灯明受皿	10.4	2.7	6.0	—	外) 黒褐色5YR3/1 断) 橙7.5YR7/6	a	外面回転ケズリ後ナデ、外底回転ケズリ。体部外面無釉。鉄釉は黒褐色に発色。	内面に円盤状の粘土と砂礫が溶着。外底に円錐ピンが溶着。
529	TP3 中層	陶器	灯明受皿	9.6	1.9	4.2	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	外面ロクロ目顕著。外底無釉。灰釉b—透明の釉。外面片側が焼成不良気味で白濁。	焼成不良気味。
530	TP1 下層	陶器	灯明受皿	10.7	1.8	6.0	—	外) にぶい赤褐 5YR4/3 断) 灰白2.5Y8/2	b	油溝は半月状で三方に設ける。外底回転ケズリ。内外面施釉、外底にも釉が薄く掛かる。鉄釉は焼成不良。	
531	TP5 上層	陶器	灯明受皿	10.1	1.5	6.0	—	外) にぶい褐 7.5YR5/3 断) 灰白7.5Y7/1	b	油溝は半月状で三方に油溝を設ける。内外面施釉、外底無釉。鉄釉は焼成不良。	焼成不良。
532	TP1 上層	陶器	灯明受皿	10.4	2.5	8.4	—	外) 黒褐色5YR3/1 断) 灰黄2.5Y6/1	b	油溝はア—チ状(三方か)。外底釉拭き取り。鉄釉は黒褐色に発色。	
533	TP6 下層	陶器	火鉢	—	—	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 淡黄2.5Y8/3	c	三足を貼付。体部内外面ヨコナデ・タテハケ、内底ユビオサエ・不定方向のナデ、外底ナデ。口縁端部ハケ。内面と底部無釉。灰釉b—淡黄色を帯びる半透明の釉。	
534	TP1 上層	陶器	焜炉	21.8	—	—	—	外) にぶい褐 7.5YR5/3 断) にぶい黄橙 10YR6/3	d	焼締。部分的に自然釉が掛かる。前面に口縁部から切り込む窓あり。体部上位の双方に半月状の双耳を貼付。外面ナデ、内面荒いロクロ目。内面に鉄釉、外面無釉。	外面片側に窯壁の一部が溶着。
535	TP6 上層	陶器	灯明受皿 又は燭台	—	—	9.4	—	外) にぶい赤褐 2.5YR4/3 断) 灰黄2.5Y7/2	c	受け皿と体部は分割成形。体部上位に円孔3穴が残存。高台施釉。内面下半無釉。鉄釉。	
536	TP5 上層	陶器	燭台	—	—	—	—	外) 暗赤灰10R4/1 断) にぶい黄橙 10YR7/3	b	外面ロクロ目顕著。上面中央から径6㎜の穿孔が入る。	
537	TP5 上層	陶器	不明	16.3	11.4	14.0	—	外) 黒褐7.5YR2/2 断) 黄灰2.5Y7/2	a	内外面ロクロ目顕著。内面施釉、口縁端部と下位端部無釉。鉄釉は黒褐色に発色。	

Tab.21　遺物観察表 (21)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法･特徴	備考
				口径	器高	底径					
538	TP6 下層	陶器	不明	—	—	—	—	外) 黒褐10YR2/2 内) にぶい黄橙 10YR7/3 断) 黒褐10YR3/1	b	外面に回転方向の刷毛目。内面ナデ。外面に黒褐色の鉄釉、内面ににぶい黄橙色の釉。	
539	TP5 上層	陶器	不明	笠部径 12.4	—	—	—	外) 暗赤褐 2.5YR3/2 断) 淡黄2.5Y8/3	b	脚部か。内面施釉、端部無釉。鉄釉。釉は焼成不良気味で部分的に白濁。	焼成不良気味。
540	TP6 下層	陶器	捏鉢か	—	—	7.8	—	外) 灰白2.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	b	内外面に緩やかなロクロ目。内底に高台無釉。	目痕4足。内底に円錐ピンの先端が溶着。
541	TP6 上層	陶器	皿又は蓋	17.6	2.0	8.4	—	外) 灰白7.5Y7/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	口縁部溝縁状。外面ロクロ目顕著。外底無釉。灰釉a—灰白色を帯びる半透明の釉。	目痕なし。
542	TP2 上層	陶器	捏鉢か	—	—	7.2	—	内) 橙7.5YR6/6 外) 不明 断) 浅黄橙10YR8/3	b	高台内を鋭角的に削り出す。畳付外側を面取り。内面橙色を帯びる透明の釉。外面下半無釉。	
543	TP2 上層	陶器	捏鉢か	—	—	8.0	—	外) 暗赤灰2.5YR3/1 断) にぶい橙 2.5YR6/4	b	高台内を鋭角的に削り出す。畳付外側を面取り。内面鉄釉刷毛塗り、外面鉄釉。外面下半無釉。	
544	TP6 下層	陶器	鉢か	—	—	6.6	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	a	高台施釉。灰釉b—灰白色を帯びる透明の釉。	畳付に灰白色の砂が少量付着。
545	TP6 下層	陶器	不明	—	—	6.2	—	外) 灰白5Y7/2 断) 灰白5Y7/1	a	内面と高台施釉。灰釉b—灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	
546	TP1 上層	陶器	鉢又は皿	—	—	6.4	—	外) 灰白5Y8/1 断) 灰白2.5Y7/1	a	高台施釉。灰釉は焼成不良気味で白濁。	焼成不良気味。
547	TP1 上層	土師質土器	小皿白土器	11.6	1.8	8.0	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による寿字文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底直線方向のナデ。	
548	TP1 上層	土師質土器	小皿白土器	11.2	1.2	8.0	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による寿字文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底直線方向のナデ。	
549	TP4 上層	土師質土器	小皿白土器	10.6	1.7	9.6	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による寿字文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底直線方向のナデ。	
550	TP1 上層	土師質土器	小皿白土器	11.9	1.5	8.0	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による寿字文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底直線方向のナデ。	
551	TP1 上層	土師質土器	小皿白土器	10.6	1.7	8.4	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による寿字文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底直線方向のナデ。	
552	TP4 上層	土師質土器	小皿白土器	11.2	1.8	7.6	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による寿字文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底直線方向のナデ。	
553	TP4 中層	土師質土器	小皿白土器	11.0	1.9	7.2	—	灰白2.5Y8/2	b	内面に陽刻による寿字文。摩耗し調整不明。	
554	TP6 上層	土師質土器	小皿白土器	10.4	1.7	7.2	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による寿字文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底中央直線方向のナデ、周縁部回転方向のナデ。	口縁に煤。
555	TP4 上層	土師質土器	小皿白土器	12.2	1.6	8.6	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による寿字文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底直線方向のナデ。	内底と外底に強い焦げ。
556	TP6 下層	土師質土器	小皿白土器	11.0	1.7	7.0		灰白2.5Y8/2	b	内面に陽刻による寿字文。器面摩耗し調整不明。	口縁部に煤。
557	TP5 上層	土師質土器	小皿白土器	11.4	1.8	6.6	—	灰白5Y8/1	b	内面に陽刻による寿字文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底直線方向のナデ。	口縁部に煤。
558	TP5 下層	土師質土器	小皿白土器	11.6	2.0	7.4	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻文様。内面ナデ。外面回転ナデ。外底ナデ。	
559	TP6 上層	土師質土器	小皿白土器	11.4	1.9	7.0	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による高砂文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底直線方向のナデ。	外面に煤。
560	TP6 上層	土師質土器	小皿白土器	10.8	2.0	7.0	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による高砂文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底直線方向のナデ。	内外面に煤。
561	TP1 上層	土師質土器	小皿白土器	11.3	1.9	8.0	—	灰白5Y8/1	b	内面に陽刻による高砂文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底不定方向のナデ。	
562	TP4 中層	土師質土器	小皿白土器	11.1	1.8	7.0	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による高砂文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底不定方向のナデ。	
563	TP4 上層	土師質土器	小皿白土器	11.6	1.6	8.6	—	灰白2.5Y8/2	b	内面に陽刻による高砂文。外面回転ケズリ、内面回転ナデ。外底回転ナデ。外底直線方向のナデ。	
564	TP1 上層	土師質土器	小皿白土器	11.4	1.5	7.6	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による高砂文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底不定方向のナデ。	
565	TP1 上層	土師質土器	小皿白土器	—	1.5	—	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による高砂文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底不定方向のナデ。	
566	TP1 上層	土師質土器	小皿白土器	—	—	—	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による高砂文。外底直線方向のナデ。	

Tab.22　遺物観察表 (22)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
567	TP6下層	土師質土器	小皿白土器	—	—	—	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による高砂文。内外面ヨコナデ。外底不定方向のナデ。	
568	TP6上層	土師質土器	小皿白土器	—	—	—	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による高砂文。外底直線方向のナデ。	
569	TP1上層	土師質土器	小皿白土器	—	—	—	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による高砂文。外底不定方向のナデ。	
570	TP4中層	土師質土器	小皿白土器	11.4	1.6	7.5	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による水と菊花。内外面ナデ。	
571	TP4上層	土師質土器	小皿白土器	11.4	1.5	8.2	—	灰白2.5Y8/2	b	内面に陽刻による鶴亀文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底直線方向のナデ。	
572	TP1上層	土師質土器	小皿白土器	11.4	1.8	8.0	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による鶴亀文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底不定方向のナデ。	
573	TP4	土師質土器	小皿白土器	11.0	1.9	7.0	—	灰白10YR8/2	b	内面に陽刻による鶴亀文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底弧状のナデ。	
574	TP5上層	土師質土器	小皿白土器	11.4	1.5	6.6	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による鶴亀文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底直線方向のナデ。	
575	TP4上層	土師質土器	小皿白土器	11.6	1.5	8.5	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による鶴亀文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底不定方向のナデ。	
576	TP1上層	土師質土器	小皿白土器	11.5	1.6	7.8	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による鶴亀文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底不定方向のナデ。	
577	TP1下層	土師質土器	小皿白土器	—	—	—	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による鶴亀文。外面ヨコナデ。内面回転方向のナデ。外底ナデ。	
578	TP1下層	土師質土器	小皿白土器	—	—	—	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に陽刻による鶴亀文。外底ナデ。	
579	TP4中層	土師質土器	小皿白土器	10.6	1.7	5.8	—	灰白10YR8/1	b	無文。内面回転方向のナデ。外面ヨコナデ。外底直線方向のナデ。	
580	表採	土師質土器	小皿白土器	10.4	1.7	7.2	—	灰白2.5Y8/2	b	無文。外面回転ケズリ後回転ナデ。内面摩耗し調整不明。外底回転ケズリ後回転ナデ。	口縁部に灯芯痕。
581	TP5上層	土師質土器	小皿白土器	8.8	1.6	5.8	—	灰白2.5Y8/1	b	内面ナデ。外面口縁部回転ナデ、体部回転ケズリ。外底回転ケズリ。	口縁部の2箇所に灯芯油痕。
582	TP5上層	土師質土器	小皿	9.2	1.3	6.0	—	灰白2.5Y8/2	b	無文。外面・外底回転ケズリ。外底中央ケズリ出し。内面回転ナデ。	口縁部に灯芯痕。
583	TP1・6下層	土師質土器	小皿	11.1	2.2	7.0	—	にぶい橙7.5YR7/4	b	無文。外面ヨコナデ。内面周縁部回転方向のナデ、内底直線方向のナデ。外底直線方向のナデ。	口縁部に灯芯痕。
584	TP6下層	土師質土器	小皿	10.6	1.5	7.0	—	にぶい橙7.5YR7/4	b	無文。外面ヨコナデ。内面周縁部回転方向のナデ、内底不定方向のナデ。外底不定方向のナデ。	口縁部にタール状の灯芯痕。
585	TP6下層	土師質土器	小皿	9.6	1.8	6.0	—	にぶい黄橙10YR7/3	b	無文。外面ヨコナデ。内面不定方向のナデ。外底不定方向のナデ。	口縁部に煤。
586	TP5上層	土師質土器	小皿	9.8	1.8	6.0	—	にぶい黄橙10YR7/3	b	無文。外面ヨコナデ。内面不定方向のナデ。外底不定方向のナデ。	
587	TP6下層	土師質土器	小皿	7.8	1.8	4.4	—	灰白2.5Y8/1	b	内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
588	TP6下層	土師質土器	小皿	6.5	1.4	4.2	—	灰白2.5Y8/1	b	内底緩やかに凸状。内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
589	TP6下層	土師質土器	杯	8.8	3.5	5.2	—	灰白2.5Y8/1	b	内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
590	TP6下層	土師質土器	杯	—	—	4.7	—	外）灰白10YR8/1 断）灰白10YR8/1	b	内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底回転糸切り。	
591	TP6下層	土師質土器	杯	—	—	4.5	—	灰白10YR8/1	a	内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
592	TP1上層	土師質土器	不明	—	—	8.4	—	にぶい橙5YR7/4	c	外面に繊維状の原体による細かい擦痕。内面ロクロ目。外底回転糸切り。	尾戸か。
593	TP5上層	土師質土器	不明	—	—	10.8	—	灰白2.5Y8/1	b	内面に強いロクロ目、外面ケズリ。	外底に文字、「寛保□ □酉□」。
594	TP4上層	土師質土器	手捏土器	3.8	1.7	3.2	—	灰白2.5Y8/1	b	手捏ね成形。体部外面縦方向の粗いナデ。内底ユビオサエ、ナデ。	
595	TP7	窯道具	サヤ円形	13.6 内径 11.8	7.5 内高 6.4	14.8	—	外）灰白2.5Y8/1 内）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	d	口縁部に抉りあり。内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	外底周縁に灰白色の粘土帯剥離痕。

Tab.23　遺物観察表 (23)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
596	TP6 上層	窯道具	サヤ 円形	11.2 内径 10.0	8.6 内高 7.2	13.2	—	外) にぶい黄褐 10YR5/4 内) にぶい黄褐 10YR5/3 断) 褐灰10YR6/1	d	口縁部に抉りあり。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	口縁端部に打痕。内底に砂少量。
597	TP4 下層	窯道具	サヤ 円形	13.8 内径 12.2	9.9 内高 8.3	15.0	—	外) にぶい黄橙 10YR7/4 内) 浅黄2.5Y7/3 断) 灰白2.5YR7/1	d	抉り・穿孔の有無不明。内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	口縁端部と外底周縁に粘土帯剥離痕。内底に灰白色砂。
598	TP4 上層	窯道具	サヤ 円形	15.0 内径 13.0	10.8 内高 7.9	16.0	—	外) にぶい黄橙 10YR5/4 内) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	d	口縁部に抉りあり。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面上位にヘラ記号。口縁端部と外底周縁に粘土帯剥離痕。内底に砂。
599	TP1 上層	窯道具	サヤ 円形	—	—	14.4 内径 11.8	—	外) にぶい黄橙 10YR6/4 内) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白10YR7/1	d	体部上位に焼成前穿孔あり。内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面中位に印刻(丸にクルス)。外底周縁に粘土帯剥離痕。体部外面に自然釉。
600	TP1 下層	窯道具	サヤ 円形	14.0 内径 12.0	11.1 内高 10.0	15.8	—	外) 暗赤褐5YR3/3 内) にぶい橙 5YR6/4 断) 灰白5Y8/1	d	口縁部に抉りあり。内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	外底周縁に帯状の粘土が付着。内底に灰白色砂。外面に自然釉。
601	TP6 上層	窯道具	サヤ 円形	14.2	11.5	16.6	—	外) にぶい赤褐 2.5YR4/3 内) にぶい赤褐 2.5YR4/3 断) にぶい赤褐 2.5YR4/3	d	口縁部に抉りあり。外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面の二箇所に印刻(三重丸)。
602	TP4 上層	窯道具	サヤ 円形	15.4 内径 13.6	10.1 内高 8.5	16.4	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 内) 浅黄2.5Y7/3 断) 浅黄2.5Y7/3	d	口縁部に抉りあり。内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面の2箇所に印刻(雷文)。口縁端部と外底周縁に粘土帯剥離痕。内底に砂。
603	TP6 下層	窯道具	サヤ 円形	16.4	11.0	16.0	—	外) にぶい黄橙 10YR7/2 内) にぶい黄橙 10YR7/3 断) 灰白10YR8/2	d	口縁部に抉りあり。外面ロクロ目顕著。外底回転糸切り。	体部外面上位に印刻(菱文)。
604	TP5 下層	窯道具	サヤ 円形	15.7 内径 14.0	10.8 内高 9.3	15.4	—	外) 黒褐10YR3/2 内) にぶい黄褐 10YR5/3 断) 灰黄褐10YR5/2	d	口縁部に抉りあり(3穴)。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	口縁端部に団子状の粘土剥離痕、外底周縁に径2.5㎝の円盤状の粘土が付着。
605	TP1 上層	窯道具	サヤ 円形	18.6 内径 17.0	10.8 内高 9.2	19.0	—	外) 暗褐10YR3/3 内) にぶい黄 2.5Y6/3 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	口縁部に抉りあり(3穴)。内内外面ロクロ目。外底静止糸切り。	体部外面中位に印刻。口縁端部に粘土帯、外底周縁に粘土塊の剥離痕。内底に砂。体部外面に自然釉。
606	TP1 上層	窯道具	サヤ 円形	15.4 内径 12	11.0 内高 9.0	16.2	—	外) 浅黄2.5Y7/3 内) 褐7.5YR4/3 断) 灰白10YR8/2	d	口縁部に抉りあり(2穴)。内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	口縁端部に灰白色の粘土が付着。外底周縁に粘土剥離痕。内底に灰白色砂が付着。外面に自然釉。
607	TP4 上層	窯道具	サヤ 円形	—	—	16.2 内径 13.0	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 内) 灰白5Y8/1 断) 灰白5Y8/1	d	体部上位に焼成前穿孔あり。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面の3箇所に印刻(輪違い文)。外底周縁に粘土帯剥離痕。内面下位に円盤状の粘土が付着。
608	TP6 下層	窯道具	サヤ 円形	14.0 内径 13.0	9.5 内高 8.5	15.4	—	外) 黄灰2.5Y6/1 内) にぶい黄 2.5Y6/3 断) 灰白2.5Y7/1	d	体部下位に径1.5㎝の焼成前穿孔あり(2穴)。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。内底周縁にユビオサエ。	体部外面に印刻あり。口縁端部に灰白色の粘土帯、外底周縁に粘土帯剥離痕。内底に砂。
609	TP4 下層	窯道具	サヤ 円形	14.6 内径 13.3	11.8 内高 10.3	15.0	—	外) にぶい黄橙 10YR6/3 内) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4	d	体部上位に径2.5㎝の焼成前穿孔あり。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	外底周縁に粘土帯剥離痕。内底に鉄釉が流れ落ちる。
610	TP5 下層	窯道具	サヤ 円形	15.6 内径 14.4	10.6 内高 9.3	18.0	—	外) 灰黄褐10YR5/2 内) 灰黄2.5Y7/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	体部下位に径1.8㎝の焼成前穿孔あり(3穴)。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	口縁端部と外底周縁に灰白色の粘土帯剥離痕。内底は砂が付着し鉄釉が流れ落ちる。
611	TP5 下層	窯道具	サヤ 円形	16.2 内径 14.6	10.9 内高 9.4	17.8	—	外) 灰黄褐10YR4/2 内) 灰黄褐10YR6/2 断) 灰黄2.5Y7/2	d	体部下位に径1.8㎝の焼成前穿孔あり(3穴)。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	口縁端部と外底周縁に粘土帯剥離痕。内底に鉄釉が流れ落ちる。
612	TP1 上層	窯道具	サヤ 円形	—	—	16.0	—	外) にぶい赤褐 5YR5/4 内) 灰黄2.5Y7/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	抉り・穿孔の有無不明。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面下位の2箇所に印刻(輪違い文)。外底周縁に粘土帯剥離痕。内底に砂。
613	TP4 下層	窯道具	サヤ 円形	17.9 内径 13.0	12.0 内高 11.0	18.0	—	外) 黒褐7.5YR3/2 内) にぶい褐 7.5YR5/3 断) 灰黄褐10YR6/2	d	抉り・穿孔の有無不明。内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	口縁端部と外底周縁に粘土帯剥離痕。外面と外底に自然釉。
614	TP1 上層	窯道具	サヤ 円形	12.2 内径 10.8	4.6 内高 3.5	12.6	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 内) にぶい黄橙 10YR7/3	d	口縁部に抉りあり。内外面回転ナデ。外底に凹凸あり。	使用痕なし。

Tab.24　遺物観察表 (24)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
615	TP6 上層	窯道具	サヤ 円形	13.6 内径 12.0	4.8 内高 3.5	13.8	—	外) にぶい褐 7.5YR6/3 内) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4	d	口縁部に抉りあり(1又は2穴)。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	外底周縁に粘土帯剥離痕。内底に砂。体部外面に自然釉。
616	TP6 上層	窯道具	サヤ 円形	13.0 内径 10.6	4.7 内高 3.6	13.0	—	外) にぶい黄褐 10YR5/3 内) にぶい黄橙 10YR7/3 断) 灰白2.5YR7/1	d	口縁部に抉りあり。内外面回転ナデ。内面ロクロ目。外底静止糸切り。	外底周縁に打痕。内底に砂が付着し、鉄釉が流れ落ちる。体部外面に自然釉。
617	TP1 上層	窯道具	サヤ 円形	14.0 内径 12	5.5 内高 7.8	14.4	—	外) にぶい褐 7.5YR5/4 内) にぶい黄橙 10YR6/3	d	口縁部に抉りあり(1又は2穴)。内外面回転ナデ。外底静止糸切り。	口縁端部に灰白色の粘土、外底周縁に粗砂と粘土塊が付着。内底に灰白色砂が付着。外面に自然釉。
618	TP6 上層	窯道具	サヤ 円形	13.8 内径 11.8	5.4 内高 4.1	14.0	—	外) 灰白2.5Y7/1 内) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	d	口縁部に抉りあり(2穴)。内外面回転ナデ。外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	外底周縁に灰白色の粘土が付着。内底周縁に砂。
619	TP6 上層	窯道具	サヤ 円形	14.0 内径 12.0	6.1 内高 4.3	14.6	—	外) にぶい黄橙 10YR6/4 内) にぶい黄橙 10YR6/3 断) にぶい黄橙 10YR6/3	d	口縁部に抉りあり(2穴)。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	口縁端部に粘土帯が付着。内底に砂。体部外面に自然釉。
620	TP6 上層	窯道具	サヤ 円形	14.8 内径 13.0	5.2 内高 4.0	15.0	—	外) にぶい褐 7.5YR5/3 内) にぶい黄橙 10YR6/3 断) 灰白10YR7/1	d	口縁部に抉りあり(1又は2穴)。内外面ロクロ目。外底静止糸切り。	外底周縁に粘土帯剥離痕。内底周縁に砂。
621	TP1 下層	窯道具	サヤ 円形	15.4 内径 13.4	5.5 内高 4.2	14.8	—	外) 暗赤褐5YR3/3 内) 褐7.5YR4/3 断) 灰黄褐10YR6/2	d	口縁部に抉りあり(1又は2穴)。内外面回転ナデ。外底静止糸切り。	内底に灰白色砂が付着。外面に自然釉。
622	TP1 下層	窯道具	サヤ 円形	15.2 内径 13.4	5.4 内高 4.4	15.0	—	外) 褐灰10YR5/1 内) にぶい黄褐 10YR5/4 断) 灰黄褐10YR5/2	d	口縁部に抉りあり。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面に印刻。口縁端部に粘土帯剥離痕。内底に砂。
623	TP4 上層	窯道具	サヤ 円形	17.0 内径 15.4	5.6 内高 4.1	17.2	—	外) にぶい黄褐 10YR4/3 内) 暗褐7.5YR3/3 断) 灰黄褐10YR4/2	d	口縁部に抉りあり(3穴か)。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面に印刻(菱)。外底周縁に粘土帯剥離痕。内底に砂。
624	TP4 上層	窯道具	サヤ 円形	15.4 内径 13.4	4.8 内高 3.8	15.8	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 内) にぶい褐 7.5YR5/4 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	口縁部に抉りあり。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面に印刻(菱)。口縁部から体部外面にかけて窯土が溶着。内底に砂。
625	TP5 上層	窯道具	サヤ 円形	15.8	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/2 内) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	d	体部下位に径1.3㎝の焼成前穿孔あり。内外面ロクロ目顕著。	体部外面に印刻。口縁端部に粘土帯剥離痕。
626	TP5 上層	窯道具	サヤ 円形	14.0 内径 12.6	5.2 内高 3.6	15.5	—	外) 灰黄褐10YR4/2 内) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5YR7/2	d	体部下位に径1.2㎝の焼成前穿孔あり(3穴)。内外面回転ナデ。外底静止糸切り。	外底周縁に灰白色の粘土帯剥離痕。内底に砂が付着。体部外面に自然釉。
627	TP6 下層	窯道具	サヤ 円形	11.8 内径 10.5	5.9 内高 4.2	13.8	—	外) にぶい黄橙 10YR7/3 内) 灰白2.5Y8/1 断) 灰白2.5Y8/1	d	体部下位に径1.5㎝の焼成前穿孔あり。内外面回転ナデ。外面強いロクロ目。外底静止糸切り。	外底周縁に灰白色の粘土帯剥離痕。内底に砂。体部内面に灰釉陶器(小皿か)の口縁部片が溶着。
628	TP6 下層	窯道具	サヤ 円形	15.4	4.8	15.2	—	外) 褐7.5YR4/3 内) にぶい黄 25YR6/3 断) 褐灰10YR6/1	d	体部下位に径1.5㎝の焼成前穿孔あり。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面に印刻。口縁端部に粘土帯剥離痕。
629	TP6 下層	窯道具	サヤ 円形	12.9	5.1	13.4	—	外) 褐7.5YR4/3 内) にぶい黄褐 10YR5/4 断) 灰白10YR7/1	d	体部下位に径1.5㎝の焼成前穿孔あり。内外面回転ナデ。外底静止糸切り。	体部外面に印刻。
630	TP6 上層	窯道具	サヤ 円形	13.8 内径 11.4	5.2 内高 3.5	12.7	—	外) 橙7.5YR6/6 内) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	d	体部下位に径1.4㎝の焼成前穿孔あり。内外面回転ナデ。外面強いロクロ目。外底静止糸切り。	口縁端部に径1.7㎝の団子状粘土が付着、外底周縁に粘土剥離痕。内底に砂。体部外面に自然釉。
631	TP1 上層	窯道具	サヤ 円形	15.0 内径 13.0	5.1 内高 3.6	15.0	—	外) 灰褐7.5YR4/2 内) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y6/2	d	体部下位に径1.5㎝の焼成前穿孔あり。内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面中位に印刻。口縁端部と外底周縁に粘土帯剥離痕。
632	TP4 下層	窯道具	サヤ 円形	17.2 内径 16.0	5.4 内高 4.0	8.4	—	外) 灰黄褐10YR6/2 内) にぶい黄橙 10YR6/3 断) にぶい黄橙 10YR6/3	d	体部下位に径1.8㎝の焼成前穿孔あり(3穴)。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	使用痕なし。
633	TP5 下層	窯道具	サヤ 円形	15.0 内径 13.4	5.3 内高 3.8	15.8	—	外) 黒褐10YR3/2 内) にぶい黄褐 10YR5/3 断) 灰白2.5Y7/1	d	体部下位に焼成前穿孔あり。内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	外底に粗い土塊と焼き台が溶着。

Tab.25　遺物観察表 (25)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法･特徴	備考
				口径	器高	底径					
634	TP1 下層	窯道具	サヤ 円形	12.0 内径 10.0	4.7 内高 3.5	14.0	—	外) にぶい黄橙 5YR7/4 内) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3	d	上下の個体とも、抉り・穿孔の有無不明。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	内面に礫、窯土が多量に入りサヤ2個体が溶着。サヤは紐状の粘土帯によって接合される。遺物の有無は不明。
635	TP6 下層	窯道具	サヤ 円形	15.9 内径 13.8	5.1 内高 3.1	16.4	—	外) 灰褐7.5YR5/2 内) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5YR7/2	d	体部下位に径1.2㎝の焼成前穿孔あり(2穴)。内外面回転ナデ。内面下位に強いユビナデ。外底静止糸切り。	口縁端部と外底周縁に灰白色の粘土帯剥離痕。外底周縁に団子状粘土が2箇所付着。内底に砂。
636	TP5 上層	窯道具	サヤ 円形	14.0 内径 13.0	5.4 内高 4.3	15.4	—	外) 暗褐10YR3/3 内) 明黄褐10YR7/6 断) 灰白10YR7/1	d	体部下位に径1.2㎝の焼成前穿孔あり。内外面回転ナデ。外底静止糸切り。	口縁端部に扁平な団子状の粘土塊が付着、外底周縁にも同様の粘土塊と剥離痕。体部外面に自然釉。
637	TP2 上層	窯道具	サヤ 円形	18.8 内径 17.2	8.3 内高 6.7	19.0	—	外) にぶい赤褐 5YR5/3 内) にぶい黄橙 10YR7/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	体部下位に径1.5㎝の焼成前穿孔あり。内外面回転ナデ。外底ナデ。	内底にヘラ記号。外底周縁に粘土が付着。内底に灰白色砂。
638	TP5 下層	窯道具	サヤ 円形	18.6 内径 17.0	7.5 内高 6.5	19.2	—	外) 灰褐7.5YR5/2 内) にぶい黄橙 10YR6/3 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	体部下位に径1.9㎝の焼成前穿孔あり(3穴)。内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	口縁端部と外底周縁に灰白色の粘土帯剥離痕。内底に砂が付着。
639	TP2 上層	窯道具	サヤ 円形	19.4	6.6	18.6	—	外) 暗赤褐5YR5/3 内) にぶい黄橙 10YR7/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	体部下位に径1.8㎝の焼成前穿孔あり(3穴)。内外面回転ナデ。外底に凹凸あり。	口縁端部に灰白色の粘土帯が付着。外底に円形の剥離痕。内底に灰白色砂が付着。外面に自然釉。
640	TP4 下層	窯道具	サヤ 円形	21.0 内径 15.2	7.6 内高 6.0	21.0	—	外) 暗赤褐 2.5YR3/4 内) 褐7.5YR4/3 断) 褐7.5YR4/3	d	体部下位に径1.9㎝の焼成前穿孔あり。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	外底から外面下位にかけて粘土塊が溶着。外面に自然釉。
641	TP6 下層	窯道具	サヤ 円形	21.2	6.4	20.8	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 内) にぶい黄橙 10YR6/3 断) 灰黄褐10YR6/2	d	抉り・穿孔の有無不明。内外面ロクロ目。外底静止糸切り。	体部外面に印刻。
642	TP1 下層	窯道具	サヤ 円形	22.0 内径 20.0	6.1 内高 4.8	22.6	—	外) にぶい赤褐 2.5YR4/3 内) にぶい赤褐 5YR4/3 断) 灰白10YR8/2	d	抉り･穿孔の有無不明。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	側面片側に粘土塊が溶着。内底に灰白色砂。
643	TP4 中層	窯道具	サヤ 円形	20.1 内径 17.6	8.7 内高 6.7	21.6	—	外) にぶい赤褐 5YR4/3 内) にぶい黄橙 10YR6/4 断) にぶい黄橙 10YR6/4	d	体部下位に径1.9㎝の焼成前穿孔あり(3穴)。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	口縁端部と外底周縁に灰白色の粘土帯が付着。内底に灰白色砂。
644	TP6 下層	窯道具	サヤ 円形	21.4	7.0	23.0	—	外) 浅黄褐10YR8/3 内) 浅黄橙10YR8/4 断) 浅黄褐10YR8/4	d	抉り・穿孔の有無不明。内外面ロクロ目。外底静止糸切り。	内底にヘラ記号。
645	TP1 下層	窯道具	サヤ 円形	21.4 内径 19.2	8.0 内高 5.9	22.0	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 内) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 7.5YR7/4	d	体部に径1.5㎝の焼成前穿孔あり(3穴)。内外面回転ナデ。外面ロクロ目顕著。外底回転糸切り。	使用痕なし。
646	TP4 中層	窯道具	サヤ 円形	24.2 内径 22.4	7.3 内高 5.9	24.0	—	外) 橙7.5YR6/6 内) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	体部下位に径1.9㎝の焼成前穿孔あり(3穴)。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面に印刻(雷文)。
647	TP5 下層	窯道具	サヤ 円形	18.8	6.6	10.0	—	外) にぶい褐 7.5YR5/3 内) 褐灰10YR6/1 断) 灰黄褐10YR6/2	d	体部下位に径1.8㎝の焼成前穿孔あり(3穴)。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	内底にヘラ記号。
648	TP5 下層	窯道具	サヤ 円形	18.2	7.5	18.0	—	外) 褐灰10YR5/1 内) にぶい黄橙 10YR6/3 断) 灰黄褐10YR6/2	d	体部下位に径1.8㎝の焼成前穿孔あり(3穴)。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	内底にヘラ記号。口縁端部と外底周縁部に粘土帯剥離痕。
649	TP4 中層	窯道具	サヤ 円形	18.0 内径 16.2	4.2 内高 3.0	18.8	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 内) にぶい褐 7.5YR6/3 断) にぶい褐 7.5YR6/3	d	抉り･穿孔の有無不明。内外面ロクロ目顕著。外底に凹凸あり。	口縁端部に粘土帯付着、外底周縁に連続した打痕。
650	TP2 上層	窯道具	サヤ 円形	28.6 内径 27.0	5.3 内高 4.0	27.8	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 内) にぶい黄褐 10YR5/3 断) 橙7.5YR6/6	d	抉り・穿孔の有無不明。内外面ロクロ目。外底に凹凸あり。	使用痕なし。

Tab.26　遺物観察表 (26)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
651	TP1 下層	窯道具	サヤ 円形	16.0 内径 14.0	4.2 内高 3.4	17.0	—	外) にぶい赤褐 5YR5/4 内) にぶい黄褐 10YR5/3 断) にぶい黄褐 10YR5/3	d	体部中位に径1.2㎝の焼成前穿孔あり。内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面の3箇所に印刻。
652	TP5 上層	窯道具	サヤ 円形	22.4 内径 20.0	4.7 内高 4.0	23.4	—	外) 灰褐7.5YR4/2 内) にぶい橙 7.5YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	抉り・穿孔の有無不明。外面工具によるヨコナデ。内面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面に印刻。
653	TP5 上層	窯道具	サヤ 円形	—	—	20.0	—	外) 暗赤褐5YR3/3 内) 灰黄2.5YR7/2 断) 灰黄褐10YR6/2	d	体部下位に焼成前穿孔あり。外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	内底にヘラ記号。外面に自然釉。
654	TP5 上層	窯道具	サヤ 円形	—	—	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/4 内) 灰白7.5Y8/1 断) 灰白10Y7/1	d	口縁部に抉りあり。内外面ロクロ目顕著。	体部外面に印刻(輪違い文)。
655	TP1 下層	窯道具	サヤ 円形	—	—	—	—	外) 灰褐7.5YR5/2 内) にぶい黄 2.5Y6/3 断) 褐灰10YR6/1	d	内外面回転ナデ。内面ロクロ目顕著。	体部外面に印刻。口縁端部に粘土帯剥離痕。
656	TP5 上層	窯道具	サヤ 円形	—	—	15.6	—	外) 灰黄褐10YR6/2 内) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰黄褐10YR6/2	d	抉り・穿孔の有無不明。内外面ロクロ目顕著。外底静止糸切り。	体部外面に印刻(輪繋ぎ文)。
657	TP1 上層	窯道具	サヤ 円形	—	—	15.2 内径 10.0	—	外) にぶい赤褐 5YR5/4 内) 灰黄褐10YR5/2 断) 灰黄褐10YR5/2	d	抉り・穿孔の有無不明。内面ロクロ目顕著。外面強いヘラナデ。外底静止糸切り。	体部外面下位に印刻(三重丸)。
658	表採	窯道具	サヤ	—	—	—	—	外) 黒褐7.5YR3/2 内) 黄灰2.5Y6/1 断) 灰白10YR7/1	d	内外面回転ナデ。	体部外面に印刻(輪違い文)。
659	TP1 下層	窯道具	サヤ 不整楕円形	—	5.7 内高 4.5	—	—	外) 灰黄褐10YR6/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	タタラ成形。内面布目。体部外面ヨコハケ。外底ハケ。	
660	TP1 上層	窯道具	サヤ 楕円形	—	6.2 内高 4.6	—	—	外) にぶい橙 7.5YR7/3 内) にぶい黄橙 10YR7/3 断) 灰白10YR8/1	d	タタラ成形。内面布目。体部外面ユビオサエ、ナデ。外底ナデ。	
661	TP5 下層	窯道具	サヤ 楕円形	—	5.1 内高 3.5	—	—	外) にぶい黄橙 5YR8/4 内) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3	d	体部下位に径1.7㎝の焼成前穿孔あり(確認数2穴)。分割成形。底部と体部の境に接合痕あり、接合部付近の内外面に連続したユビオサエ・強いユビナデ。体部内外面回転ナデ。外面ロクロ目顕著。内底と外底静止糸切り。	使用痕なし。
662	TP4 下層	窯道具	サヤ 楕円形	—	4.8 内高 3.5	—	—	外) にぶい黄橙 5YR7/3 内) にぶい黄橙 10YR6/3 断) にぶい黄橙 10YR6/3	d	径1.8㎝の焼成前穿孔あり。分割成形。底部と体部の境に接合痕明瞭、接合部付近の内外面に連続したユビオサエ。体部内外面ロクロ目顕著。内底と外底静止糸切り。	
663	TP5 下層	窯道具	サヤ 楕円形	—	—	—	—	外) にぶい橙 7.5YR7/4 内) 灰白7.5YR8/2 断) にぶい黄橙 10YR7/3	d	体部下位に径1.8㎝の焼成前穿孔あり(確認数2穴)。分割成形。底部との接合部で剥離。剥離部分に糸切り痕が残る。接合部付近の内外面に連続したユビオサエ・強いユビナデ。体部内外面回転ナデ。外面ロクロ目顕著。	
664	TP6 下層	窯道具	サヤ 箱形	—	全高 5.1 内高 3.7	全幅 13.5 内幅 11.0	—	外) にぶい黄褐 10YR4/3 内) にぶい黄褐 10YR5/3 断) にぶい黄橙 10YR6/3	d	体部両側面の下位に径1.7㎝の円孔あり(確認数2穴)。タタラ成形。内面布目。体部外面ユビオサエ、ナデ。外底直線方向のナデ。	
665	TP5 下層	窯道具	サヤ 箱形	—	6.6 内高 4.7	—	—	外) にぶい褐 7.5YR6/3 内) 灰白10YR8/1 断) 褐灰10YR6/1	d	タタラ成形。体部内外面ユビオサエ、ナデ。	
666	TP6 上層	窯道具	トチン	5.8	8.0	5.6	3.6	外) にぶい褐 7.5YR5/3 断) 灰白10YR7/1	d	外面ユビオサエ、ナデ。	外面に自然釉。
667	TP2 上層	窯道具	トチン	6.2	7.9	6.6	3.6	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3	d	外面ユビオサエ、ナデ。	上面・下面の周縁に敲打痕。
668	TP1 上層	窯道具	トチン	7.1	9.4	7.0	5.0	外) 灰黄褐10YR4/2 断) 灰白10YR7/1	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	上面に粘土塊が付着。側面に印刻(菱文)。

Tab.27　遺物観察表 (27)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
669	TP1 上層	窯道具	トチン	6.0	10.4	5.8	4.1	外) にぶい褐 7.5YR5/3 断) 灰白10YR8/2	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面の二箇所に印刻。外面に自然釉。
670	TP7	窯道具	トチン	6.4	10.0	6.4	4.3	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) にぶい橙 5YR6/4	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻(2丸)。
671	TP1 上層	窯道具	トチン	7.0	10.2	7.4	4.8	外) 灰褐7.5YR4/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	外面ユビオサエ、ナデ。体部中央に強い握り痕。	上面に灰白色の扁平な粘土が付着。上面に径5.7㎝の高台痕を残して、外面に自然釉。
672	TP5 上層	窯道具	トチン	6.2	10.4	6.0	4.8	外) 灰褐7.5YR4/2 断) 明褐灰7.5YR7/2	d	外面ユビオサエ、ナデ、シボリ目。	上面・下面に灰白色の扁平な粘土が付着。周縁に敲打痕。
673	TP5 上層	窯道具	トチン	7.1	10.9	7.0	4.5	外) にぶい黄 2.5Y6/3 断) 灰白2.5Y7/1	d	外面ユビオサエ、ナデ。	上面と下面に灰白色の粘土片が付着。周縁に敲打痕。外面に敲打痕。
674	TP7	窯道具	トチン	7.2	—	—	5.2	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) 浅黄橙10YR8/3	d	上面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。上面に灰白色の団子状粘土塊が付着。
675	TP6 下層	窯道具	トチン	7.3	11.3	6.6	4.7	外) 黄灰2.5Y6/1 断) 浅黄2.5Y7/3	d	外面ユビオサエ、ナデ。	
676	TP1 上層	窯道具	トチン	7.6	12.6	7.7	5.5	外) 褐灰5YR4/1 断) 灰黄褐10YR5/2	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
677	TP6 上層	窯道具	トチン	7.6	12.6	7.6	5.2	外) 灰黄褐10YR5/2 断) にぶい黄橙 10YR5/3	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
678	TP6 下層	窯道具	トチン	7.2	12.3	7.3	5.1	外) にぶい黄橙 10YR7/4 断) 灰白10Y8/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ、シボリ目。	側面に印刻。
679	TP6 上層	窯道具	トチン	6.4	11.9	5.8	4.7	外) 灰黄褐10YR4/2 断) にぶい黄橙 10YR7/4	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。上面に径5.2㎝の円形の製品痕を残して自然釉が掛かる。
680	TP1 上層	窯道具	トチン	6.7	11.7	6.6	4.8	外) 黒褐10YR3/1 断) にぶい黄褐 10YR5/3	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	上面に団子状の粘土塊が付着。側面にヘラ記号。
681	TP1 上層	窯道具	トチン	7.6	13.5	7.6	4.7	外) にぶい褐 7.5YR5/3 断) 灰白10YR8/1	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	上面に粘土塊が付着。側面に印刻(4ツ丸)。
682	TP5 上層	窯道具	トチン	—	13.4	6.8	4.4	外) 黒褐10YR2/3 断) 灰白7.5YR7/1	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻(輪違い文)。上面に製品の高台痕を残して周辺に自然釉。
683	TP6 上層	窯道具	トチン	7.3	13.5	6.4	5.1	外) 黒褐10YR2/2 断) にぶい黄橙 10YR7/3	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。上面に浅黄橙色の粘土塊が付着。下面に粘土塊の剥離痕。
684	TP1 上層	窯道具	トチン	7.7	11.9	7.5	5.5	外) 褐灰10YR4/1 断) 灰白10YR7/1	d	外面ユビオサエ、ナデ。	上面の3箇所に灰白色の扁平な粘土が付着。上面に径7㎝の高台痕を残して、外面に自然釉。上下に粗い砂が付着。
685	TP7	窯道具	トチン	8.0	12.5	7.7	5.0	外) 黄灰2.5Y5/1 断) 不明	d	外面ユビオサエ、ナデ。	上面に灰白色の扁平な粘土が付着。上面と下面に径6.5㎝の高台痕を残して、外面に自然釉。
686	TP5 上層	窯道具	トチン	7.0	13.5	7.2	5.1	外) 黒褐10YR2/3 断) 灰白7.5YR7/1	d	上面と下面に凹凸あり。側面ナデ。	側面に印刻(輪違い文)。上面に灰白色の粘土塊が付着。側面に灰釉碗の口縁部片が溶着。
687	TP5 上層	窯道具	トチン	6.9	12.8	7.0	4.8	外) 暗褐10YR3/3 断) にぶい黄橙 10YR7/4	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻(2丸と1丸)。上面と下面に灰白色の粘土塊が付着。
688	TP1 下層	窯道具	トチン	10.9	13.9	10.5	6.5	外) にぶい黄褐 10YR5/4 断) 灰黄2.5Y7/2	d	外面ユビオサエ、ナデ。	外面に自然釉。
689	TP4 下層	窯道具	トチン	9.1	13.0	9.5	5.6	外) 黄灰2.5Y6/1 断) 灰黄褐10YR6/2	d	外面ユビオサエ、ナデ。	上面・下面の周縁に敲打痕。外面に自然釉。一部に鉄釉が流れ落ちる。
690	TP1 下層	窯道具	トチン	7.6	—	—	4.7	外) 浅黄橙10YR8/3 断) にぶい黄橙 10YR6/3	d	上面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ、シボリ目。	側面にヘラ記号。その裏側にヘラによる文字「たつ四月十九日高六右エ門」か。
691	TP6 下層	窯道具	トチン	4.0	3.6	4.5	3.0	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) 浅黄橙10YR8/3	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
692	TP5 上層	窯道具	トチン	4.5	4.5	4.6	3.0	外) にぶい橙 7.5YR7/4 断) 灰白7.5YR8/2	d	外面ユビオサエ、ナデ。	敲打により周縁の数カ所が欠損。
693	TP5 上層	窯道具	トチン	4.6	5.0	4.1	3.6	外) にぶい黄橙 10YR6/3 断) 不明	d	外面ユビオサエ、ナデ。	上面・下面の周縁に敲打痕。
694	TP1 上層	窯道具	トチン	5.0	4.6	5.9	4.2	外) にぶい黄橙 10YR7/3	–	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
695	TP1 上層	窯道具	トチン	5.0	5.1	4.8	4.2	外) 褐7.5YR4/3	–	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。外面に自然釉。

Tab.28　遺物観察表 (28)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
696	TP6 上層	窯道具	トチン	5.5	4.4	5.5	3.5	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい黄橙 10YR7/4	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
697	TP6 上層	窯道具	トチン	5.1	4.5	5.0	3.9	外) にぶい褐 7.5YR5/3 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	外面ユビオサエ、ナデ。	
698	TP6 下層	窯道具	トチン	6.1	4.1	6.2	5.0	外) 灰黄褐10YR6/2 断) にぶい黄橙 10YR7/3	d	外面ユビオサエ、ナデ。	
699	TP1 上層	窯道具	トチン	6.0	5.6	5.4	4.9	外) にぶい黄褐 10YR5/3 断) にぶい橙 7.5YR6/4	d	外面ユビオサエ、ナデ。	上面・下面の周縁に敲打痕。外面に自然釉。
700	TP5 上層	窯道具	トチン	6.7	5.7	6.8	3.8	外) 灰白5Y7/1 断) 不明	d	外面ユビオサエ、ナデ。	上面に灰白色の粘土片が付着。上面・下面の周縁に敲打痕。
701	TP6 下層	窯道具	トチン	6.4	6.3	6.4	4.4	外) 灰白2.5Y7/1 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	外面ユビオサエ、ナデ。	敲打により周縁の数カ所が欠損。
702	TP1 上層	窯道具	トチン	6.0	5.1	6.0	4.4	外) 灰黄褐10YR4/2 断) にぶい黄橙 10YR7/4	d	外面ユビオサエ、ナデ。体部中央に強い握り痕。	上面に灰白色の粘土片が溶着。上面・下面の周縁に敲打痕多数。外面に自然釉。
703	TP5 上層	窯道具	トチン	6.0	5.7	6.4	4.6	外) にぶい黄褐 10YR5/3 断) 灰白10YR7/1	d	外面ユビオサエ、ナデ。	上面・下面に浅黄橙色の扁平な粘土が付着。周縁に敲打痕。外面に自然釉。
704	TP5 上層	窯道具	トチン	6.3	6.3	6.6	5.0	外) 暗褐7.5YR3/3 断) 黄灰2.5Y6/1	d	外面ユビオサエ、ナデ。	上面に灰白色の粘土片が付着。外面に自然釉。
705	TP6 下層	窯道具	トチン	7.0	7.6	7.0	4.9	外) 灰白N7/1 断) にぶい黄橙 10YR7/3	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。上面に製品の高台痕。
706	TP6 下層	窯道具	トチン	7.1	8.3	7.6	4.8	外) 黒褐10YR3/1 断) 褐灰7.5YR6/1	d	外面ユビオサエ、ナデ。	上面に灰白色の扁平な粘土が付着。上面に径6.5cmの高台痕を残して、外面に自然釉。
707	TP1 下層	窯道具	トチン	8.3	9.9	8.2	6.1	外) にぶい褐 7.5YR6/3 断) 灰白7.5YR8/2	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	印刻・ヘラ記号なし。
708	TP3 上層	窯道具	トチン	9.8	11.1	10.0	6.8	外) 暗灰黄2.5Y5/2 断) 灰黄褐10YR6/2	d	外面ユビオサエ、ナデ。	上面・下面の周縁に敲打痕。外面に自然釉。
709	TP1 上層	窯道具	トチン	12.6	13.5	11.4	7.6	外) 黒褐7.5YR3/2	d	上面と下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	上面に灰白色の団子状粘土塊が付着。円形の製品痕を残して自然釉が掛かる。
710	TP1	窯道具	トチン	8.0	—	—	—	外) 灰5Y6/1 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	外面、ナデ、シボリ目。	上面中央に印刻(山か)あり。上面周縁に円盤状の粘土が付着。
711	TP5 上層	窯道具	トチン	7.2	—	—	4.5	外) 灰白7.5Y7/2 断) 灰白10YR8/1	d	上面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。上面に浅黄橙色の団子状粘土塊が付着。
712	TP1 上層	窯道具	トチン	9.0	—	—	5.8	外) 黒褐10YR2/2 断) 灰白10YR7/1	d	上面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ハケ、ナデ。	側面に印刻。上面に灰白色の砂と灰白色の団子状粘土下塊が付着。外面に自然釉。
713	TP1 上層	窯道具	トチン	—	—	6.8	—	外) 褐7.5YR4/3 断) 灰白10YR7/1	d	上面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。上面に製品の高台痕あり。外面に自然釉。
714	TP1 上層	窯道具	トチン	—	—	8.0	5.2	外) 黒褐10YR3/2 断) 灰白10YR7/1	d	上面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。上面の2箇所に灰白色の団子状粘土塊が付着。外面に自然釉。
715	TP1 上層	窯道具	トチン	—	—	7.2	4.1	外) 灰褐7.5YR4/2 断) 灰黄褐10YR5/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。外面に自然釉。
716	TP6 下層	窯道具	トチン	—	—	6.9	4.5	外) 灰褐7.5YR4/2 断) 褐灰10YR6/1	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
717	TP5 上層	窯道具	トチン	—	—	6.8	4.0	外) 灰白N8/ 断) 灰黄褐10YR6/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
718	TP6 下層	窯道具	トチン	—	—	6.8	4.0	外) 暗赤褐5Y3/3 断) にぶい黄橙 10YR7/3	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
719	TP1 上層	窯道具	トチン	—	—	8.0	4.6	外) 灰褐7.5YR4/2 断) にぶい黄褐 10YR5/3	d	上面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。上面に灰白色団子状の粘土塊が付着。
720	TP5 上層	窯道具	トチン	—	—	7.8	4.9	外) 黒褐10YR3/1 断) 灰黄褐10YR6/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
721	TP6 上層	窯道具	トチン	—	—	—	5.1	外) 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
722	TP1 上層	窯道具	トチン	—	—	7.2	4.8	外) 灰白10YR7/1 断) にぶい黄橙 10YR7/4	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。

Tab.29　遺物観察表 (29)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
723	TP4 中層	窯道具	トチン	—	—	7.8	5.1	外) 灰白10YR8/1 断) にぶい黄橙 10YR6/3	d	下面にユビオサエあり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
724	TP1 上層	窯道具	トチン	—	—	6.5	4.6	外) 灰白N8/ 断) 灰白10YR8/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。外面に自然釉。
725	表採	窯道具	トチン	—	—	7.2	5.3	外) 灰白N8/ 断) 灰白2.5Y8/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
726	TP4 中層	窯道具	トチン	—	—	7.2	5.1	外)にぶい黄褐10YR5/4 断)にぶい黄橙10YR7/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
727	TP4 中層	窯道具	トチン	—	—	8.5	5.4	外) 黒褐10YR2/2 断) 褐灰10YR6/1	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。外面に自然釉。
728	TP5 上層	窯道具	トチン	—	—	7.5	4.3	外) 黄灰2.5Y6/1 断) 灰黄2.5YR6/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
729	TP6 下層	窯道具	トチン	—	—	7.6	3.8	外)にぶい黄橙10YR6/3 断)にぶい黄橙10YR6/3	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ・縦方向の強いイタナデ。	側面に印刻。
730	TP5 下層	窯道具	トチン	—	—	6.6	5.1	外) 黄灰2.5Y6/1 断) にぶい黄橙 10YR7/4	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
731	TP5 上層	窯道具	トチン	—	—	7.0	4.8	外) 黒褐10YR3/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面に印刻。
732	TP6 下層	窯道具	トチン	6.3	—	—	4.3	外) 灰黄褐10YR4/2 断) 灰白10YR7/1	d	上面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。上面に灰白色の団子状粘土塊が付着。
733	TP1 上層	窯道具	トチン	8.0	—	—	5.8	外) 暗褐10YR3/3 断) 灰白10Y7/1	d	上面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ハケ、ナデ。	側面にヘラ記号。上面の2箇所に灰白色の団子状粘土塊が付着。
734	TP4 中層	窯道具	トチン	—	—	7.5	4.6	外) 暗オリーブ褐 2.5YR3/3 断) 褐灰10YR6/1	d	上面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ、シボリ目。	側面にヘラ記号。外面に自然釉。
735	TP4 中層	窯道具	トチン	—	—	7.0	4.4	外) 暗灰黄2.5Y4/2 断) 褐灰10YR6/1	d	上面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。上面に製品の高台痕を残してその他に自然釉。
736	TP1 上層	窯道具	トチン	—	—	7.0	4.1	外) 灰白10YR8/2 断) 灰黄褐10YR6/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
737	TP6 下層	窯道具	トチン	—	—	6.7	4.6	外) にぶい褐 7.5YR5/3 断) 灰白10YR8/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
738	TP6 下層	窯道具	トチン	—	—	6.0	3.6	外) にぶい褐 7.5YR5/3 断) 灰白10YR8/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
739	TP6 下層	窯道具	トチン	—	—	6.7	3.9	外) にぶい黄橙 10YR7/3 断) 灰白2.5Y8/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
740	TP6 下層	窯道具	トチン	—	—	6.0	4.1	外) にぶい黄橙 10YR7/4 断) 灰白10YR8/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
741	TP6 下層	窯道具	トチン	—	—	7.0	3.9	外) にぶい黄褐 10YR5/3 断) 灰白10YR8/1	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
742	TP1 上層	窯道具	トチン	—	—	6.6	3.8	外) 灰褐7.5YR4/2 断) 褐灰10YR5/1	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
743	TP6 下層	窯道具	トチン	—	—	6.9	4.0	外) にぶい黄橙 10YR7/4 断) 灰白2.5Y8/1	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
744	TP1 下層	窯道具	トチン	—	—	6.6	4.1	外)にぶい橙7.5YR7/4 断)にぶい黄橙10YR7/3	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ、シボリ目。	側面にヘラ記号。
745	表採	窯道具	トチン	—	—	8.2	4.5	外)にぶい褐7.5YR5/4 断)にぶい橙5YR6/4	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
746	TP6 下層	窯道具	トチン	—	—	6.7	4.5	外) にぶい黄橙 10YR7/4 断) 灰白10YR8/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
747	TP5 上層	窯道具	トチン	—	—	7.8	—	外) 灰黄褐10YR6/2 断) にぶい黄橙 10YR7/2	d	外面ユビオサエ、ナデ、シボリ目。	外面に自然釉。
748	TP6 上層	窯道具	トチン	—	—	6.0	3.8	外) 黒褐10YR3/2 断) 灰黄褐10YR6/2	d	下面に凹凸あり。側面ユビオサエ、ナデ。	側面にヘラ記号。
749	TP6 上層	窯道具	ハマ	5.2	1.0	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	下面に同心円状の沈線4条。使用痕なし。
750	TP1 上層	窯道具	ハマ	5.0	0.9	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	3箇所に円錐ピン剥離痕。
751	TP6 上層	窯道具	ハマ	5.1	1.0	—	—	外) にぶい黄 2.5Y6/3	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	3箇所に円錐ピン剥離痕。上面に高台痕1個。
752	TP2 上層	窯道具	ハマ	5.2	0.8	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/3	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	6箇所に円錐ピン剥離痕。上面に径4.2cmの高台痕2個。
753	TP4 中層	窯道具	ハマ	5.1	0.7	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/3	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	6箇所に円錐ピン剥離痕。上面に径3.8cm他の高台痕2個。

Tab.30　遺物観察表 (30)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
754	TP4 中層	窯道具	ハマ	5.7	1.1	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/4	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	7箇所に円錐ピン剥離痕。上面に径3.8cmと4.0cmの高台痕2個。
755	TP1 上層	窯道具	ハマ	5.6	0.9	—	—	外) にぶい黄2.5Y6/3 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	17箇所に円錐ピン剥離痕。上面に高台痕4個。
756	TP1 上層	窯道具	ハマ	6.2	1.3	—	—	外) 灰黄2.5Y 7/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	4箇所に円錐ピンが溶着、9箇所に剥離痕。上面に高台痕4個。
757	TP4 上層	窯道具	ハマ	6.0	1.1	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	3箇所に円錐ピン剥離痕。上面に径4.5cmの高台痕1個。
758	TP6 上層	窯道具	ハマ	6.1	1.0	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	11箇所に円錐ピン剥離痕。上面に高台痕3個。
759	TP4 上層	窯道具	ハマ	5.6	1.0	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花) あり。2箇所に円錐ピンが溶着。2箇所に円錐ピンの剥離痕。上面に高台痕1個。
760	TP5 上層	窯道具	ハマ	5.8	0.8	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花) あり。11箇所に円錐ピン剥離痕。上面に高台痕2個。
761	TP6 下層	窯道具	ハマ	5.8	0.8	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/4 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花) あり。2箇所に円錐ピン剥離痕。上面に高台痕2個。8箇所に円錐ピン剥離痕。上面に高台痕3個。
762	TP4 上層	窯道具	ハマ	6.4	1.0	—	—	外) にぶい黄 2.5Y6/4 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花・芯あり) あり。2箇所に円錐ピンが溶着、12箇所に剥離痕。上面に高台痕3個。
763	TP4 上層	窯道具	ハマ	5.9	1.0	—	—	外) にぶい黄 2.5Y6/4 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花・芯あり) あり。3箇所に円錐ピンが溶着、6箇所に剥離痕。上面に高台痕3個。
764	TP6 上層	窯道具	ハマ	5.6	0.9	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/4 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花・小型) あり。1箇所に円錐ピンが溶着、11箇所に剥離痕。上面に高台痕3個。
765	TP6 上層	窯道具	ハマ	5.4	0.9	—	—	外) にぶい黄 2.5Y6/3 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花・芯あり) あり。2箇所に円錐ピン剥離痕。上面に高台痕2個。
766	TP4 上層	窯道具	ハマ	5.2	0.8	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花・芯あり) あり。1箇所に円錐ピンが溶着、5箇所に剥離痕。上面に径4.4cmの高台痕2個。
767	TP5 上層	窯道具	ハマ	5.5	0.9	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花・芯あり) あり。1箇所に円錐ピンが溶着、4箇所に剥離痕。
768	TP6 上層	窯道具	ハマ	5.4	0.7	—	—	外) 黄灰2.5Y6/1	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花・芯あり) あり。4箇所に円錐ピン剥離痕。上面に高台痕。
769	TP1 下層	窯道具	ハマ	5.6	1.0	—	—	外) にぶい黄2.5Y6/3 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花) あり。9箇所に円錐ピンの剥離痕あり。
770	TP4 中層	窯道具	ハマ	5.6	0.7	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花・芯あり) あり。3箇所に円錐ピン剥離痕。
771	TP4 上層	窯道具	ハマ	6.4	1.1	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(16弁菊花) あり。1箇所に円錐ピンが溶着。2箇所に円錐ピンの剥離痕。
772	TP6 下層	窯道具	ハマ	5.7	0.9	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(12弁菊花と輪違文) あり。2箇所に円錐ピン剥離痕。上面に焼き台が溶着。ハマ焼き台とも全体に粗い砂が付着。
773	TP4 上層	窯道具	ハマ	5.3	0.8	—	—	外) にぶい黄褐 10YR5/3 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻あり。8箇所に円錐ピン剥離痕。上面に高台痕2個。
774	TP6 上層	窯道具	ハマ	6.0	0.9	—	—	外) にぶい黄 2.5Y6/4 断) 灰白2.5Y7/1	b	下面周縁部に面取り。上面回転糸切り、下面回転ナデ。	印刻あり。1箇所に円錐ピンが溶着。上面に高台痕1個。全体に自然釉が掛かる。
775	TP4 上層	窯道具	ハマ	5.6	1.0	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(山形文) あり。数箇所に円錐ピンの剥離痕。上面に径4cmの高台痕3個。
776	TP6 上層	窯道具	ハマ	6.0	0.9	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰黄2.5Y6/2	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(山形文) あり。上面に墨書。使用痕なし。
777	TP5 上層	窯道具	ハマ	6.0	0.9	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(山形文) あり。1箇所に円錐ピン剥離痕。
778	TP6 上層	窯道具	ハマ	6.4	1.0	—	—	外) にぶい黄 2.5Y6/3 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(雲文) あり。3箇所に円錐ピンが溶着、10箇所に剥離痕。上面に高台痕あり。
779	TP1 上層	窯道具	ハマ	5.3	0.9	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2	—	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(雷文) あり。上面に径4cmの高台痕1個。
780	TP6 上層	窯道具	ハマ	6.2	1.0	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(雲文) あり。使用痕なし。

Tab.31　遺物観察表 (31)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
781	TP6 上層	窯道具	ハマ	6.4	1.1	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/4 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	1箇所に円錐ピンが溶着、9箇所に剥離痕。上面に径4.2㎝と4.8㎝の高台痕2個。
782	TP2 上層	窯道具	ハマ	7.1	1.3	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/3 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻(8弁菊花) あり。3箇所に円錐ピンが溶着。4箇所に円錐ピンの剥離痕。上面に高台痕2個。
783	TP4 上層	窯道具	ハマ	5.6	0.8	—	—	外) にぶい黄褐 10YR5/3 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	印刻又は釘彫りによる丸文あり。2箇所に円錐ピンが溶着、10箇所に剥離痕。上面に高台痕。
784	TP1 上層	窯道具	ハマ	6.0	0.8	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	中央に釘彫りによる記号。7箇所に円錐ピンの剥離痕あり。
785	TP4 上層	窯道具	ハマ	6.1	0.8	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	ヘラ記号あり。数箇所に円錐ピン剥離痕。上面に高台痕2～3個。
786	TP1 下層	窯道具	ハマ	9.5	1.3	—	—	外)にぶい黄橙10YR7/4 断)にぶい黄橙10YR7/3	b	上面回転糸切り。下面回転ナデ。下面周縁部に面取り。	8箇所に円錐ピン剥離痕。上面に径7㎝の高台痕1個。
787	TP2 下層	窯道具	ハマ	7.0	0.6	—	—	外)にぶい橙7.5YR6/4 断)にぶい橙7.5YR6/4	c	上面と下面に凹凸あり。	
788	TP4 上層	窯道具	ハマ	5.8	0.7	—	—	外) 灰白2.5Y7/2	_	上面回転糸切り。下面回転ナデ。面取り無し。	3箇所に円錐ピン剥離痕。
789	TP2 上層	窯道具	ハマ	7.0	1.6	—	—	外) 黒褐10YR3/2	_	上面と下面に凹凸あり。	上面周縁部に円盤状の粘土が三箇所に付着。周縁に自然釉。
790	TP5 上層	窯道具	ハマ	6.8	1.3	—	—	外)にぶい黄橙10YR7/3 断)にぶい黄橙10YR7/3	d	上面と下面に凹凸あり。側面に上下からの押圧によるヒビ割れ。	
791	TP1 下層	窯道具	ハマ	8.8	1.4	—	—	外)にぶい黄橙10YR6/3 断)にぶい黄橙10YR6/3	d	上面と下面に凹凸あり。	側面に自然釉。
792	TP1 下層	窯道具	ハマ	7.6	1.3	—	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/2	d	上面と下面に凹凸あり。	
793	TP1 上層	窯道具	ハマ	8.2	1.1	—	—	外)にぶい黄橙10YR6/3 断)にぶい黄橙10YR6/3	d	上面と下面に凹凸あり。	
794	TP1 上層	窯道具	ハマ	8.0	1.0	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/3	_	上面と下面に凹凸あり。	上面に製品の高台痕を残して周囲に自然釉が掛かる。
795	TP6 下層	窯道具	ハマ	8.2	1.2	—	—	外)にぶい黄橙10YR7/3 断)にぶい黄橙10YR7/3	d	上面にチヂレ目、下面に凹凸とチヂレ目。	上面に印刻。
796	TP5 上層	窯道具	ハマ	10.4	1.3	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/3 断) にぶい黄橙 10YR6/3	d	上面と下面に凹凸あり。	下面に墨書。
797	TP1 上層	窯道具	ハマ	9.9	1.4	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/3 断) にぶい黄橙 10YR6/3	d	上面と下面に凹凸あり。	側面に自然釉。
798	TP4 中層	窯道具	ハマ	10.3	1.3	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰白2.5Y8/1	c	上面ナデ、下面に凹凸。	
799	TP5 上層	窯道具	ハマ	16.0	2.0	—	—	外)にぶい黄褐10YR5/3 断) 灰黄褐10YR6/2	d	上面と下面に凹凸あり。	上面に製品の高台痕あり。粗砂、自然釉が付着。
800	TP6 下層	窯道具	ハマ	19.3	2.1	—	—	外)にぶい黄褐10YR5/3 断) 灰黄褐10YR6/2	d	上面ハケ、ナデ、下面ナデ。側面ヨコナデ。中央に焼成前穿孔あり。	上面に製品の高台痕を残して周辺に自然釉。
801	TP6 上層	窯道具	ハマ	17.0	2.1	—	—	外)にぶい黄橙10YR7/3 断)にぶい黄橙10YR7/3	d	上面ナデ、下面チヂレ目。側面に上下からの押圧によるチヂレ。	上面に印刻(8弁菊花)。
802	TP5 上層	窯道具	匣蓋又は焼き台	22.0	2.5	—	—	外) にぶい褐 7.5YR6/3 断) 褐7.5YR4/6	d	上面と下面に凹凸あり。側面に上下からの押圧によるチヂレ。	
803	TP4 下層	窯道具	匣蓋又は焼き台	20.9	2.2	—	—	外)にぶい橙7.5YR6/4 断)にぶい橙7.5YR6/4	d	上面と下面イタナデ。	側面に自然釉。
804	TP4 中層	窯道具	匣蓋又は焼き台	22.0	2.3	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/3 断) 灰黄褐10YR6/2	d	上面ユビオサエ、ナデ、下面静止糸切り。	
805	TP4 上層	窯道具	匣蓋又は焼き台	20.0	2.4	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	d	上面と下面に凹凸あり。	側面に自然釉。
806	TP1 上層	窯道具	匣蓋又は焼き台	18.9	2.2	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	d	上面ナデ、下面静止糸切り。側面ユビオサエ、ナデ。	
807	TP1 下層	窯道具	ハマ	18.0	1.7	—	—	外) にぶい黄橙 10YR6/3～灰褐 7.5YR4/2 断)にぶい黄橙10YR6/3	d	上面静止糸切り。下面直線方向のナデ。	上面に製品痕を残して周囲が変色。
808	TP4 中層	窯道具	匣蓋又は焼き台	30.0	3.0	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4	d	上面と下面に凹凸あり。	上面に黒褐色の高台が溶着。

Tab.32　遺物観察表 (32)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
809	TP4 下層	窯道具	匣蓋又は焼き台	30.0	2.4	—	—	外) 灰黄2.5Y7/2 断) 灰黄2.5Y7/2	d	上面と下面ナデ。側面ヨコハケ。	上面に鉄釉が一部付着。
810	TP4 下層	窯道具	匣蓋又は焼き台	31.0	2.3	—	—	外) にぶい褐 7.5YR6/3 断) にぶい褐 7.5YR6/3	d	上面ナデ、下面静止糸切り。側面ヨコハケ。	
811	TP4 上層	窯道具	匣蓋又は焼き台	34.0	2.2	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) にぶい橙 7.5YR6/4	d		側面に自然釉。
812	TP5 上層	窯道具	焼き台	—	2.1	—	—	外) にぶい黄褐 10YR5/3 断) 灰黄褐10YR6/2	d	楕円形か。上面と下面に凹凸あり。	
813	TP6 上層	窯道具	匣蓋又は焼き台	—	全厚 1.8	—	—	外) 灰黄褐10YR4/2 断) 不明	d	円盤形。調整不明。	上面全体ににぶい黄橙色の粘土が溶着。全体に自然釉が掛かる。
814	TP5 下層	窯道具	焼き台	12.0	14.2	9.6	—	外) 灰黄褐10YR5/2 内) にぶい黄橙 10YR7/3 断) 灰N7/	d	内外面ロクロ目顕著。上面回転糸切り。	上面周縁に団子状の粘土が付着。上面に径5.3cmの製品高台痕が残る。外面に自然釉。
815	TP5 上層	窯道具	焼き台	8.2	—	—	—	外) 灰黄褐10YR4/2 断) 灰白N7/1	c	上位に径1.3cmの焼成前穿孔(1穴又は2穴)。内外面ロクロ目顕著。上面回転糸切り。	上面の周縁に円盤状粘土が4箇所付着。外面に自然釉。
816	TP1 上層	窯道具	焼き台	8.1	—	—	—	外) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰白2.5Y7/1	d	穿孔の有無は不明。内外面に強いロクロ目。上面回転糸切り。	上面の周縁に円盤状粘土が2箇所付着。2箇所に溶着痕。外面に自然釉。
817	TP1 上層	窯道具	焼き台	—	—	—	—	外) にぶい黄褐 10YR5/4 内) 浅黄橙10YR8/3 断) 灰白10YR8/2	d	内外面ロクロ目顕著。体部中位に焼成前穿孔あり。	体部外面の2箇所に印刻。
818	TP6 下層	窯道具	焼き台	6.4	11.4	13.0	—	外) 灰黄褐10YR6/2 内) にぶい黄橙 10YR7/4 断) にぶい黄橙 10YR7/4	d	体部中位に焼成前穿孔あり。内外面回転ナデ。上面回転糸切り。	上面に径5.4cmの製品高台痕が残る。
819	TP4 中層	窯道具	チャツ	6.0	3.3	5.2	—	外) 黄灰2.5Y6/1 内) 灰黄2.5Y6/2 断) 灰白2.5Y7/1	b	内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	内外面に自然釉。口縁端部に敲打痕。
820	TP1 下層	窯道具	焼き台か	13.6	3.3	—	—	外) 灰白2.5Y7/1 断)にぶい黄橙10YR7/2	d	中央に焼成前穿孔。上面に凹凸あり。下面と側面ユビオサエ、ナデ。	上面に煤。
821	TP6 上層	窯道具	焼き台か	—	3.1	—	—	外)にぶい黄褐10YR5/4 断) 灰白10YR7/1	d	外面ナデ。	全面に自然釉。
822	TP2 上層	窯道具	円錐ピン	—	残0.7	1.0	—	にぶい黄橙10YR7/2	b		先端部を欠損。
823	TP2 上層	窯道具	円錐ピン	—	残0.7	1.0	—	にぶい黄橙10YR7/2	b		先端部を欠損。
824	TP1 上層	窯道具	円錐ピン	—	残0.6	0.8	—	灰白10YR7/1	b	外面ナデ。	接合部で剥離。接合部に灰釉が掛かる。先端部を欠損。
825	TP1 上層	窯道具	円錐ピン	—	0.7	0.8	—	にぶい黄橙10YR7/2	b	先端部周辺にユビオサエ、ユビナデ。	剥離痕なし。先端部が残存。
826	TP1 上層	窯道具	円錐ピン	—	残0.6	0.9	—	にぶい黄橙10YR7/2	b	先端部周辺にユビオサエ、ユビナデ。	先端部を欠損。
827	TP6	窯道具	円錐ピン	—	残0.7	0.9	—	にぶい黄橙10YR7/2	b	先端部周辺にユビオサエ、ユビナデ。	先端部を欠損。
828	TP5 上層	窯道具	円錐ピン	—	残0.5	0.7	—	にぶい黄橙10YR7/3	b	先端部周辺にユビオサエ、ユビナデ。	上面にハマの一部が溶着。先端部を欠損。
829	TP5 上層	窯道具	団子トチ	全長 2.7	全幅 2.5	全厚 1.0	—	灰白10YR8/2	b	側面にユビ痕。上面と下面に圧痕。	
830	TP6 上層	窯道具	団子トチ	全長 3.2	全幅 2.0	全厚 0.6	—	灰白10YR7/1	b	側面にユビ痕。上面と下面に圧痕。	
831	TP4 上層	窯道具	接合材	全長 8.5	全高 1.4	全幅 1.2	—	灰白2.5Y8/2	b	粘土紐をちぎり、両側面に連続したユビオサエ。上面に幅8mmの高台状の個体の剥離痕あり。	
832	TP5 下層	窯道具	接合材	全長 12.0	全高 2.4	全幅 1.1	—	灰白2.5Y8/2	b	粘土紐をちぎり、両側面に連続したユビオサエ。上面に幅8mmの高台状の個体の剥離痕あり。	
833	TP5 下層	—	色見孔塞ぎ蓋	天井部径 10.0	10.5	16.5	—	外) 灰白5Y7/1 断) 灰白5Y7/1	d	脚部中空。外面にユビオサエ、ナデ。	上面に灰釉が落ちる。
834	TP5 上層	—	不明	9.7	—	—	—	外) 灰白2.5Y8/2 断) 灰白2.5Y8/1	d	上面の中央に焼成前穿孔あり。外面ナデ・ユビオサエ。	外面が白く変色。自然釉は認めない。
835	TP5 上層	—	不明	10.2	—	—	—	外) 浅黄橙10YR8/3 断) 灰白10YR8/2	d	穿孔の有無は不明。外面ナデ、ユビオサエ。	自然釉は認めない。
836	TP5 上層	—	不明	10.9	—	—	—	外) 明褐灰7.5YR7/1 断) 灰白7.5YR8/2	d	外面ナデ、ユビオサエ。	外面は白く粉状。自然釉は認めない。
837	TP5 上層	—	不明	—	—	14.2	—	外) 灰白10YR8/1 断) 灰白7.5YR8/2	d	外面ナデ、ユビオサエ。	自然釉は認めない。

Tab.33　遺物観察表 (33)

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量				色調	胎土	技法・特徴	備考
				口径	器高	底径					
838	TP5 上層	—	不明	天井部 11.0	5.8	18.8	—	外) 浅黄橙10YR8/3 断) 浅黄橙10YR8/3	b	外面ユビオサエ、ナデ。	
839	TP1 上層	—	煉瓦又は焼き台	—	—	全幅 8.2	—	外) にぶい赤褐 5YR5/3 断) 灰白10YR8/1	d	箱型。外面ナデ。	片面に赤褐色の粘土塊が溶着。外面に自然釉少量。
840	TP5 下層	—	煉瓦	—	—	全幅 8.7	—	外) にぶい橙 7.5YR7/3 断) 灰白10YR7/1	d	箱型。外面ナデ、タタキ目。	外面、被熱赤変するが、自然釉は認めない。
841	TP4 下層	—	煉瓦	—	全高 8.2	—	—	外) にぶい橙 7.5YR6/4 断) 灰白10YR8/2	d	箱型。外面ナデ、タタキ目。	外面は白く変色。自然釉は認めない。
842	TP6 上層	陶器	型	4.6か	2.3	—	—	灰白2.5Y8/1	b	陰刻による寿字文。文字は細い針状の工具で彫る。摘みはケズリ出し。摘みと印面に白色の釉を薄く施釉。	摘み上面にヘラ記号「寿」。

[遺物観察表凡例]

1) 胎土:尾戸焼の胎土については含有鉱物の粒度と含有量の違いによってa～dに区分し、表記した。各々の特徴は次の通りである。また、何れの胎土についても断面に円孔や裂孔が観察できる。

胎土a...円形粒の石英細粒砂を多量、長石細粒砂を少量含む。黒色粒を微量含む。

胎土b...円形粒の石英細粒砂を多量、角粒の石英細粒砂と長石粗粒砂を少量含む。黒色粒を微量含む。

胎土c...角粒の石英細粒砂・長石粗粒砂を多量、長石の角礫を少量含む。黒色粒を少量含む。

胎土d...角粒の石英細粒砂・長石粗粒砂、長石の角礫を多量に含む。黒色粒を少量含む。

2) 色調:農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帳」による。

3) 釉薬:尾戸焼の灰釉については、釉調や貫入の規模の違いによってa～cに区分し、表記した。各々の特徴は次の通りである。

灰釉a...灰白色を帯びる半透明の釉で0.5mm以下の細かい貫入が入るもの。

灰釉b...半透明または透明で0.5～1mm前後の細かい貫入が入るもの。

灰釉c...ガラス質で光沢が強く1～2mm前後の粗い貫入が入るもの。

第Ⅴ章　考　察

第1節　近世尾戸窯の操業と製品製作

1. はじめに

近世の尾戸窯は、承応2年（1653）の開窯以来、茶陶を中心に多くの優れた製品を生産した土佐の藩窯である。この尾戸窯の研究は、これまで小野賢一郎、山本貞彦、丸山和雄、伊東正統氏らによって文献史料の解読、伝世資料調査、現地踏査などの方面から詳細な研究が進められてきた。中でも、小野賢一郎、丸山和雄氏によって紹介された『森田久右衛門日記』は、森田家の初代陶工森田久右衛門が各窯業地の状況を描写した見聞記であることから、江戸前期の窯業実態を知る極めて信憑性の高い資料として、現在高く評価されている。

今回の尾戸窯跡平成15年度調査では、近世尾戸窯に関わる貴重な出土資料が多数得られている。そこで本節では、これらの資料検討を行なうに先立ち、諸氏による文献史的研究の成果をふまえながら、尾戸窯の操業体制及びその製品製作の内容などについて検討しておきたい。また、特に製品製作に関わって、その生産の目的と年代的な変遷、江戸前期以降の記録に表れる尾戸焼の具体像などについても検証を行ない、後節での資料検討の手掛かりとしたい。

2. 尾戸窯の開窯

尾戸窯は承応2年（1653）、2代藩主忠義の命により開窯された。承応3年（1654）、藩主忠義が野中主計（兼山）らに宛てた「忠義公書状」(註1)（資料1）からは尾戸開窯までのいきさつが読み取れるが、このうち「肥前焼物其元へ商人令持参候て、其元にも能土有之、焼物出来候ば重宝成候、又は家中侍共下々迄も遣用に致儀と被存、...」との内容からは、肥前焼物の盛行に刺激を受け、藩用品や家臣民家使用の焼物の自給をねらって、自国での陶器生産が試みられたことが窺われる。

開窯にあたって土佐に招かれた久野正伯は、摂州高津、高原焼の陶工で、先の書状の文面からみるところでは、宮崎儀右衛門、植木一郎兵衛、百々平兵衛ら大坂在勤の家臣を介して、土佐に招聘されたらしい。初期の窯は城の北側にあたる尾戸に築かれ、正伯によって初期の尾戸焼製作が行なわれた。また、正伯の元には、森田久右衛門と山崎平内が置かれ、両人が作陶の技術を学んだ。

開窯初期の尾戸焼は「正伯焼」「正伯弟子焼」として記録に表れている。(註2) また『忠義公書状』中にみえる正伯の製作品は茶入、茶碗、花入れ、皿であり、それらは「くはんにう入仕立」のものであったらしい。

3. 生産体制と操業経緯

正伯帰坂の後は、森田久右衛門と山崎平内が初期尾戸窯での製作に当たり、以後、近世を通じて森田・山崎の両家が藩窯での作陶に代々従事した。製作品目は森田家が茶道具を中心に製作し、山崎家は香炉などの他尾戸雑器の生産に従事したと考えられているが(註3)、山崎家での製作内容については史料に乏しく、不明な点が多い。

また、陶工の身分と待遇については森田家文書の『勤役年譜書』[註4]延宝6年の項に「上下三人扶持被成下候。」とあることから、初代久右衛門以降代々、三人扶持の称号を与えられていたことが分かる。また『勤役年譜書』天明2年（1782）4代弥源次の代には「天明二年正月十三日御呼出仰付られ、職業宜仕候と有、帯刀御免仰付らる。」との記事もあり、4代目以前までは工人ながら帯刀を許された身分であったことが窺われる。ただし山崎家は同じく三人扶持であるが、帯刀は無しであった。

近世末まで藩窯での製作に関わった両家陶工、及び総代を継いだ勤務年は次の通りである。

森田家[註5]

初代久右衛門〔光久〕没年正徳5年（1715）
二代三郎兵衛〔光長〕没年享保12年（1727）
三代三郎兵衛〔光福〕没年宝暦4年（1754）
四代弥源次〔光次〕没年享保3年（1718）
五代久右衛門〔光為〕没年文政11年（1828）
六代八之丞〔光繁〕没年嘉永5年（1852）
七代寿之助、左馬之助、鴨助、鴨居、緑山、〔光全〕明治3年、潤之助〔潤〕に譲る。

山崎家[註6]

初代平内〔勝之〕没年宝永7年（1710）
二代平兵衛〔勝茂〕没年延享3年（1746）
三代藤七〔勝利〕没年明和9年（1789）
四代源之丞〔光信〕没年文化5年（1808）
五代代作〔信為〕没年天保11年（1840）
六代永太郎〔信吉〕没年安政5年（1858）
七代伴蔵〔高幸〕明治4年被免、没年明治16年（1883）

森田家陶工のうち初代の久右衛門光久は、延宝6年（1678）夏には四代藩主豊昌より江戸出府を命じられ、各地の窯業の視察や大名茶人の前での作陶を行った。この年夏から翌7年夏までの各地での見聞を詳細に記録したものが『森田久右衛門日記』[註7]である。また久右衛門は、この前年には『幡多中村旅日記』を記している。久右衛門は正徳5年（1715）に75歳で病死するまでの63年間を務め、二代忠義から六代豊隆まで仕えた。二代を継いだ三郎兵衛光長については『森田家勤役年譜書』に「一、久右衛門悴三郎兵衛、幼年より父に随御用手伝相勤、正徳五年、父跡目、同年八月廿三日上下三人扶持相続被仰付勤之。」と記載される。相続時、三郎兵衛はすでに57歳の年齢に達しているが、同年譜書の記述によれば三郎兵衛は幼年から藩御用の作陶に久右衛門とともに従事しており、窯場の操業は一族の者による協同作業から成り立っていたことが窺われる。

『森田家古記録』[註8]によれば、この後、享保12年（1727）の大火により尾戸窯場は焼失し、元文4年（1739）に新たな窯場が再建されている。窯場の構造については同記録元文4年6月の項に「尾戸焼物所細工所両家共建続新に二間梁に十三間に御建下さる、但一人前に向五間ひぢに一間半惣瓦葺

也、ひちより御用之御焼物御見分所、薬調合□用間に被仰付。...」と記されている。

さらに、文政3年（1820）には磁器窯と陶器窯が能茶山に開かれ、藩窯経営の主力が磁器生産に移るとともに、尾戸の窯場は能茶山に移転される。この時の状況について、七代鴨助差し出しの『勤役年譜書』では「御用焼物仕成方此度御趣向を以、御町方仕成場へ仰付らるに付、於尾戸仕成方当時差止られ、依右御屋敷退候様仰付らる、尤数代家族引越罷在儀、格段御詮議を以、引越料として銀二百五十目之を成遣はさる、尤爾来の御補米は差除かれ候。」との記載が見られ、尾戸窯陶工はこれによって、本俸の三人扶持と補米一石のうち、補米一石を除かれている。仕事は能茶山にて引き続き行われたが、以後、作陶の記録は少なくなっている。

明治4年には藩窯は廃止され、明治以降、尾戸窯は民間窯として継続されていく。

4. 尾戸焼の製作と製品像

(1) 藩御用品の製作

尾戸窯で注文製作された藩御用品の内容については、森田家文書『勤役年譜書』『森田家古記録』中の製作記事や、『山内家史料』等の記載から、そのあらましを知ることができる。(Tab.34) ここに表れる製品は「茶碗、茶入、水指、香合、水入、四角の焼物」など茶器や供膳用の器、かわらけ類であり、藩邸使用の食器、儀器、贈答品などの用途で注文製作された品々である。以下、その用途毎に、製作記録をみていくこととする。

①藩邸内使用品

尾戸焼の製作記録には、用途や依頼元が明記されておらず贈答目的か或いは藩内での使用を目的としたものか判別し難いものも多く含まれるが、中には藩邸内での使用を推察できる記事も数例認められる。

このうち『森田家古記録』享保10年の項にある「江戸御用と有、徳利四つ、蓋茶碗八つ被仰付旨、」、「御賄方にて壺「カワラケ」焼候様に仰付られ候事」、「御賄方よりは雑煮ちやわん二百個、同さいカワラケ四百枚被仰付候事。」等は江戸上屋敷や藩邸内での使用を推察出来るものであり、依頼元として「御賄方」の名称が表れる。ここでは製作器種として徳利・蓋茶碗・雑煮ちやわん・壺「カワラケ」・カワラケなどが見られ、供膳具が多く含まれる。また、注文品に雑煮茶碗二百個、カワラケ四百枚など数量の多いものが含まれる点も特徴的である。

②儀礼・供宴関係

藩の儀式に際して尾戸陶工が御用品を製作した記事は『森田家年譜』『森田家古記録』の三代三郎兵衛から四代弥源次の項に多く見受けられる。

まず『森田家年譜』の元文2年（1737）3月に「若殿様御箸揃御用相勤」、同年9月に「御城二之御丸柱立御祈祷御用仰付られ。」。『森田家古記録』の寛保3年（1743）9月に「御城二の丸御造営御柱立唯一神道の御祈祷御蟇目御飾のかわらけ被仰付。」『森田家年譜』の延享元年（1744）「二の御丸御蟇目御用仰付られ、」、延享2年（1745）2月「御城御移徒御用仰付られ、」、寛延2年（1749）大火によって焼失した天守閣再建の儀式に際して「御本丸成就御移徒御用左之通一、素焼御瓶子一対仕成三郎兵衛一人一、御雑煮茶碗三拾森田□□一、御向付小茶碗三拾山崎藤七一、御盃□□六つ」、寛延4年

(1751)「大守様御四十の御賀おちやわん品々、」、宝暦3年(1753)「御厄抜御祝御用おちやわん品々指上、」、宝暦8年(1758)「御蕚目御用仰付られ仕成指上、」、宝暦11年(1761)6月「大守様御賀御祝御用仰付られ仕成指上、」、明和4年(1767)「大守様御病気に付、御蕚目御祈祷有之、御用仰付られ」等の記載が認められ、そこには神事にて用いる蕚目・かわらけ・素焼瓶子等の土器、祝賀用の茶碗・向付・盃、等の製作記事が示されている。

また先の寛延2年(1749)大火によって焼失した天守閣再建の儀式に際する御用の記録では、儀礼用の素焼き瓶子を森田本家、供宴用の食器を森田末家と山崎家が製作し、森田・山崎の両家が分担して勤めを行ったことが示されている。

③贈答関係

この他に、尾戸窯の製作活動の重要な一側面として贈答品の生産が挙げられる。

尾戸焼贈答の記録をたどると、まず山内家文書『歴代公紀』のうち山内忠義の書状を収めた収録方文書に明暦3年(1657)「正伯焼之焼物澤山ニ可有之候間方方へ令音信候ためにまハし候様ニと被申越候早早申付早積セ候間追付廻り可申候」の記録が見える。尾戸窯初期の段階にはその製品は「正伯焼」として知られており、諸公への音信を兼ねて「正伯焼」贈答が盛んに行われた様子が窺われる。

続いて、山内家文書言上留書帳には寛文6年(1666)「正伯弟子焼之御茶入二十計御用之由被為仰下候御蔵ニ御座候」とあり、ここに「正伯弟子焼」茶入の贈答記事が表れている。

他にも贈答関係の記事は森田家文書の『勤役年譜書』にも多く見受けられる。そこには、享保5年(1720)視察のため来高した幕府目付、享保6年(1721)戸普請奉行、安永5年(1776)江戸老中田沼意次への贈答など幕府方への贈答記事が記されている。また安永5年(1776)九代藩主豊雍が川上不白に入門した際には、秋田藩主佐竹右京太夫、宇和島藩主伊達遠江守らに尾戸焼香炉・茶碗・天目碗を贈っており、茶道を媒介とした大名・茶人への贈答が行われている。その他、縁戚関係での贈答があり、贈答品の内容は茶入・茶碗・水指・香炉などの茶陶や、硯水入・花生・白土器等である。

これら贈答品の製作工程をみると、贈答先の屋敷に陶工が直接参じて作陶を実演し、相手方の好みの品を後日焼成して贈るという形式が採られたことが『森田久右衛門日記』に示されている。また久右衛門以降においても、『勤役年譜書』元禄4年(1707)の項「御切形を以て御好遊ばされ候御茶碗、松平伊予守様へ準ぜられ候処、」など、製作前に「切形」等の見本が示され、選ばれた意匠の製品を製作するという方法が採られている。

また製作品についての藩の指示は、『森田家古記録』享保6年から10年の項に詳しいので以下その一部を引用する。

享保10年(1725)「一、同八月十八日水指の御切形一つ、狩野永川筆の雲鶴の絵、竹の模様、わらびの絵、松竹梅の絵、宝尽の絵、〆五枚右茶碗の模様に被仰る、雁の香合の図一枚、但水入とも仕べし御使者栗原雲作老於御屋敷被渡る。一、同日雲作老被仰聞候茶碗、筋の付やう上一筋ぐるりと致候へば、下筋は半分ほどにして書けと申すべし、こよみ手など乱に致されと被仰る、并此度御差上候濃茶碗の内、御屋敷に有、高さ二分程下げて焼立申べし、雲作老所蔵の水指の様にも仕べし。一、八月廿五日瀬戸焼御水指御本にて、土形夫々わらび手の模様書、御目に掛申様に被仰付、御使者雲

作老。」

ここでは藩側よりの使者として栗原雲作という人物が登場し、水指・茶碗・香合又は水入製作の命を伝えている。仰せ付けの際には、見本として水指の「切形」や茶碗の文様の絵、香合の図などが示され、製品意匠が具体的に指示されている。また、茶碗外面への圏線や暦手の描き方など、文様表現の細部に至るまで細かな指示が与えられている。さらに製作途中にも、成形品の「土形」や「文様書」を提出する様に指示が出され、優品を生産するための藩の入念な指導が見られる。

しかしながら、こうした贈答品の製作記事は元禄年間四代藩主豊昌（1669～1700）から7代藩主豊常（1720～1725）までの時代をピークとして、八代藩主豊敷（1725～1767）以降は徐々に減少していく。文化6年の山内家文書『豊興公紀』の記述からは土佐藩武士層における茶の湯の衰退が窺われており、こうした茶道の衰退や藩財政の窮迫と倹約政策を背景に、尾戸窯もその作風を転じざるを得なくなったものと推察される。

(2) 販売品の製作

享保初年頃、六代藩主豊隆から「尾戸焼物師申付事」として以下の通達が出されている。(註9)「尾戸焼物師共、向後ハ惣而諸品念入候手きは能き細工指止、麁相之仕成ニて御国中末末迄要用可相達雑物器焼出シ可申事。」これは、藩の赤字財政を補う目的から、手間をかけた上手の品は差し止め今後は民間向けの雑器を製作するようにとの意向であるが、尾戸焼贈答の記事はこの通達以降も七代藩主豊常の代までは続いており、こうした通達が即座に藩窯経営の転換に結びついたとは捉え難い。しかし文面からみて、民間向けの尾戸焼の製作と販売は18世紀初めにはすでに藩窯経営の中で一定の位置付けをもって行われていたとみることができる。

尾戸焼の販売に関わる記事で古いものでは、『桂井素庵筆記』の寛文4年（1664）9月21日の条がある。ここでは「此日竹の筒の如く成花生買申也。但京町唐津屋にて買申也。又其花生かはぬさきに江の口遠土の唐つやへ参花生買に参申候へとも、忠義公のかうろを焼申に付花生もなし。其より戻り申也。」との記述が見られており、17世紀後半には民間向けの「唐津屋」が江の口の尾戸と京町に存在していたことが分かる。また、この日、尾戸で目的の花生は購入されていないが、文面からみて花生等の製品が尾戸で日常的に販売されていたことが推察できる。

また、文化12年（1815）編纂の『南路志』(註10)（資料2）にも、尾戸の「陶屋」の名称が記載されている。

一方、尾戸の白かわらけ（白土器）の販売に関する記事もみえる。藩の法令集である『憲章簿』(註11)文政3年（1820）の覚え書（資料5）には城下に流通する製品の値段取り決めに関する通達が示されているが、ここには「鎌・釘・船釘・桑懸・大杉原・小杉原・半紙」他の製品名とともに「尾戸かわらけ」が挙げられており、江戸後期には販売品としての尾戸かわらけが市場に広く流通していたと推察される。さらに、この尾戸かわらけについては、元禄期の土佐名物を記した『土佐国産往来』（資料4）に「鴨部能茶山白土」「尾戸焼茶碗、同土器」として表れ、宝暦12年（1762）以来の故実を記した『貞丈雑器』(註12)（資料3）にも、京の深草焼に並ぶ白かわらけとして名を挙げられている。こうした記事より、尾戸の白かわらけは遅くとも元禄期頃には土佐の名産品となり、以後近世を通じて広く流通したとみられる。

この他、販売品の器種については、森田家文書『戸陶値段表』に詳しい。[註13] (資料6) そこには宝永7年 (1710)、享保18年と19年 (1733・1734)、寛保2年 (1742)、寛延2年 (1749) に販売された尾戸焼とその価格が記され、18世紀前半代の販売品として「濃茶碗、薄茶碗、茶入、蓋置、香炉、香合、水指、風炉、奈良茶碗、ひなの蓋茶碗、ひなの膳、菊皿、鱠皿、菓子鉢、猪口、汁こぼし、汁次、盃台、御上酒入徳利、水吸、水次、花瓶、花生、大砂物鉢、置物、瓶子、硯水入、ぶんちん、火トボシ、引手、たばこ入、鳥の水あひ、鳥の餌入、ひしゃく立、横渡し、白土器」など様々な製品名が認められる。

八代藩主豊敷の代以降、尾戸での贈答品製作が減少に向かったことは先に触れた通りであるが、尾戸窯の生産活動は、18世紀以降はこうした民間向け販売品の生産を主力とするものに移行していたと思われる。江戸後期以降の尾戸焼の生産状況の動向については文献資料に乏しく、不明な点が多いが、それについては遺跡出土資料の内容も照合させ、後節にて触れることとしたい。

〔註〕

1)『山内家史料忠義公紀』「収録方文書」承応2年

2)『山内家史料忠豊公紀』「収録方文書」明暦3年、「言上留書牒」寛文6年。

5) 森田家文書『勤役年譜書』。森田芳伯「尾戸焼森田家系図について」『土佐史談137号・139号』土佐史談会1974年。

6)『山崎家勤役年譜書』(丸山和雄『土佐の陶磁』より引用)

7)『森田久右衛門日記』は、昭和7年陶器全集刊行会出版の『陶器全集』にて一度刊行されたが、この後、丸山和雄氏の釈読による全文刊行が東洋陶磁学会から昭和53年に出された。原本は現在県文化財に指定されている。

9) 平尾道雄『土佐藩工業経済史』より引用。

10)『土佐国史料集成南路志』高知県立図書館1991年。

11)『土佐藩法制史料憲章簿』「穀泉・国産・御用銀編」高知県立図書館1982年

12) 伊勢貞丈『貞丈雑器』

3・4・8・13) 丸山和雄『土佐の陶磁』より引用。

〔参考文献〕

丸山和雄『土佐の陶磁』雄山閣出版1973年丸山和雄「土佐の陶器-尾戸焼」『世界陶磁全集』

丸山和雄「近世土佐の茶道と焼物」『高知の研究4』清文堂出版

丸山和雄「森田久右衛門江戸日記」「森田久右衛門江戸日記について」『東洋陶磁Vol.5』東洋陶磁学会1978年

多田勝重「尾戸焼の研究」『海南史学25号』

森田芳伯「尾戸焼森田家系図について」『土佐史談137号・139号』土佐史談会1974年

平尾道雄『土佐藩工業経済史』高知市民図書館1957年

『山内家史料第三代忠豊公紀』山内神社宝物資料館1982年

『土佐国史料集成南路志』高知県立図書館1991年

『土佐藩法制史料憲章簿』高知県立図書館1982年

資料1.『忠義公書状』

一、肥前焼物其元へ商人令持参候て、其元にも能土有之、焼物出来候ば重宝成候、又は家中侍共下々迄も遣用に致候と被存、焼物いたし候者、其元へ下候様に内々令才覚候へと、大坂宮崎儀右衛門、植木一郎兵衛かたへ、去年の夏申遣、正伯と申焼物師壱人聞立置候へども、儀右衛門も其後相煩、一郎兵衛は大宮殿普請に付、京都へ罷上、其段百々平兵衛に申置候故、ふち方切米なとも少に而下度と申候ば、早々差下候様にと平兵衛方へ申遣候、其通彼者に申聞候へば、ふち切米に少も望無之、終四国より焼物出不申候間、罷下焼して見申度と申よし、大坂より申越に付、去年八月に其許へ呼下被申候由、可為其分候。

一、焼物いたし候釜、江之口お戸之小山にうたせ、下地冬中に仕、極月中旬に焼申候よし、可為其分候

一、茶入茶碗水差花入香炉皿之類、此外色々物数五百斗焼申候所に、新釜、其上道具する申台之土悪敷、くづれ候て過半損候よし、可為其分候

一、茶入茶碗花入皿、物数十二、くはんにう入仕立をいたし、何もに見せ申、分病中慰に見申様にと、対馬守納戸奉行共に言伝、目録差越被申、目録之通相届候

一、相残焼物色々取揃、差越可被申得へども彼者妻子大坂就在之、年越に罷上度と申、罷上、仕立なども不仕候間、罷下仕立をもいたし候ば、大廻之船に差越可被申候旨、得其意候

一、大白染付なども焼申候よし申候へ共、左様の土、未見出し申さず間、連々を以、たづね出候ば焼可申候のよし、其外者、如形成土共其許に有之候と申候よし、可為其分候

一、右被差越候焼物、一段見事にやき申候、殊ふち切米も望不申、弥一段之事候、如被申越候、音信などにも遣候ため、又今下々の遣用にも旁重宝成事に候、今時分きりしたん御改弥きびしく候間、大坂へも申遣、左様之吟味をもよく被仕、以来之考を弥いたされ尤に存候

（承応三年）　三月廿七日

忠

野中主計殿
岡村平次殿
小倉弥右衛門殿

資料2.『南路志』

陶屋

元祖松白大坂者ニ而老移帰国す。或云長州萩の産　初者幡多薮田ニ而焼、其後朝倉村ニ而焼。其弟子久右衛門、其子三郎兵衛、子孫尾戸ニ住。

資料3.『貞丈雑器』巻ノ七・膳部ノ部

「白かはらけと云は白く焼たる也。今も京の深草焼、土佐の尾土焼などは、ごふんをぬりたる如く白きかわらけなり」

資料4.『土佐国産往来』

「福井茄子、鴨部能茶山白土、朝倉田大根」

「酒は尼崎屋、虎屋酢、尾戸焼茶碗、同土器」

資料5.『憲章簿』

覚

一中村地下成鬢付　壱包代廿八文已下　但、壱斤八包を以。

一木綿染地絞り形付類

但、先達而尺売直段夫々御極被仰付置候処、已来は町役ゟ仕切目六ニ引合直段相極、改判入を以売買被仰付筈。

一鎌　一釘　一船釘　一尾土（からけ）　一桑懸　一大杉原
一小杉原（生）一半紙　一粕半紙　一長持　一美濃紙　一太布
一髪鋏　一荏の油一鳥もち　一壱ツ椀　一三ツ椀　一弐ツ椀
一めんつ一筋立　一石灰　一ねり灰

〆　但、右品々御下城廻り之分直段右同断

右は先達而直段定被仰付置候処、此度御詮議之上右之通御極被仰付候條、各被得其旨支配中可被触聞候。

已上

文政三辰年十二月四日

徳弘文次郎
土居只助

資料6.『森田家文書』「戸陶値段表」

一、濃茶碗　壱　代銀三匁五分
　但御茶湯茶碗値段同前
一、薄茶碗　壱　同二匁
一、唐人笠大砂物鉢　壱　同拾匁
　外に浪の毛ぼり有
一、香合　壱　同三匁
一、袖香炉　壱　同三匁
　但御紋は香炉同前
一、しやちほこ香炉　壱　同拾五匁
　高壱尺有
一、かんこ香炉　壱　同二十匁
一、□□御本手香炉　壱　同　八匁
一、耳付香炉　壱　同　五匁
一、香炉　壱　同十五匁
　但置物獅子蓋にすかし　三足耳付
一、布袋香炉　壱　同二十匁
　但袋に腰を掛唐子三人引
一、獅子大香炉　壱　同三十匁
　但高一尺二寸有
一、唐子二人水カメ置物　壱　同十五匁
一、わくの香炉　壱　同十五匁
一、塩屋香炉　壱　同拾五匁
　但つたはへかゝる模様コウシの円窓
　すかし有
一、鷲　坊香炉　壱　同二十匁
一、水香炉　壱　同十五匁
　但岩におし鳥の模様有
一、大香炉　壱　同十匁
　但蓋に蓮花すかし三足御紋付
一、盃台　壱　同四匁
一、染付こがし入　壱　同三匁五分
一、菓子鉢　壱　同拾匁
一、水吸　壱　同三匁
一、□□鍋　壱組同三匁
一、花瓶　壱　同十匁
一、水次　壱　汁□共　同十匁
一、風呂前土器　拾　同三匁
一、硯水入　壱　同三匁
一、風呂　壱　同拾五匁
一、花生　壱　同十匁
一、火トボシ　壱　同六匁
一、水指　壱　同十匁
一、栗鉢　壱　同十匁
一、朝日□成大猪口拾　同六匁
一、茶入　壱　同三匁五分
一、蓋置　壱　同二匁
一、引手　壱　同二匁
　但石画にほり入有
一、鯰皿　拾　同十八匁
　但茶碗皿大かい処共花蓋　壱三分
一、同長ちよく　拾　同五分
一、白土器模様有　拾　同三匁五分
　但無地二匁
一、菊模様茶碗皿蓋　拾　同三匁
一、菊皿　蓋間口三寸皿、同前□入蓋の値段
　拾代　同四匁五分
一、ひなの膳　壱人前　同四匁
一、三寸□　壱　同五匁
　但天暉院様御仏前に在之
一、御紋置上茶碗手間入　壱　同五分九厘四毛
一、御上酒入徳利二升入　壱　同三匁
宝永七寅三月二十二日

御たはこ入　壱　同六匁
　但刻物色々
一、汁こほし　壱ツ同四匁
右同じ
一、瓜さね入　壱ツ同三匁
右同じ
一、奈良茶碗　壱ツ同三匁
享保十八丑十二月二十二日　関　甚八
一、御閨香炉　壱ツ同五匁
享保十八丑十二月二十二日　関　甚八
一、御香炉　壱ツ同七匁
　但□屋産の染付ほり入手間入
右同じ
一、同　壱ツ同七匁
　但宝□染付ほり入手間入
右同
一、同　壱ツ同七匁
　但白こよみ手ほり入手間入
　此四品御香炉当年に被仰付値段極　関甚八
享保十九寅九月卅日　関甚八
一、持□□ちよく　拾ヲ□　同拾匁
　但外に模様有
寛保二戌年四月十七日に値段極る
一、鴨の御卓香炉　壱ツ　代拾五匁
　但御切手高藤本夫蔵□に仰渡山崎鳥介殿礼田丈蔵殿
寛延二巳年八月七日値段極
一、御本丸御移徒御用瓶子一対
　代一対拾八匁壱ツに付九匁づつ　値段極は切手方役高見円六殿
　但此に仰候上野内蔵助殿御用書は勘定奉行小頭野本治右衛門殿に
　仰渡宮地安右衛門殿故実は□□久保村丞へ渡
一、ひなの蓋茶碗　壱　代二匁
一、同皿井猪口共　壱　同壱匁五分

一、すゑ風呂　壱ツ　同二十匁
一、琴高香炉　壱ツ　代三十匁
一、鷺御香炉　壱ツ　同六十匁
一、鳥の水あひ　壱ツ　同五匁
一、なら茶碗　壱ツ　同三匁
一、ひしやく立　壱ツ　同五匁
一、御汁次　壱ツ　同十匁
一、御香物猪口　壱ツ　代一匁
一、ふんちん　壱ツ　代七匁
一、鳥のゑ入水入共　壱　同七分
一、横渡五寸斗
　植物鉢　壱ツ銀三匁
一、同渡り三寸斗植物鉢　壱ツ　二匁
一、横渡し四五寸斗
一、松竹梅茶碗　狩野探幽筆
　領主山内忠義君依命に土藩尾戸に於て
　森田久右衛門作之万治元年
一、雲鶴茶碗　狩野探幽筆
　大老酒井雅楽頭依好に森田久右衛門作之万治元年
一、宝画□蔵模様　竹模様　茶碗
　享保十巳年大老酒井雅楽頭之依好森田三郎兵衛作之
　右三つの絵は狩野永川筆
一、若松模様　狩野探幽筆
　万治二年酒井日向守様御好に依り森田久右衛門作之
一、三ツ組土器
　松竹梅　鶴飛高砂　狩野探幽筆
　寿の字は□□□京都人佐々木志頭磨の筆
一、髪盥水差
　依豊臣君命に江州甲賀郡長野村に於作之同家承応二年
　土藩於尾戸に久野正伯作之
一、小田巻花入　絵あり
　延寛六年江戸に於て御好之由酒井日向守殿依命
　森田久右衛門作之。

Tab.34　尾戸焼製作記録

年	月・日	製品名	目的	贈答先・儀礼内容・藩仰せ付けと作陶趣向等	森田家陶工	藩主	引用文献
明暦3(1657)	3・晦日	「正伯焼之焼物」	贈答	「正伯焼之焼物澤山ニ可有之候間方方へ令音信候ためにまハし候様ニと被申越候早早申付早積セ候間追付廻り可申候」	初代	二代忠義	山内
寛文6(1666)	1・19	「正伯弟子焼之御茶入二十計」	贈答	「正伯弟子焼之御茶入二十計御用之由被為仰下候御蔵ニ御座候・・・」	初代	三代忠豊	山内
延宝5(1677)	春	「焼物細工」	贈答	中村の山内右近太夫へ。「土形御好みにて仕、御覧に入れ奉り」	初代	四代豊昌	森年譜
延宝5	—	「御茶入三百」	—		初代	四代豊昌	森年譜
延宝5	—	—	贈答	江戸の大老酒井雅楽頭・養柳院・京極備中守へ。	初代	四代豊昌	森年譜
貞享3(1686)	3・2	「細工」	—	「二の御丸於御居間、度々細工御上覧被為遊、御好之品々御直に仰付られ」	初代	四代豊昌	森年譜
貞享4(1687)	8	「御水指」	贈答	「御水指焼申様御自筆之御書付を以て仰付られ焼立差上」	初代	四代豊昌	森年譜
貞享4	—	「御水指御茶碗御茶入等」	贈答	松平陸奥守へ。	初代	四代豊昌	森年譜
貞享4	10・13	「国焼ノ茶入二、茶碗六、水指二、」	〃	〃	初代	四代豊昌	山内
元禄4(1691)	11	「細工」	贈答	村田康庵老へ。	初代	四代豊昌	森年譜
元禄4	—	「御茶碗」	贈答	松平伊予守へ。「御切形を以て御好遊ばされ」	初代	四代豊昌	森年譜
元禄4	8・26	「御茶入御水指」	—	—	初代	四代豊昌	森年譜
享保5(1720)	—	「御濃茶碗　御薄茶碗　御硯水入　御袖香炉　御花生　白土器」	贈答	幕府目付へ	二代	七代豊常	森年譜
享保6	春	「獅子の御香炉」	贈答	江戸普請奉行松平采女へ	二代	七代豊常	森年譜
〃	〃	「蓋獅子象眼の香炉一ツ」	〃	〃	二代	七代豊常	森古
享保10(1725)	5・23	—	—	仰せ付「御茶入御切形十四色なりいろいろ、御鳥の水入二色土形仕り」	二代	七代豊常	森古
享保10	5・24	「徳利四つ蓋茶碗八つ」	藩御用	江戸藩邸御用。	二代	七代豊常	森古
享保10	5・26	「御引手三十」	—	仰せ付「御本請取、丸の内に石だたみ御本有」	二代	七代豊常	森古
享保10	5・29	「壺「カワラケ」」	藩賄方へ	賄方へ。	二代	七代豊常	森古
享保10	6・4	「批■立二つ　かきから入一つ」	—	仰せ付「御本有焼立候様」	二代	七代豊常	森古
享保10	6・6	「御茶入十四色、梅の花成御水入」	—		二代	七代豊常	森古
享保10	6・8	「四角の焼物」		仰せ付「四角の焼物御紙形二つ御本有焼立候様」	二代	七代豊常	森古
享保10	6・15	「雑煮ちやわん二百個、同さいカワラケ四百枚」	藩賄方へ	賄方へ。	二代	七代豊常	森古
享保10	6・17	「朝鮮瑠璃の御茶入」	—	仰せ付「御本を以焼立候様」	二代	七代豊常	森古
享保10	7・7	「おじめ六つ・・・馬の模様　鼠の模様に　蟻の米粒引所模様」「御みき砂入」「緒しめ　紋のもやう 菊カラクサの模様」「棚水差　木の束ねたる模様　白薬」「円座御水指」「蓋茶碗」「くり鉢」「櫻の花成小皿」	—	仰せ付。おじめは「御前御好焼立上る」	二代	七代豊常	森古
享保10	8・18	「水指」「茶碗」「雁の香合」「水入」	—	「水指の御切形一つ、狩野永川筆の雲鶴の絵、竹の模様、わらびの絵、松竹梅の絵、宝尽の絵、〆五枚右茶碗の模様に被仰る、雁の香合の図一枚、但水入とも仕べし　御使者栗原雲作老於御屋敷被渡る」「被仰聞候茶碗、筋の付やう上一筋ぐるりと致候へば、下筋は半	二代	七代豊常	森古
享保10	8・25	「水指」	—	仰せ付「瀬戸焼御水指御本にて　土形夫々わらび手の模様書　御目に掛申様」	二代	七代豊常	森古
元文2(1737)	3・16	—	儀礼	「若殿様御箸揃御用」	三代	八代豊敷	森年譜

年	月・日	製品名	目的	贈答先・儀礼内容・藩仰せ付けと作陶趣向等	森田家陶工	藩主	引用文献
元文2	9・25	—	儀礼	「御城二之御丸柱立御祈祷御用」	三代	八代豊敷	森年譜
寛保3(1743)	9・25	「御蓞目、御飾のかわらけ」	儀礼	「御城二の丸御造営御柱立唯一神道の御祈祷」	三代	八代豊敷	森古
延享元(1744)	—	「御蓞目」	儀礼	「二の御丸御蓞目御用」	三代	八代豊敷	森系譜
寛延2(1749)	8・12	「素焼御瓶子一対」「御雑煮茶碗三拾」「御向付小茶碗三拾」「御盃□□六つ」	儀礼・供宴	「御本丸成就御移徒御用」	三代	八代豊敷	森系譜
寛延4(1751)	6・8	「おちやわん品々」	儀礼	「大守様御四十の御賀」	三代	八代豊敷	森年譜
宝暦3(1753)	6	「おちやわん品々」	儀礼	「御厄抜御祝御用」	三代	八代豊敷	森年譜
宝暦4(1754)	5・4	「御姫様の御道具」	—	「御姫様の御道具仰付られ」	四代	八代豊敷	森年譜
宝暦8(1758)	—	「御蓞目」	儀礼か	「御蓞目御用仰付られ」	四代	八代豊敷	森年譜
宝暦11(1761)	6・12	—	儀礼	「大守様御賀御祝御用仰付られ」	四代	八代豊敷	森年譜
明和4(1767)	11・17	「御蓞目」	儀礼	「大守様御病気に付、御蓞目御祈祷有之、御用仰付られ」	四代	八代豊敷	森年譜
安永5(1776)	12	「濃茶碗」	贈答	江戸の老中田沼意次へ「則御茶碗御本江戸より参り「袖の月」と銘有」	四代	九代豊雍	森年譜
安永5	—	「尾戸獅子香炉」	贈答	佐竹右京太夫(秋田藩主)へ	四代	九代豊雍	山内
〃	〃	「尾戸焼」	贈答	伊達遠江守(宇和島藩主)へ	四代	九代豊雍	山内
不明	—	—	—	「大守様於御前、細工御覧に入奉り」	五代	—	森年譜

※引用文献略号　山内＝『山内家史料』、森年譜＝『森田家年譜』、森古＝『森田家古記録』

第2節　尾戸窯跡出土資料の検討

1. はじめに

今回の調査では、尾戸窯関連とみられる陶器、土師質土器、窯道具等多数の遺物が出土し、近世尾戸焼の実像を知る貴重な資料を得ることができた。

近世の尾戸窯については、これまで、文献や伝世資料の方面から研究が深められてきたが、考古学的分野においては、窯跡の本格的な発掘調査が行なわれていないために、基準資料が乏しく、その製品実態については不明な所が多く残されていた。特に、文献上にも表れにくい尾戸雑器については、その実態がつかみ難く、消費地遺跡から出土する場合には殆ど識別がつかない状況である。また、尾戸雑器以外の上手の製品についても、京焼に似た胎土、釉調、文様意匠をもち、その識別が困難なものが多く含まれている。このため、尾戸窯は江戸前期以来の長い操業期間をもつ窯でありながら編年研究が遅れ、製品の年代観も殆ど分かっていない現状である。

今回の出土資料は明確な物原層出土ではなく、混入遺物も多いためその取り扱いには慎重を要するが、この中には、素焼きなどの未製品、焼成不良品、焼け歪みや溶着資料など、明らかに窯場からの廃棄遺物であると捉えられるものも多く含まれている。各資料の詳細については本編にて触れた通りであるが、本節ではこれら出土資料の器種組成、陶器、土器、窯道具の形態特徴や特質などについてまとめておきたい。

2. 尾戸窯推定位置と平成15年度調査地点の性格

寛文9年（1669）の古絵図によれば、初期の窯は、高知城北の外濠をなしていた江の口川の北側にあり、絵図には「焼物師」の記載とともに、作業場とみられる建物と登り窯が描かれている。また、承応3年（1654）『忠義公書状』(註1)の書面には「焼物いたし候釜、江之口お戸之小山にうたせ...」ともあることから、当時の尾戸窯場は川に面した丘陵地に立地していたと推察される。しかし、この尾戸窯跡は、大正末から昭和初年に行なわれた江の口川の川筋を直線方向に変更する改修工事によって窯跡の大半が破壊されており、現在では、遺跡の南端と北端部分が川の両岸に残されるのみである。

尾戸窯場の位置については、丸山和雄氏が、『皆山集』に収められた元禄11年（1698）頃の絵図では窯場の位置が初期の場所から南東方向へ移っていることを指摘され、元禄11年の大火によって窯場の移転が行われた可能性を挙げておられる。(註2)ただし、元禄11年の尾戸窯焼失の記録は見つかっておらず、これに代わる窯場焼失記事は『森田家古記録』享保12年（1727）2月1日「越前町より出火、御城内御家中新町迄焼失の事、尾戸焼物所悉焼失の事...」の記載を確認できるのみである。このため、本稿では第2次窯場再建の時期については17世紀末～18世紀前葉の間と捉え、以後の遺物検討を行うこととしたい。

さて、今回の平成15年度調査地点（Fig.2-A）は現在の江の口川南岸に接しており、寛永9年古絵図に記された地点からは南東側の位置、すなわち先に挙げた再建後の第2次窯場により近い位置にある。したがって、今次出土遺物の年代幅は上限を尾戸窯開窯である承応2年（1653）から窯場の

能茶山移転にあたる文政5年（1832年）までと設定するが、その中でも特に17世紀末～18世紀前葉から文政5年（1832年）までの間に操業した第2次尾戸窯に関わる製品が多く含まれている可能性が考えられる。

なお、今次調査区から東方の地点（Fig.2-B）では、昭和30年代にビル建設工事が計画された際、当時の研究者らによって調査が行われ、製品や窯道具等多くの出土遺物が得られている。[註3] また今回の調査においても、調査対象地の東側の試掘坑より多くの遺物が得られ、西側では遺物量が急激に減っているという状況が見られており、尾戸窯跡関連遺物の廃棄のピークはこのA地点東部からB地点にかけてであろうと推定される。

3. 器種別出土点数と器種組成

今次調査で出土した陶器、土器の器種別出土点数と組成比はTab.35に示した通りである。

これによれば、陶器では碗、小杯、皿、鉢、高杯、猪口、蓋物、段重、蓋物、香炉、香合、火入れ、水指、鬢水入れ、捏鉢、鍋、壺、甕、瓶、灯明受け皿、餌猪口、鳥の水入れ、風鈴、筆筒、水滴、土師質土器では小皿、杯、白土器の小皿と杯、器種不明の底部片が出土しており、器種、形態ともに多様である。このうち、陶器碗は全体の72%と最も多く、続いて、白土器小皿が9%、陶器皿が8%となっている。

この中には、器高の高い碗、変形形の皿や鉢など上手の会席用食器、水指、茶入れ、香炉、香合などの茶の湯関連の器種が含まれており、開窯初期より茶陶生産を行なってきた尾戸窯の特徴を良く示している。しかしその他にも、大振りの粗製の碗、飯碗とみられる器高の低い碗、量産型の蛇の目釉剥ぎ小皿、鉢、等の日用食器、鍋、捏鉢等の調理具、瓶、甕等の貯蔵具、灯明受け皿等の火具、鬢水入れ等の化粧具、筆筒、水滴等の文房具、餌猪口、鳥の水入れ等の飼育具が含まれるなど、茶器以外の用途の器種も多く認められる。こうした内容からみて、今回の資料群には、当時販売品とされた尾戸窯の製品が多く含まれていると思われる。

中でも特に、高台無釉碗と高台無釉蛇の目釉剥ぎ小皿の占める割合は非常に高い。後者の高台無釉小皿は粗製の量産型皿で、尾戸雑器の主力製品であったとみられるものである。一方、前者の高台無釉碗には茶陶碗を祖形にする器高が高い上手の灰釉碗と、口径が大きいやや粗製の碗の二者がある。尾戸窯ではこうした主要製品の生産とともに、その他多様な器種、器形のものが生産されている。また、今回の出土資料中には薄手で精緻な作りの上手の品と、日用雑器が混在して出土しており、上手の製品と雑器生産の双方に関わった尾戸窯の特徴を良く示している。

4. 陶器

(1) 陶器の特質

先に触れたように、尾戸窯の陶器製品には京焼や京・信楽系陶器に釉調や文様意匠が共通するものがあり、消費地遺跡から出土した場合にはその識別が困難なものが多い。そこで、ここではまず、胎土、釉薬、文様意匠などにみえる、尾戸窯産陶器の特質を挙げておきたい。

Tab.35　陶器の器種別出土点数と組成比

器種	口縁部点数	底部のみ	推定個体数	%
碗	878	291	878	72%
小杯	5	2	5	0.4%
皿	94	17	94	8%
鉢	26	2	26	2%
高杯	1	0	1	0.1%
猪口	0	2	2	0.1%
蓋	30	0	30	2%
蓋物、段重	5	1	5	0.4%
香炉、香合、火入れ	6	0	6	0.4%
水指	1	0	1	0.1%
鬢水入れ	1	0	1	0.1%
捏鉢	5	5	5	0.4%
鍋	1	0	1	0.1%
壺、甕	9	6	9	0.7%
瓶	0	9	9	0.7%
灯明受皿	6	1	6	0.4%
餌猪口・鳥の水入れ	13	0	13	1%
風鈴	1	0	1	0.1%
筆筒	0	1	1	0.1%
水滴	1	0	1	0.1%
陶器不明	3	5	3	0.2%
白土器小皿	106	44	106	9%
白土器杯	1	3	1	0.1%
褐色系小皿	7	0	7	0.5%
褐色系杯	1	0	1	0.1%
土師質土器その他	1	2	1	0.1%
計			1214	99%

※推定個体数は口縁部点数をもとにし、それに、明らかに別個体と分かる底部点数を加えて算出した。

○胎土特徴

色調は灰白色のものが一般的であるが、還元焼成で灰白色から灰色に発色するもの、酸化焼成気味で黄味を帯びる灰白色や浅黄色のものがある。また、濃い灰色や黒褐色などの鉄分の多い胎土を用いた製品も認められる。胎土は緻密であるが、断面には微細な円孔や裂孔が見られる。灰色系の素地のものでは、しばしばこの円孔の周辺が橙色に発色し、器面に御本が入ることがある。

胎土中には0.05mm以下の円形粒の石英細粒砂と約0.05mm～0.1mm大の角粒石英細粒砂を多く含み、これに0.5mm～0.2mm大の角粒の長石粗粒砂が少量、黒色粒が微量混じるが、製品によって砂粒の量比が異なる。今回の出土資料では、以下の4タイプに分かれた。

胎土a:円形粒の石英細粒砂を多量、長石細粒砂を微量含むもの。

胎土b:円形粒の石英細粒砂を多量、角粒の石英細粒砂と長石粗粒砂を少量含むもの。

胎土c:角粒の石英細粒砂・長石粗粒砂を多量、長石の角礫を少量含むもの。

胎土d:角粒の石英細粒砂・長石粗粒砂、長石の角礫を多量に含むもの。

観察上での、こうした鉱物含有量の違いは、焼成温度の差異による影響も一定あろうが、水簸の程度差を示すものとみられ、製品ランクをある程度反映するものと考えられる。ただし、胎土aとbの差については、焼成不良のものや酸化焼成のものに胎土bが多く、還元焼成で良好に焼き締まったものに胎土aが多いなどの傾向があり、焼成時の条件によって左右された可能性が高いことから、両者間の製品ランク等の違いは読み取り難い。

また尾戸窯では、高知城下の南西方向に位置する能茶山より粘土を採取したとされるが、この能

茶山には地点によって、鉄分の少ない灰白色の粘土層と、鉄分を多く含む灰色から黒褐色の粘土層の両者が存在するということである。[註4] そのため、尾戸窯製品においても、その意匠や製品ランクに応じて、異なる色調の能茶山粘土が使い分けられている。

○釉調

釉薬は灰釉を施釉したものが最も多く、少数ではあるが他に鉄釉、褐釉が見られた。

灰釉は碗、皿、他殆どの器種に広く施釉されている。灰釉には、灰白色を帯びる半透明の釉で0.5mm以下の細かい貫入が入るもの（灰釉a）、半透明または透明で0.5～1mm前後の細かい貫入が入るもの（灰釉b）、ガラス質で光沢が強く1～2mm前後の粗い貫入が入るもの（灰釉c）の各タイプがある。中でも、尾戸焼では灰釉aの様に塵状の非常に細かい貫入が入り光沢の柔らかなものがあり、特徴的である。灰釉a・bについては特に製品ランク上の顕著な差は認めにくいが、灰釉cについては胎土、器面調整とも粗い雑器ランクの製品に多くみられるという傾向がある。

この他、鉄釉は碗（111～114・126～129・203・276・277・）、皿（427）、鉢（452）、捏鉢（455）、鍋（460）、蓋物（465）、火入れ又は香炉（487・488）、瓶（510・512・514・515・516）、茶入れ（517）、壺（520・524）、甕（522・526・527）、器種不明（490）等に、褐釉は碗（219）、捏鉢（453）等に施釉される。このうち、碗では、鉄釉の上に口縁部から灰釉を掛け分けるタイプのものがある。

(2) 碗の分類と特徴

ここでは、最も多くの資料が得られた碗について見ておきたい。まず今回の資料では、碗には丸形、腰張形、半筒形、平形碗風、広東形風、杉形、端反形、甕形等の器形が見られたが、各器形の碗には共通した高台形態をもつものが多いため、碗の高台のタイプについて分類とその特徴を述べ、その後、碗の形態、文様意匠等の特徴について触れることとする。

①高台形態

今次出土の碗には、各タイプの高台が認められた。

高台a: 高台がやや低く、断面が逆台形で、高台内を曲線的に削り出すもの。

高台b: 高台がやや低く、断面が長方形または細いもので、高台内を曲線的に削り出すもの。

高台が外方に張り出し気味になるものも含まれる。

高台c: 高い高台で、断面が逆台形、高台内を曲線的に削り出すもの。

高台d: 高い高台で、断面が長方形または細いもので、高台内を曲線的に削り出すもの。

高台が外方に張り出し気味になるものも含まれる。

高台e: 高台が低く、断面が逆台形で、高台内を曲線的に削り出すもの。

このうち、高台aは殆どのものに高台内に渦状の鉋痕が認められるが、一部に高台内が平坦なもの（高台a'）もある。畳付は幅広く、畳付内側は鋭角的に尖らせるが、畳付外側はナデにより僅かに丸みをもたせている。

②形態分類

今次調査では次のタイプのものが確認できた。

碗A: 器高が高い丸形碗。高台形態の違いから、A-a・A-bに細分できる。

碗A-a:器高が高い丸形碗で、断面逆台形の低い高台（高台a）を有するもの。
（106～114・116～125）

碗A-b:器高が高い筒丸形碗で、断面が細い高台（高台b）を有するもの。高台径は小さく、高台は外方に張り出し気味となる。（115）

碗B:器高がやや高い丸形碗。高台形態の違いから、B-a・B-b・B-c・B-dに細分できる。

碗B-a:器高がやや高い丸形碗で低い断面逆台形の高台（高台a）を有するもの。
（126～184・203～205・208）

碗B-b:器高がやや高い丸形碗で、断面が細い長方形の高台（高台b）を有するもの。
B-aに比較して高台径が小さい。（206・207・209・210）

碗B-c:器高がやや高い丸形碗で、断面逆台形の高い高台（高台c）を有するもの。（185～190）

碗B-d:器高がやや高い丸形碗で、断面長方形の高い高台（高台d）を有するもの。
高台は外方に張り出し気味となる。（191）

碗C:器高がやや高く体部が半球形を呈するもので、断面逆台形の低い高台（高台a）を有するもの。
（192～202）この中には高台径が小さいもの（192・193・195）が含まれる。

碗D:器高の低い丸碗で、断面逆台形の低い高台（高台a又はe）をもつもの。（211～218）

碗E:器高に対して口径の大きい大振りの丸碗で、体部が外上方に伸びるもの。
断面逆台形の高台（高台a′）をもつ。（219～221）

碗F:器高に対して口径の大きい腰張形の碗で、断面逆台形の低い高台（高台a）をもつ。
（222～238）

碗G:張りの弱い底部から体部が外上方に伸びるもので、外方に張り出す高い高台をもつ。
（239・240）

碗H:器高の高い半筒形の碗。（241）

碗Ⅰ:器高が低く、張りの少ない底部から体部が外上方へ直線気味に伸びる平形碗風のもの。
平形碗に近いプロポーションを取るが、底部付近がやや丸みをもち違和感をもつ。
断面逆台形の低い高台（高台a）をもつ。（242～244・246）

碗J:器高が低く、大きい底部から体部が外上方へ直線気味に伸びる広東形碗風のもの。
広東形碗に近いプロポーションを取るが、高台が低く違和感をもつ。（245）

碗K:器高の低い杉形碗で、底部を鋭角的に屈曲させるもの。
断面逆台形の低い高台（高台a）をもつ。（247）

碗L:端反形碗。（248～252）

碗M:甕形碗。（253）

なお、昭和30年代に調査が行なわれた東側地点での出土資料では、以上の他にロクロ形、広東形、などの形態が確認されている。

③文様意匠

無文の灰釉碗が最も多いが、この他に白化粧土象嵌、呉須による象嵌、鉄絵、呉須絵、鉄絵と白化粧土の描き分け、鉄絵と呉須絵の描き分け、陰刻文、沈線や凹線を巡らすもの、鉄釉と灰釉の掛け

分け等がみられる。

白化粧土象嵌は、暦手文（258・263・264・265・）、檜垣文（259・260）、丸文（261）、丸にクルス文（239）、山形文（106）、菊花と格子状の文様の組み合わせ（254・255）、如意頭文（257）、などであり御本手の意匠に共通するものも認められる。呉須による象嵌は桐文を印刻するもの（321）がある。

鉄絵は、稲束、宝珠、丁字、小槌などを組み合わせた宝文（115・150～153・199・218・225・226・229・250・292・297～301・303）、松文（283）、若松文（282）、松葉文（212・213・284・308）、竹文（157・185・285～287）、笹文（146～149・189・197・227・228・307）、蕨文（144・194・224）、菖蒲（245）、葦（290・311）、紅葉（289）、花文（187・291）、草文（198）、注連縄文（142・195・304～306）、風水文（158・294・295）、丸文（296）、文字や和歌（145・196・302）などがみえる。

呉須絵には、宝珠、笠文などを組み合わせた宝文（319・320・335）、葵文（317）、竹文（241）、植物（322）、花唐草文（343・344）、風水文（316）がある。この他、鉄錆と呉須の組み合わせによる、若松（312）、草花（315）、植物（314）、注連縄文（313）がみられる。

鉄絵と白化粧土の描き分けは梅文（192・211・222・223・246・273・274・275）、藤文（186・269）、草花文（268・270・272・159）などがあり、花の花弁の部分は白化粧土を盛り上げるようにして描くものである。

陰刻や凹線、沈線を巡らすものには、ロクロ成形による凹線を巡らすもの（130・184・218・281）、丸彫による凹線を巡らすもの（108・280）、沈線を巡らすもの（215・216・253）、丸彫による陰刻文様を施すもの（219・278）がある。この他、鉄釉と灰釉の掛け分け（111～114・126～129・276・277）なども認められる。

鉄絵と呉須絵には、細線で精緻に描くものと、太い大らかな筆使いによるものがあり、器壁の厚さや調整痕などからみても製品ランクの差が看取できる。しかし、流達な筆使いによる絵画的な表現のものが多くあり、尾戸焼の特徴を良く示している。

5. 土師質土器

土師質土器では杯、小皿、器種不明の底部などが確認できた。これらのうち、小皿には白色～灰白色の胎土をもつ陽刻文小皿（547～578）、及び同様の色調と形態をもつ白色系の無文小皿（579～581）、胎土が褐色で同様の形態をもつ無文小皿（583～586）、白色系の胎土と類似した形態をもつが底部回転糸切りの小皿（587・588）などがみえる。ここでは、確認数が最も多かった白色系の陽刻文小皿について、若干の検討を加えておく。

この白色系の陽刻文小皿は、近世には尾戸窯の名産品として広く流通したもので、記録には尾戸の「白かわらけ」「白土器」あるいは「三ツ組土器」として表れている。この「白土器」の名称は森田家文書の『戸陶値段表』宝永7年（1710）の項（第1節-資料6）に「白土器模様有」「無地」との記述がすでに認められる。同史料によれば、この「白土器」は狩野探幽の筆による松竹梅鶴亀文と高砂文、京都の佐々木志頭磨の筆による寿字を元に陽刻したものとあり、森田家にて代々下絵を写した型が製作されたものである。また、「三ツ組土器」という名称を認めることから、本来は3枚がセットであり、白い胎土と優れた文様が珍重され、儀礼の場で使用されたものとみられる。

○文様

寿字を写し取った白土器の型（842）は今回の尾戸窯跡調査でも出土している。先の史料から読み取れる様に、白土器小皿の寿字文、高砂文、鶴亀文の絵型は、伝世された原図をもとに代々写し取られたものであり、そのため、窯跡や消費地遺跡から出土する白土器の文様には、僅かな違いが生じ、数パターンのタイプが認められている。第3節にて後述する消費地遺跡出土の白土器小皿には窯跡出土資料に無いタイプの文様が認められるため、これらの資料も含め、近世遺跡出土資料にみえる白土器の文様タイプを以下に挙げておく。

寿字文

寿字文a-1:（尾戸窯跡547～555）

寿字文a-2:（尾戸窯跡556・557）

寿字文a-3:（高知城跡土塁跡932）

寿字文a-1とa-2、a-3は字体の殆どが一致しているが、一部に僅かな違いが認められる。

高砂文

高砂文a-1:（尾戸窯跡559・560・566）

高砂文a-2:（尾戸窯跡561・565・569、東京大学構内遺跡924）

高砂文a-3:（小籠遺跡981、高知城跡土塁跡936）

高砂文b:（尾戸窯跡568、高知城跡旧営林局地点951）

高砂文a-1、a-2、a-3は、翁が右、媼が左で絵柄の殆どが一致しているが、松の枝ぶりに僅かな違いが認められる。高砂文bは翁が左側になり、高砂文aとは文様が裏返しになっている。

松竹梅鶴亀文

鶴亀文a-1:（尾戸窯跡571、京都大学構内遺跡922）

鶴亀文a-2:（尾戸窯跡572）

鶴亀文a-3:（尾戸窯跡575）

鶴亀文b:（尾戸窯跡577・578、高知城跡土塁跡937）

鶴亀文c:（尾戸窯跡573・574）

鶴亀文a-1・a-2・a-3はほぼ共通する絵柄であるが若松の枝ぶりと亀に僅かな違いが認められる。また、鶴亀文bでは亀が左下になり、鶴亀文a-1・a-2・a-3とは文様が裏返しになっている。また鶴亀文cは絵柄が全く異なっている。

○製作技法と調整痕

製作技法に関しては、器面の最終調整に2つのタイプがあり、技法A:体部内外面に回転方向の静止ナデ、外底に直線方向や不定方向の静止ナデを施すもの（547～562・564～578）、技法B:体部内面に回転ナデ、体部外面と外底に回転ケズリを施すもの（563）に分かれる。このうち技法Aの内外面と外底への静止ナデでは、半乾きの状態で繊維状の原体によって撫でたとみられる細かい擦痕が認められ、特徴的である。このナデ痕については、ロクロ成形後、半乾きの状態で内底への印刻を行い、その後器面全体への仕上げのナデ調整が施された際のものと考えられる。

この2タイプの技法をもつ白土器小皿について遺跡からの出土状況をみると、下限を能茶山窯移

転の1822年とする窯跡出土資料では、回転ケズリタイプのものは1点（563）のみで、大多数が静止ナデタイプで占められ、また、第3節で後述する消費地遺跡出土資料でも、19世紀前葉頃までは、両タイプは存在するもののやはり静止ナデタイプが多数を占めるという傾向がみられた。一方、幕末期近くの資料である小籠遺跡出土資料（981）では、窯跡資料に無い高砂文a-3が描かれ回転ケズリを伴う薄手のタイプが見えている。こうした様子から、今後、文様タイプや形態、調整痕などの変化をもとに、白土器の編年が可能になるのではないかと考えられるが、現状ではまだ年代観の確かな資料が不足しているため、ここでは土器の年代的変化への言及は控え、今後の資料集積を待ちたい。

6. 窯道具と焼成技法

窯道具は、窯詰め道具（匣鉢）、製品の重ね焼き用の道具（ハマ、円錐ピン）、焼成台（トチン、チャツ、その他の焼き台）等が出土している。出土点数は破片数にして匣鉢796点、ハマ127点、トチン228点、チャツ1点、焼台8点、である。最後に、これらの窯道具の特徴と使用痕跡、対応する製品の目痕、溶着痕などをもとに、尾戸窯での焼成技法上の特徴について振り返っておきたい。

(1) 窯道具について

○匣鉢

窯詰めの道具としては匣鉢が認められた。匣鉢にはA類:円筒形のもの（595～657）、B類:小判形または不整形のもの（659～663）、C類:箱形のもの（664・665）の各タイプがある。このうち円筒形タイプのA類がロクロ成形、箱形のC類がタタラ成形によるもので、小判形・不整形タイプのB類には、体部をロクロ成形した後に変形させ、楕円形もしくは変形の底部に貼り合わせて製作するものと、タタラ成形のものがある。土は何れも砂礫を多く含む灰白色の粘土を使用している。各タイプの破片数は、A類776点、B類18点、C類2点と、A類の出土比率が最も多い。

○ハマ、円錐ピン

製品の重ね焼き用の道具としては、陶器製の円錐ピンを組み合わせた円盤状のハマが使用されている。ハマはA類:円盤形で片側面の周縁に面取りを施すもの（749～786）、B類:円盤形のもの（787～799・801・807）、C類:円盤の中央に円孔を穿つもの（800）、の各タイプがある。このうちA類はロクロ成形で、陶器製品と同質の良好に水簸された灰白色の粘土を使用したものである。

各タイプの破片数は、A類106点、B類21点、C類1点と、A類の出土比率が最も多い。

出土したハマは数回の使用が行なわれたとみられ、数回分の円錐ピンの剥離痕跡、上面への複数の製品高台痕が認められる。

この足付ハマと円錐ピンに伴う目痕は、碗、皿、鉢に多くみられており、碗は殆どのものが内底に目痕を伴う。重ね焼きの溶着資料である碗（136）ではハマと円錐ピンを組み合わせたものが溶着しているが、他の碗（140）ではハマを挟まずに、碗の畳付に円錐ピンが直接取り付けられている様子がみられる。皿には、見込み蛇の目釉剥ぎで重ね焼きされる量産タイプのもの（364～382・387～391・403）が多くあるが、内底に目痕を伴うハマ使用による重ね焼きのもの（397・409・411・413・420）も認められる。鉢も内底に円錐ピンによる目痕を伴うものがみえる。しかし、重ね焼き

による溶着資料の鉢（443）では、ハマを挟まずに、畳付に円錐ピンが直接取り付けられている事例がみられる。

○トチン、チャツ、焼き台

焼成台では、トチンが最も多く、中空で脚部が外方へ開くタイプの焼き台（814～818）も少数出土している。焼き台（814～818）はロクロ成形で砂礫を多く含む灰白色の粘土を使用している。

これらの焼き台は、焼成時には製品との間に団子トチを挟んで使用しており、上面には団子トチが溶着した資料（668・671～674・680・681・683～687・702～704・706・709・710～712・714・732～734・814～816）が多く認められている。チャツ（819）は1点のみの出土で、チャツ使用を行なう製品は、尾戸窯ではごく少数ではなかったかと推察される。

さて、前述の円錐ピンに伴う目痕の他に、今回の資料では、外底施釉の鉄釉甕（527）の外底の四方に灰白色の粗砂による円形の砂目が認められている。尾戸窯跡出土資料以外で甕の底部外面に砂目を伴う資料は、平成15年度に行なわれた森田家墓所の緊急調査で、幼児を埋葬する甕棺に尾戸焼の甕が使用された出土事例があり[註5]、この甕の底部外面にも同様の砂目が認められている。壺、甕類など大型製品の窯詰めに関わる道具については詳細が明らかでないため、今後の課題としたい。

(2) 窯印について

なお、今回の出土窯道具には、印刻、ヘラ記号をもつ資料が多数認められた。印刻とヘラ記号の出現比率は、匣鉢の破片数796点のうち印刻をもつものが3%ヘラ記号が0.7%で、トチンでは印刻15%ヘラ記号10%、ハマでは印刻21%ヘラ記号0.7%という値であるが、匣鉢の破片がおよそ1/3程度、トチンが1/2程度に割れているものが多く、ハマは完形のものが多かったため、実際の刻印の出現比率は道具全体の10～20%前後になるのではないだろうか。

窯印の種類は、匣鉢では、半截竹管を上下や左右に組み合わせた刺突文（608・625・628・629・631・641・651・655）、印刻による達磨状の文様（605・652）、丸にクルス文（599）、丸文2個を組み合わせた印刻（612・656）、丸文2個の組み合わせによる輪違文（607・654・658）、丸文3個の組み合わせ（622）、三重丸（601・657）、雷文（602・646）、三重の菱文（603・623・624）、方形角内に斜線のヘラ記号（598）、3本の並行線（644）、「子」字状のヘラ記号（648・653）、「了」字状のヘラ記号（647）を認める。

また、トチンでは、半截竹管を上下や左右に組み合わせた刺突文（669・674・676～679・711～719）、半截竹管に棒状の刺突を組み合わせた「山」字状の刺突文（710）、円形の刺突2個の組み合わせ（670・682・728～731）、円形の刺突3個の組み合わせ（727）、円形刺突4個の組み合わせ（681・687・688・721～725）、「×」字状のヘラ記号（680・683・691・696・705・732～746）、「十」字状のヘラ記号（694・695）、「×」字状のヘラ記号とヘラ描きによる文字「たつ四月十九日□□右エ門」（高六右エ門か）（684）、「×」字状のヘラ記号とヘラ描きによる文字「七ノ」（748）を認めている。

またハマでは、印刻による菊花文（759～761・764・769・782・801・762・763・765～768・770～772）、菊花と輪違い文（772）、山形文（775～777）、如意頭文（778・780）、「亜」状の文様（773・774）、雷文（779）、印刻または釘彫りによる丸文（783）、釘彫りによる丸文（784）、並行線2本のヘラ記号（785）を認めている。

ところで、尾戸窯跡出土窯道具の刻印については、丸山和雄氏がすでにその著作の中で、森田家の家紋には「四ツ目結」「輪違」「三連銭」「三ツ巴」があり、出土窯道具の中に森田家家紋が含まれていることを指摘しておられる。(註6) 氏の論考を参考とすれば、今次出土資料では、匣鉢にみる丸文2個の組み合わせによる輪違文(607・654・658)、トチンにみる円形刺突4個の組み合わせ(681・687・688・721～725)、ハマにみる輪違い文(772)が該当するとみられ、これらが森田家に関わる窯道具であった可能性が高まる。

この他注目すべき点として、菊花文、山形文、如意頭文、雷文の刻印は、象嵌文の碗、皿、碗蓋などの製品(106・257・350・488・509)に共通する印であり、これら象嵌文の印が特に良質な土を使用して製作したハマA類に多用されている。また、匣(599)の丸にクルス文の刻印も、同一ではないが象嵌文碗(239)に類似するものである。ハマA類では菊花文と森田家家紋である輪違文が同一個体に押されている資料(772)があり、こうしたことから、菊花文その他の象嵌文印も森田家に関連するものであった可能性が考えられよう。

最後に、今回の資料では匣鉢の出土が多くみられた。破片数によるカウントのため、個体の大きい匣鉢は他器種より多くなっているとみられるが、それを考慮しても匣鉢の出土比率は高く、尾戸窯では匣鉢を多用した窯詰め法が行なわれていたことが分かる。匣鉢使用を主体とする陶器の窯詰めは、瀬戸、大坂、京都などの陶器窯で一般に認められる焼成技法であり、大坂の陶工を招いて技術導入を果たした尾戸窯の技術系譜が、これらの地域に深い繋がりをもつことが窯道具からも看取できよう。

〔註〕

1)『山内家史料忠義公紀』「収録方文書」承応2年

2) 丸山和雄『土佐の陶磁』1973年。

3) 当地点へのビル建設工事が決定された際、山本貞彦、竹村脩氏ら当時の研究者によって建設予定地内での調査が行なわれ、その際多数の遺物が出土した。竹村氏の談によれば、当時は建設予定地内にて表土下約1mの地点まで重機にて掘削し調査を行なったということである。出土品の一部は現在、高知県埋蔵文化財センターと出光美術館に保管されている。

4) 能茶山の粘土鉱床は、山の最上部が淡褐色粘土層、その下に灰色粘土層、最下部に暗灰色粘土層がある。「高知県の粘土資源について」『高知県工業試験場研究報告第2号』高知県工業試験場1968年

5)『森田久右衛門墓所及び小高坂山森田家墓所』高知市教育委員会2004年

6) 丸山和雄『土佐の陶磁』1973年。

第3節　消費地遺跡出土の尾戸焼とその製品流通

1. はじめに

近世の尾戸窯では、承応2年（1653）の開窯以来、贈答品や藩用品の製作が行なわれ、茶陶を中心に多様な製品が生み出されたことが記録にみえている。また『森田家文書』の「古陶値段表」には、18世紀以降販売された尾戸焼の内容が記録されており、贈答品や藩用品以外にも、販売品製作を手掛けた尾戸窯の一面を見ることができる。

こうした尾戸焼の製作内容については、小野賢一郎、丸山和雄氏らによりこれまで文献や伝世資料の面から研究が進められてきたが、近年では、近世遺跡の発掘調査が進むにしたがって遺跡出土の資料数も増え、その内容が序々に明らかになってきている。また、小例ではあるが県外の遺跡からの出土も確認され始めている。

そこで本節では、現在までに確認できた消費地遺跡出土の尾戸焼を取り上げ、城下、農村の遺跡に出土する尾戸焼の様相を見ていくこととする。また、年代観の明らかな遺構出土資料をもとに、その流通範囲と製品内容の年代的変遷についても検討することとしたい。

2. 消費地遺跡出土の尾戸焼

県外の遺跡で尾戸焼の出土が確認された事例は、山内家上屋敷が所在した丸の内三丁目遺跡（東京都千代田区丸ノ内三丁目）、加賀藩の上屋敷が所在した東京大学構内遺跡（東京都文京区）、近世集落跡にあたる京都大学構内遺跡（京都市左京区）がある。県下では、高知城跡、藩関連の屋敷跡である高知城伝下屋敷跡（高知市丸の内1丁目）、土佐藩家老の屋敷跡である五藤家屋敷跡（安芸市土居）、城下町の上級武士屋敷跡である金子橋遺跡（高知市升形）、城下町関連の土佐中村一条氏関連遺跡（四万十市中村小姓町）、農村部の下級武士屋敷跡である陣山遺跡（南国市陣山）、農村の集落跡である小籠遺跡（南国市岡豊町小籠）と田村遺跡（南国市田村）、尾戸窯陶工森田家の墓所にあたる森田久右衛門墓所（高知市三ノ丸）等で出土が確認されている。以下、その主要なものを紹介し、所有者の性格毎にその内容を見ていくこととしたい。(註1)

なお、尾戸焼の同定にあたっては、高台形態、調整痕、胎土、釉調、文様意匠などについて窯跡出土資料との照合を行い、共通した特徴を見出せるものを取り上げた。また、窯跡出土資料に見出されない形態のものを多く含んでいた丸の内三丁目遺跡出土資料については胎土分析を行ない、生産地推定の手掛かりとした。また、消費地遺跡からは京焼との判別がつかないものも出土しているため、そうしたものについては現在のところ京都系として報告している。

(1) 丸の内三丁目遺跡（Fig.69～71）

丸の内三丁目遺跡が所在した近世の鍛冶橋門内には外様大名の他、旗本や譜代大名、代官頭や勘定頭、寺社奉行らの屋敷地が並び、土佐国高知城主である山内対馬守一豊家の上屋敷も近世を通じてここに所在していた。これらの屋敷地は明暦3年（1657）と元禄11年の大火によって殆どが類焼に及ぶが、特に元禄11年の大火後には、鍛冶橋門内の屋敷地は全て上地され、以降は幕末まで松平土佐守と松平阿波守の上屋敷となっている。報告によれば、ア～カに分けられた調査区のうち、イ・

ウ地区が17世紀初頭から幕末まで、エ地区が元禄2年（1689）から元禄11年まで、カ地区が寛文11年（1671）から元禄11年まで山内対馬守の屋敷となっている。また、元禄11年の大火以降幕末まではア・イ・ウ・エ北・オ北・カ北地区が山内対馬守の屋敷となる。

このうち尾戸焼の出土が確認できたのは、カ地区（現地番号TAVII区6号瓦溜、3号木樋、2号土坑、3号土坑、4号土坑、包含層）、イ地区（〃TAI区包含層）、ウ・エ・オ地区（〃TAII区包含層）である。カ地区瓦溜（現地番号TAVII区6号瓦溜）出土資料（843～862・864～874・876～880・882～889・891～897・899～901・903～907・910・912～915）はその殆どが被熱しており、明暦3年あるいは元禄11年の大火に伴う火災廃棄の可能性が考えられるが、同調査区内で同様の火災資料を含む遺構の遺物内容からみると17世紀後半から18世紀初頭頃までにおさまり、元禄11年大火に伴う瓦と遺物の一括廃棄であった可能性が高い。

図示したものはカ地区出土の碗（843～889）、皿（890～902）、鉢（903～908）、水指又は蓋物（910）、香炉又は火鉢（911）、器種不明（912～915）、イ地区出土の白土器小皿（918）、ウ・エ・オ地区包含層出土の白土器小皿（916・917・919～921）である。陶器は何れも灰色の緻密な胎土をもつもので、透明または半透明の灰釉を施釉する。ただし釉については被熱し変質したものが多くあり観察不能なものが多い。被熱の痕跡を留めるものは、843～856・858～865・867～869・873・879・880・882・883・887～892・894～897・900・901・903～908・910・911・914である。

碗には外面に白化粧土象嵌で鶴雲文を描くもの（856）、暦手を描くもの（843～846・848～852・864）、丸文（853～855・868・869）や如意頭文（845・846・863・865・867）、花文（847・848・850・851・865・866・867）、雷文（870・871）、山形文（858・859）を印刻するもの、文様不明であるが象嵌による圏線が認められるもの（860～862）がある。このうち845・846の如意頭文と858・859の山形文の文、854・855・868の丸文に使用された刻印は尾戸窯跡出土資料（106・257・261）と同一のものである。碗（873）は外面にヘラで縦筋を配し、その間に鉄絵を描く。碗（874）も鉄絵を描くものである。碗（872）は外面に筋状の面取りを施す。皿（891）は角形になるとみられるもので、端部に宝珠状の透かしが入る。892・897は菊花形の皿でともに底部無釉。皿（896）は花弁を形取り口縁部に鉄錆を施す。変形形の鉢（903・904）は呉須による雷文帯が描かれる。変形形の鉢（906・907）は内面に呉須による菊花文を描き、口縁部は口錆となる。変形形の鉢（908）は内外面に呉須で芭蕉を描く。

(2) 東京大学構内遺跡工学部14号館地点（Fig.71）

遺跡は東京大学本郷構内に所在し、江戸時代初期から以後近世を通じて加賀藩の上屋敷に属している。工学部14号館の調査地点では18世紀末～19世紀前葉の遺物を含む土坑SK330から尾戸窯産の白土器小皿（923）が、19世紀前半の土坑SK293から白土器小皿（924）が出土している。

923と924はともに内面に陽刻による高砂文をもつものである。924は外側面と外底に尾戸窯跡出土資料と同様の静止ナデ痕が残り、外底中央には「玉子焼」の墨書が認められる。924は尾戸窯跡出土の白土器小皿（561）と文様が一致する。923については資料を実見できていないため調整は不明であるが、ほぼ同様の文様である。

(3) 京都大学構内遺跡病院構内AF20区 (Fig.71)

京都大学構内遺跡は中世まで貴族の屋敷や寺社地が展開したが、近世以降は集落と耕作地へと変遷する。調査区付近は近世の聖護院村の北はずれにあたり、寺院や住宅が散在する景観を呈していたと推定されている。AF20区では18世紀に埋められた池や溝、流路が検出され、遺構内より18～19世紀代の多量の遺物が出土している。尾戸焼が出土したSG1は南北約16m、東西15mの規模をもつ不整円形の池で、埋土中からは肥前産磁器、京焼、焼き塩壺、かわらけ等、18世紀後半を主体とする遺物が多く出土している。

AF20区SG1より出土した白土器小皿 (922) は、胎土が灰白色を呈し、内面に陽刻による鶴亀文をもつ。尾戸窯跡出土の白土器小皿 (571・572・575) に文様がほぼ一致する。

(4) 高知城跡昭和55年度緊急調査 (Fig.72)

昭和55年度に行なわれた高知城北東端の土塁部分での緊急調査では、土塁埋土中より白色系の胎土をもつ尾戸窯産の土器小皿が多量に出土した。小皿は小破片のものが多いが、口縁部及び底部点数にして65点であり、このうちに陽刻による寿字文が18点、高砂文が13点、鶴亀文が7点、無文10点、文様不明5点が確認できる。また高台をもつ杯または皿の底部12点も確認されている。これらの土器皿は近世の遺物を含む層からの出土で、特に土塁北東端部分に集中していたということであるが、一括した出土状況ではない。また同層では肥前産磁器、焼き塩壺など17世紀から19世紀までの遺物が混在した状況で含まれており、出土層位や供伴遺物からみた土器皿の年代比定は難しいと考えられる。

図示したものは、寿字文白土器小皿 (925～928・932)、高砂文白土器小皿 (929・930・933～936)、鶴亀文白土器小皿 (931・937・938) である。このうち、925～931が外側面と外底に静止ナデを施すもの、932～938が外側面と外底に丁寧な回転ケズリを施すものである。

寿字文小皿 (925～928) は外面静止ナデのもので、尾戸窯跡出土の547～557と大きさや字体がほぼ一致している。寿字文小皿 (932) は外面回転ケズリのもので、尾戸窯跡出土資料とは字体の細部に違いがある。高砂文小皿 (929・930) は外面静止ナデのもので、尾戸窯跡出土の561と文様が一致している。高砂文小皿 (936) は外面回転ケズリのもので、尾戸窯跡出土資料559・561に文様の殆どが一致するが、松の枝ぶりに僅かな違いが見え、尾戸窯跡出土資料中には一致するものはない。鶴亀文小皿 (937) は外面回転ケズリのもので、尾戸窯跡出土の577・578と鶴の向きが同じタイプのものであるが、細部については不明である。

(5) 高知城伝下屋敷跡 (Fig.72)

高知城内堀の南西端外側に位置する高知城伝下屋敷跡は藩関連の屋敷跡と推定されており、屋敷に伴うとみられる堀跡と溝、石列、土坑、土坑状の遺構、井戸、埋桶、瓦溜など、17世紀初頭から19世紀までの遺構と遺物が検出された。このうち尾戸焼は土坑状遺構SX10・15・16、落込み1、包含層からの出土している。これらの遺構では18世紀後葉から19世紀前葉までを主体とする陶磁器、土器、木製品が供伴しており、遺物廃棄年代の下限を19世紀前葉と捉えることができる。

図示したものはSX10出土の碗 (939・940)、皿 (942)、白土器小皿 (941)、SX15出土の白土器小皿 (943)、SX16出土の白土器小皿 (944) である。高砂文白土器小皿 (941) は外面静止ナデ、高砂

文白土器小皿（944）は外面静止ナデ、鶴亀文白土器小皿（943）は調整不明である。灰釉皿（942）は内面蛇の目釉剥ぎで、内面に鉄絵を描く。

(6) 高知城跡旧営林局跡地点 (Fig.73)

平成17年度に調査が行なわれた高知城跡旧営林局跡地点は、寛文9年（1669）『高知城下図』によれば調査地点は上級武士の屋敷地にあたり、その後、享和元年（1801）の『高知御家中等麁図』絵図では西弘小路、幕末の『高知郭中図』では森林地と馬場へと転じている。調査では、城の内堀外側の部分から17世紀前葉の土坑2基、17世紀後葉から18世紀前葉頃の土坑2基、19世紀前葉の土坑8基が検出されており、このうち19世紀前葉の土坑内から尾戸焼が出土している。出土遺物の所有者の特定はできていないが、遺物内には上手の肥前産磁器や焼き塩壺が多く含まれるなど遺物組成が高知城伝下屋敷跡に類似しており、藩関連の屋敷や上級武家地からもたらされた廃棄遺物の可能性が考えられる。

図示したものは碗（945～949）、皿（952）、猪口（950）、白土器小皿（951）である。碗（945・946）は腰が張り、体部が口縁部に向かって外反気味に立ち上がるものである。碗（947）は器高の低い端反形の碗で、外面に梅文を描き、花弁を白化粧土、花芯を鉄錆で描き分ける。碗（948）は外面下位に丸彫りによる凹線を2条巡らせるもので、同様の意匠のものが尾戸窯跡出土資料（108・280）にみえる。碗（949）は轆轤形の碗で外面下位に強いロクロ目が残る。猪口（950）は外面に鉄錆で格子状の文様を描く。皿（952）は内面に鉄絵を描く。白土器小皿（951）は外面静止ナデで、高砂文の翁の向きが尾戸窯跡出土資料（559・561・562）等と反対になるタイプのものである。

(7) 土佐中村一条氏遺跡 (Fig.73)

平成8年に行なわれた小姓町地区での緊急確認調査では、近世の遺物包含層内より山内氏入国後の中村近世城下町に関連するとみられる近世陶磁器、土器、木製品が出土している。ここでは、試掘坑下層から初期伊万里や波佐見産青磁、唐津系灰釉陶器など17世紀前半の遺物が、上層から尾戸焼とみられる灰釉碗（953）と花生け（955）、京都系の土瓶又は蓋物（954）、肥前産京焼風陶器、波佐見産染付碗、景徳鎮窯系青花碗など17世紀後半から19世紀までの遺物が出土しており、その遺物内容からみて所有者の高い経済力が窺われる。

碗（953）は外面に鉄錆で雀と柳を描く。955は花生けで灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。954は土瓶または蓋物で外面上位に鉄錆で花文を描く。なお954については類例の装飾の製品が確認できていないため、京都系として位置づけておく。

(8) 陣山遺跡 (Fig.73)

陣山遺跡は農村部に約20石の所領を有する下級武士の屋敷跡である。ここは18世紀後半に譲り受け郷士となり当地点に屋敷を構えた細木氏の屋敷跡で、幕末の転居にともなう溝、池、土坑の廃絶と、遺構内への遺物の一括廃棄遺が確認されている。廃棄遺物は、18世紀後半から19世紀中葉までのもので構成され、この中には日用雑器在地能茶山窯の製品が陶磁器全体の約50%という高い比率で含まれている。尾戸焼は、蓋（957）、風炉（956）が遺物包含層から出土している。蓋（957）は緻密な灰色の胎土をもち、灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で細かな貫入が入る。風炉（956）も同様の胎土と釉調をもつもので、外面に呉須絵を描く。

(9) 小籠遺跡 (Fig.74・75)

小籠遺跡では溝によって区画された居住地と耕作地からなる近世農村が展開する。II区の調査では近世の居住地内から溝、建物跡、井戸、土坑、ピット等が検出され、遺構廃絶に伴って廃棄された多量の陶磁器、土器が出土した。遺物は18世紀から明治初頭までのものが主体を占めるが、尾戸焼を含め豊かな内容の遺物がみられており、高い経済力をもった農民層の所有遺物と考えられる。

図示したものは、尾戸焼の碗 (958・959・962～966・976～979)、碗蓋 (975)、皿 (974・980)、鉢 (971・972)、向付 (970)、猪口 (967)、香炉 (968)、瓶 (969)、壺 (961)、器種不明 (960・973) 白土器 (981～985) である。このうち、962～969・983・985が井戸SE11、958～961が溝SD78、970が溝SD69、971～974が廃棄土坑、981が土坑SK89 (981)、性格不明土坑SX10 (984)、975～980・982が包含層からの出土である。各遺構はSD78が18世紀後半、SE11が19世紀前葉、SK89とSX10が19世紀、廃棄土坑が明治初頭までの遺物を供伴している。SD69と包含層出土遺物については明確な時期は不明であるが、居住区の展開時期から18世紀から明治初頭と捉えられる。

器種不明 (960) はたたら成形で、鉄錆で梅文を描く。壺 (961) は鉄錆と白化粧土で花唐草文を描くもので、花弁を白化粧土で描き分ける。碗 (962) は外面に鉄錆で和歌文を描くもの。端反形碗 (963) は呉須で繊細な竹文を描くものである。器高の低い丸碗 (965) は鉄錆で竹文を描く。香炉 (968) は白濁した釉調をもつ。向付 (970) は鮑を形取ったもので、細かな貫入が入った灰白色の灰釉が施される上手の製品である。皿 (974) は外面下位に荒い鉋痕を残す粗製の皿である。内面に鉄錆で略化した稲束と宝文を描くもので、尾戸窯痕出土の宝文碗 (225) 等に文様が共通する。高台施釉で器高の低い丸碗 (976) は、碗蓋 (975) とセットになる蓋付碗で、丁寧な作りの上手の製品である。たたら成形の角皿 (980) は内面に鉄錆で山水文を描くもので、尾戸窯跡出土の角皿 (428) と形態、文様とも共通する。白土器小皿 (981) は外面に回転ケズリを施すもので、薄手の作りである。尾戸窯跡出土資料とは文様の細部が異なり一致するものがなく、高知城跡昭和55年度調査出土資料 (936) に文様が一致する。高砂文白土器小皿 (982・983)、寿字文白土器小皿 (984・985) は外面に静止ナデを施すものである。

(10) 田村遺跡 (Fig.75)

近世の田村遺跡においても、溝によって区画された耕作地間に居住地と墓地が点在する近世農村の景観が展開する。B1区の調査では、耕作地内に掘られた大型の廃棄土坑内から、幕末から明治初頭の廃棄遺物が多量に出土しており、この中に尾戸焼とみられる碗 (986・989～991)、皿 (992)、急須または土瓶 (987)、土瓶蓋 (988) が含まれている。急須または土瓶 (987) は薄手の作りで、外面に鉄錆で草花と蝶を描く。後手形の把手をもち、底部には三足が貼付される。蓋 (988) は987と同一個体になるものである。器高の高い碗 (989・990)、広東形碗 (991)、皿 (992) は粗製の作りで胎土、器面調整とも荒い。

(11) 森田久右衛門墓所及び小高坂山森田家墓所 (Fig.76)

尾戸窯の陶工を代々勤めた森田家の墓所である。ここでは、幼児を埋葬した甕棺に尾戸焼の甕が使用されている。この甕棺を埋納した墓坑SK9は、1803年墓標を伴う墓坑を切っており、19世紀以降に時期比定される。

甕（993）は底部に著しい焼け歪みをもつもので、窯場での焼成失敗品を棺に転用したものとみられる。甕は内外面に暗赤褐色の鉄釉を施釉し、内面下半無釉、外底施釉である。外面の肩部には黒色の鉄釉を流し掛けし、胴部外面には多段の沈線と1条の櫛描き波状文を巡らす。肩部の双方にはリング状の双耳を貼付し強いユビオサエを施す口縁部の9箇所には円形の砂目、外底の3箇所には径5cm前後の円形の砂目が残る。また甕の内底には、甕内部での重ね焼きによって生じた径8.2cmの陶器高台溶着痕が残り、胴部内面片側にも灰白色の薄手の灰釉陶器片が溶着している。

3. 尾戸焼の年代的変遷

ここまで県外及び県下の消費地遺跡での尾戸窯製品の出土状況をみてきた。器種は碗、皿、鉢、風炉、香炉または火鉢、蓋物、花生、土瓶、白土器小皿を認め、供膳具、中でも碗の確認数が多い。これは、高台形態に特徴を認め易く窯跡出土資料も多い碗は産地同定が行いやすく、その他の器種については基準資料に乏しく他窯製品との識別がし難いという理由もあろうが、陶磁器全体に占める碗の比率が高かった窯跡出土資料の組成内容ともほぼ共通している。そこで以下では、多くの資料が得られた碗を取り上げ、各年代の資料をもとに、その形態や文様意匠の変遷について検討しておきたい。

まず18世紀初頭以前の良好な一括廃棄遺物である丸の内三丁目遺跡カ地区瓦溜出土資料では、碗は胎土と釉調、高台内を曲線的に削り出す高台形態や高台内への渦状の鉋跡などに尾戸窯跡出土資料との共通性を見出せるが、高台径が幾分小さいもの（882・883・885～887・889）や、畳付外側に深い面取りを施すもの（889）があるなどの違いが見出せる。また、器壁は全体に薄く丁寧な作りであり、藩の上屋敷という遺跡の性格からみて上手の尾戸焼が取り揃えられていた可能性が高い。文様意匠としては、無文の灰釉碗に加えて、白化粧土象嵌による暦手、雲鶴文、丸文など御本手の意匠を取り入れたものが多く見られる。

続く18世紀前半の様相であるが、残念ながらこの時期の明確な遺構出土資料は確認できておらず、状況が掴めていない。

18世紀後半から19世紀では出土資料数が増加する。この頃まで、器高の高い無文の丸碗は引き続き出土するが、高台径は幾分大きくなり、窯跡出土資料に共通したタイプのものとなる。また、器高の低い丸碗は小籠遺跡出土の965・976などがみえる。新たな器形としては、広東形のものが、19世紀の田村遺跡B1区SX113出土資料（991）にみえる。器高の低い端反形碗は、高知城跡旧営林局跡地点SK7出土の947などがあり、19世紀前葉に比定される。ただし、器高の高い碗で口縁部が端反形になるものは18世紀初頭以前の丸の内三丁目遺跡カ地区瓦溜出土資料（878）、からすでに認められている。文様意匠では、窯跡出土資料に共通したものが多く見え、鉄絵（947）、鉄絵と白化粧土の描き分けによる梅文（947）、草花文、鉄錆による和歌文（962）、呉須による竹文（963）などが見える。

さて、これらの消費地資料の年代観を今回の窯跡出土資料と比較すると、106・107・191・239・254～266などの白化粧土象嵌の碗が丸の内三丁目遺跡カ地区瓦溜出土資料（843～871）に多く見られており、18世紀後半以降の遺跡では確認できていないことなどから、尾戸窯におけるこれら白

化粧土象嵌碗の生産が17世紀後半から18世紀前葉前後をピークとしていた可能性が考えられる。18世紀後半以降の消費地出土資料に共通する形態のものでは、広東系碗風の碗（245）、器高の低い碗（242～244）などがみられる。また、碗以外の器種については、窯跡出土の角皿（428）が小籠遺跡出土の皿（980）と同タイプで、18世紀後半から19世紀の年代観をあてはめることが可能であろう。

4. 尾戸焼の流通

最後に、尾戸窯製品の流通範囲とその製品内容の時期的変化についても若干触れておきたい。

まず、18世紀前半以前でその流通が確認できるのは、山内家江戸上屋敷にあたる丸の内三丁目遺跡である。ここからは、器高の高い碗、水指や花生、変形物の皿や鉢などの懐石用の食器など、茶の湯関連の製品が多く出土する。製品は何れも上手のもので、江戸前期までに藩用品として生産された尾戸焼の内容を示すものであろう。

一方この時期に、城や藩関連の屋敷以外の遺跡から尾戸焼が出土した例は現在まで確認できていない。森田家文書の『古陶値段表』（第1節-資料6）には宝永7年（1710）、享保18年と19年（1733・1734）、寛保2年（1742）、寛延2年（1749）に販売された尾戸焼とその価格が記され、宝永7年の項には「濃茶碗、薄茶碗、大砂物鉢、香炉、香合、置物、盃台、菓子鉢、水吸、□□鍋、花瓶、水次、風呂前土器、硯水入、風呂、花生、火トボシ、水指、栗鉢、猪口、茶入、蓋置、引手、膾皿、白土器、菊模様茶碗皿蓋、菊皿、ひなの膳、三寸□、御上酒入徳利」などの製品名がみえている。こうしたことから、18世紀前半には茶器を中心に多様な製品が販売されたことが分かるが、しかし、遺跡資料からその流通の状況を掴むことは困難である。

城や藩関連の屋敷以外の消費地遺跡で尾戸焼の出土数が増加し始めるのは、18世紀後半から19世紀にかけてであり、この段階になると、高知城伝下屋敷跡や高知城旧営林局跡地点などの城周辺の遺跡の他に、金子橋遺跡など城下の上級武士屋敷跡、陣山遺跡など農村部に位置する下級武士の屋敷跡、小籠遺跡や田村遺跡などの農村部の集落遺跡においても尾戸焼が確認され、城下町から農村部にまで流通の広がりを見せている。中でも、小籠遺跡II区では居住区内の遺構より多数の尾戸焼がまとまって出土し、この中には器高の高い碗（958）、蓋付碗（975・976）方形の皿（980）や貝を形取った変形ものの向付（970）など、豊かな内容の尾戸焼が認められる。こうしたことから、18世紀後半以降には農村部でもその経済力に応じて上手の尾戸焼が所有されていたことが推察される。また、小籠遺跡、田村遺跡などでは飯碗とみられる器高の低い丸碗（965・977）や広東形碗（974・991）、粗製の皿（992）などの日用食器も流通している。

この様に、18世紀後半以降には、城下や農村部への尾戸焼の普及が急速に伸びることとなるが、こうした変化の背景を考えるにあたって、前節までで触れた尾戸窯の経営転換に関する記事を再び振り返っておきたい。記録によれば、贈答品としての尾戸焼製作記事は元禄年間をピークとし、八代藩主豊敷（1725～1767）以降は徐々に減少している。（第1節-tab.34）また、享保初年頃には、六代藩主豊隆から「尾戸焼物師共、向後ハ惣而諸品念入候手きは能き細工指止、麁相之仕成ニて御国中末末迄要用可相達雑物器焼出シ可申事。」との通達が出されており[註2]、18世紀前葉頃にはすで

に手間をかけた上手の製品製作から民間向けの雑器製作へと、経営転換が図られていたことが分かる。こうした記録からみて、18世紀前葉以降にはすでに尾戸窯の経営は民間向けの販売品製作主体へと転じていたと考えられるが、消費地遺跡からの出土が顕在化し始める18世紀後半以降には、特にその比重が増していったのではないだろうか。

また、文化6年の山内家文書『豊興公紀』の記述には、土佐藩武士層における茶の湯の衰退がみえているが、19世紀以降には、城下や農村の遺跡からも器高の低い飯碗や土瓶など茶陶以外の日用品的器種が多く出土するようになるなど、その製品内容にも変化が見えている。

この様に、藩財政の窮迫や贈答の廃止、茶の湯の衰退などの様々な要因を背景に、尾戸窯の経営とその製作内容は変質を遂げていったと考えられるが、そうした藩窯経営の変化は、消費地遺跡に出土する尾戸焼の様相によって直接的に示されているのではないだろうか。なお、尾戸窯跡平成15年度調査出土資料についても、大多数が18世紀以降の製品に該当すると考えられ、尾戸窯が民間向けの販売品製作を展開した時期の製品内容を良好に示しているものといえよう。

謝辞

今回の報告に際しては、消費地遺跡資料の調査について古泉弘（東京都教育庁生涯学習部文化課）、堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）、大成可乃（同）、千葉豊（京都大学埋蔵文化財研究センター）、窯跡出土資料の調査について竹村脩（日本陶磁協会高知県支部）、金沢陽（出光美術館）諸氏よりご教示、ご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

〔註〕

1) 丸の内三丁目遺跡出土資料843～921、高知城跡昭和55年度緊急調査出土資料925～938、高知城跡旧営林局跡地点出土資料945～952、土佐中村一条氏遺跡出土資料955、小籠遺跡出土資料959・960・962・965・970・975～980は未報告資料。

2) 平尾道雄『土佐藩工業経済史』より引用。

〔参考文献〕

『丸の内三丁目遺跡』東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター 1994

『京都大学構内遺跡調査研究年報1996年度』「京都大学病院構内AG20・AF20区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター 2000

『東京大学本郷構内の遺跡工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室2006

『小籠遺跡II』高知県埋蔵文化財センター 1996年『小籠遺跡III』高知県埋蔵文化財センター 1997年

『陣山遺跡・陣山北三区遺跡』高知県埋蔵文化財センター 1997年

『土佐中村一条氏遺跡確認調査報告書』高知県埋蔵文化財センター 1997年

『高知城伝下屋敷跡』高知県埋蔵文化財センター 2002年

『田村遺跡群II－第1分冊』高知県埋蔵文化財センター 2004年

小野賢一郎『陶器全集』民友社昭和6年

丸山和雄『土佐の陶磁』雄山閣出版1973年　丸山和雄「近世土佐の茶道と焼物」『高知の研究4』清文堂出版

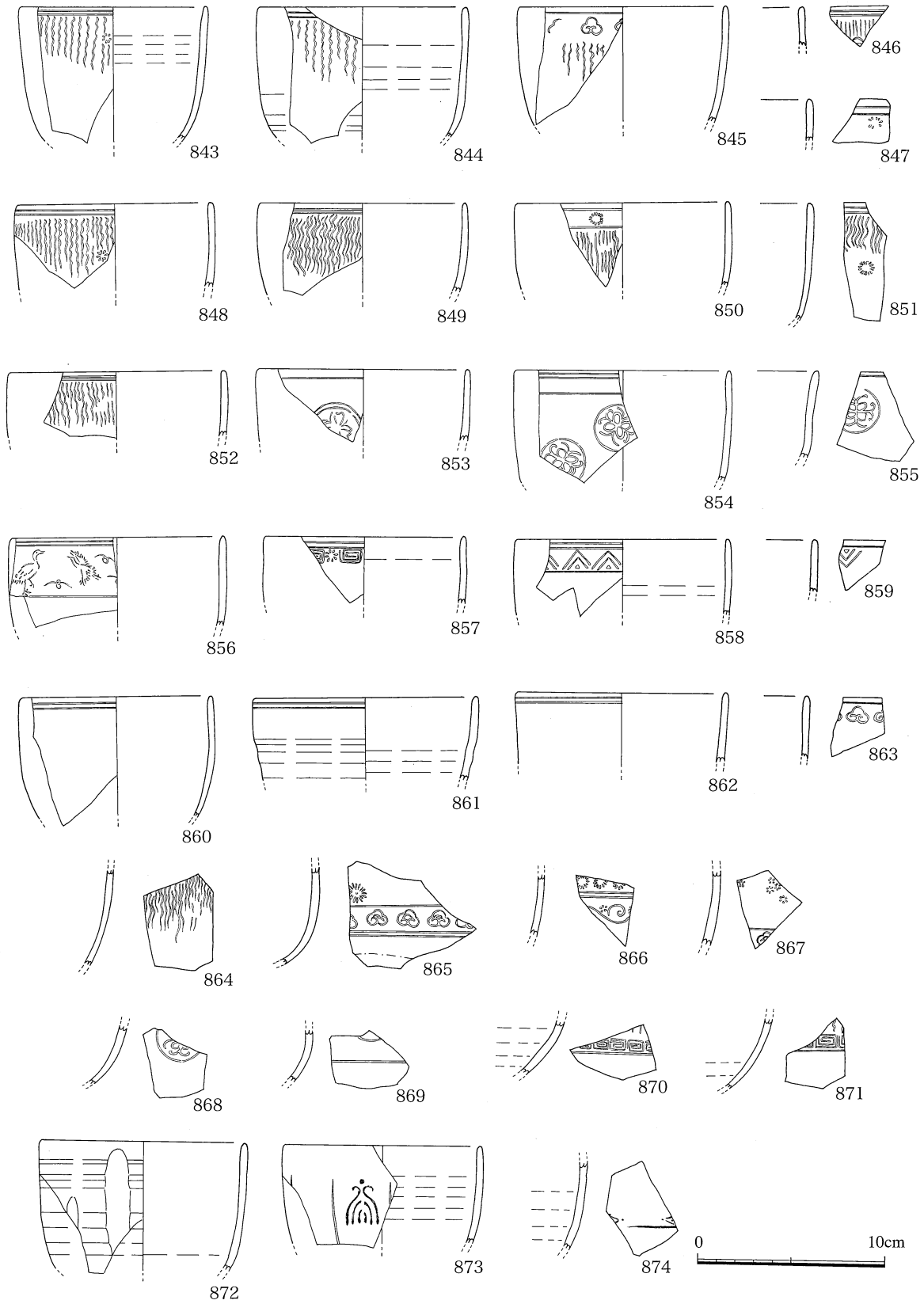
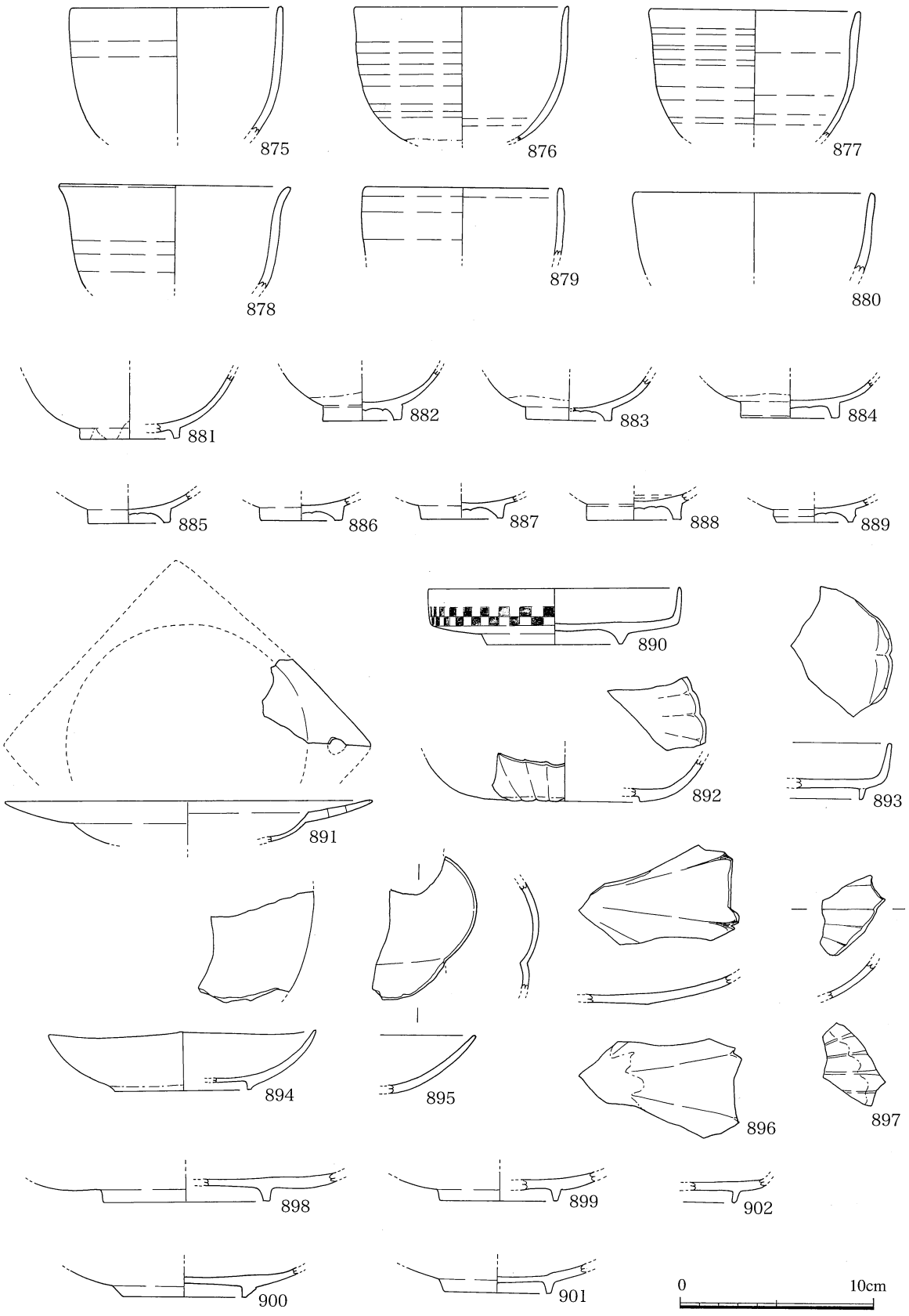


Fig.69　消費地遺跡出土の尾戸焼 (1)

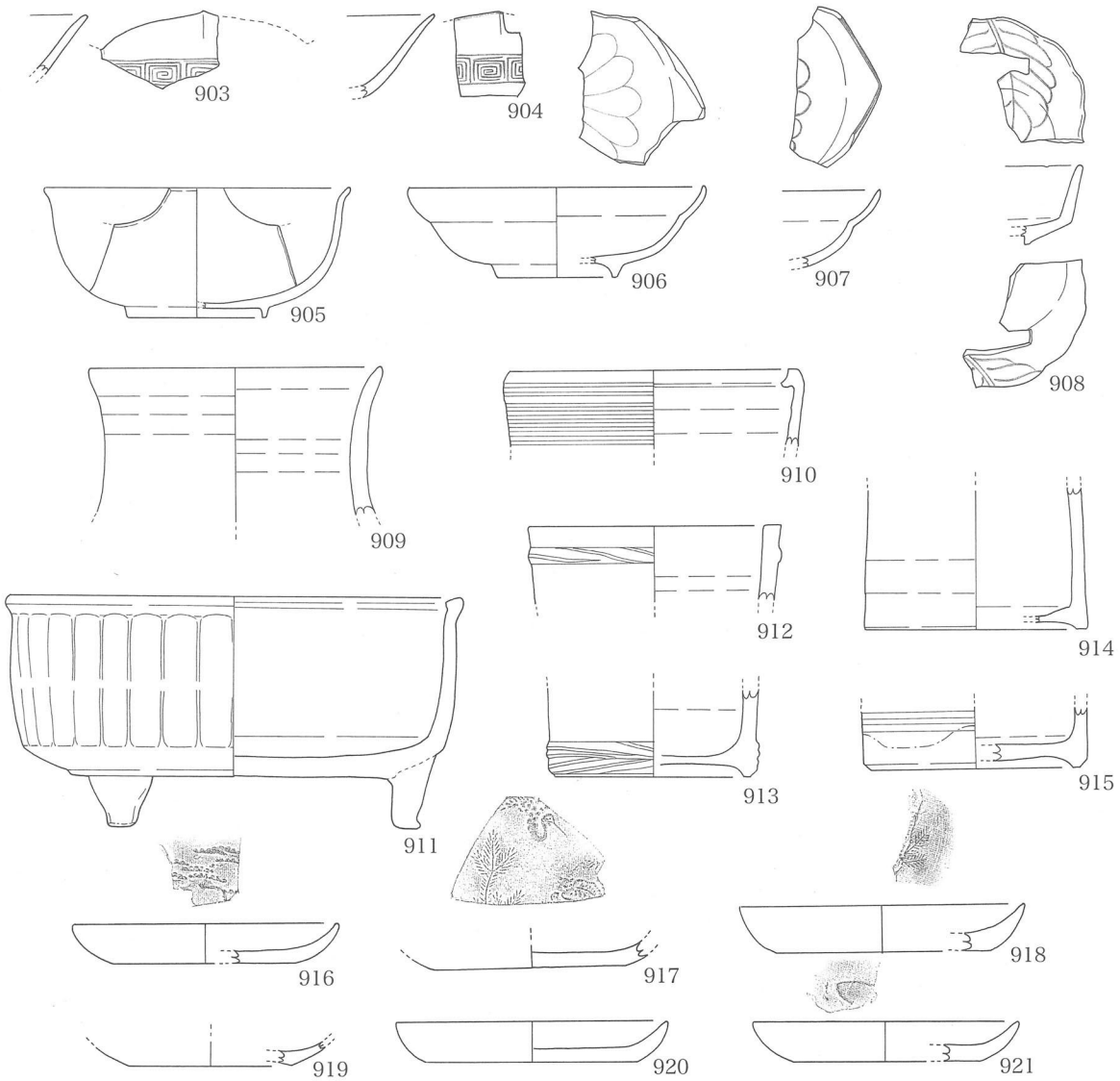
丸の内三丁目遺跡力地区瓦溜 (843～862･864～874),
〃力地区包含層 (863)　　※遺跡名は現地番号による。



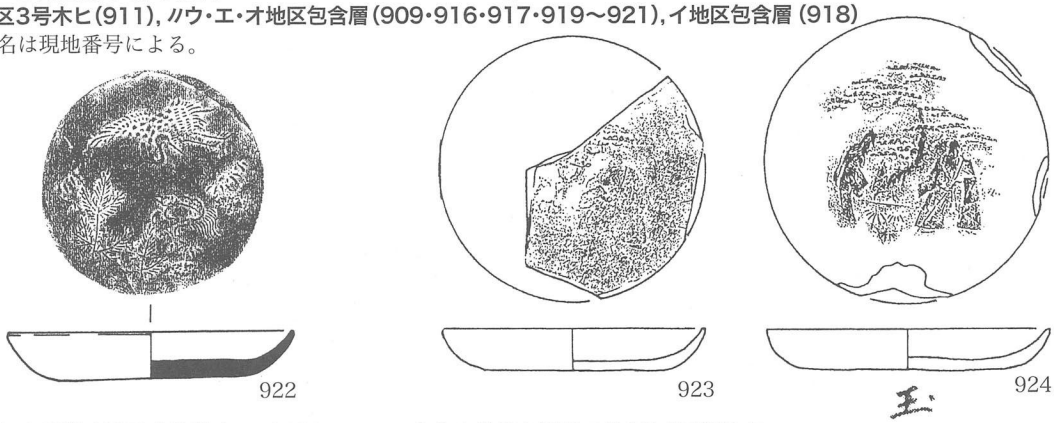
丸の内三丁目遺跡力地区瓦溜 (876～880・882～889・891～897・899～901),
〃カ地区SK2 (881), 〃SK3 (898・902), 〃SK4 (875・890)

※遺跡名は現地番号による。

Fig.70　消費地遺跡出土の尾戸焼 (2)



丸の内三丁目遺跡力地区瓦溜（903～907・910・912～915），〃力地区SK2（908）
〃カ地区3号木ヒ（911），〃ウ・エ・オ地区包含層（909・916・917・919～921），イ地区包含層（918）
※遺跡名は現地番号による。

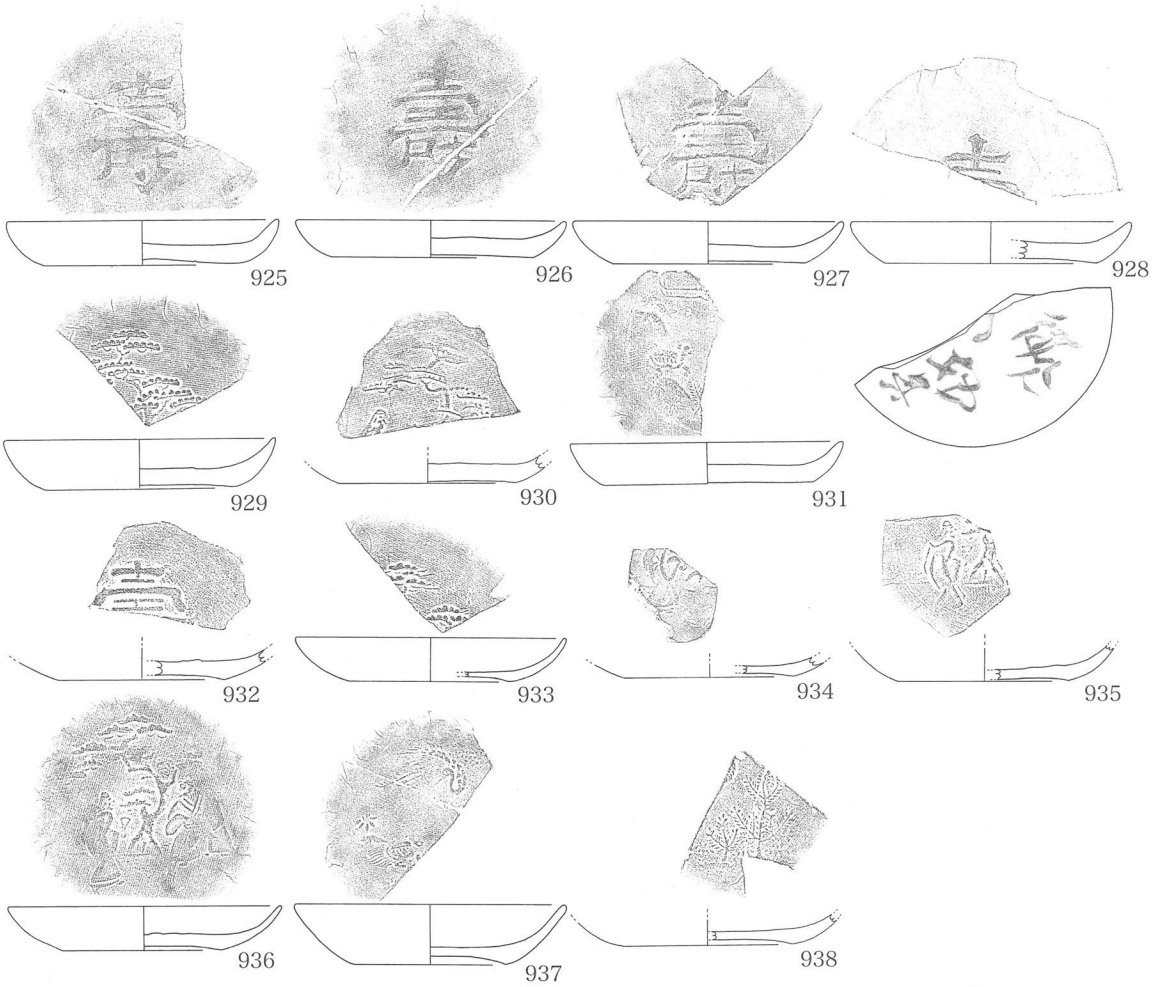


京都大学構内遺跡病院構内AF20区
SG1（922）

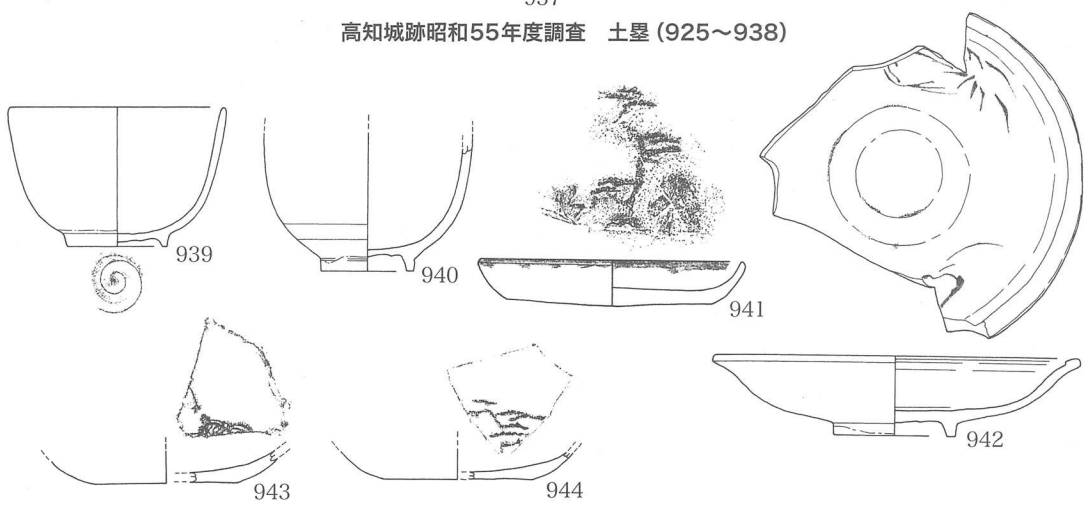
東京大学構内遺跡工学部14号館地点
SK330（923），SK293（924）

0　10cm

Fig.71　消費地遺跡出土の尾戸焼（3）



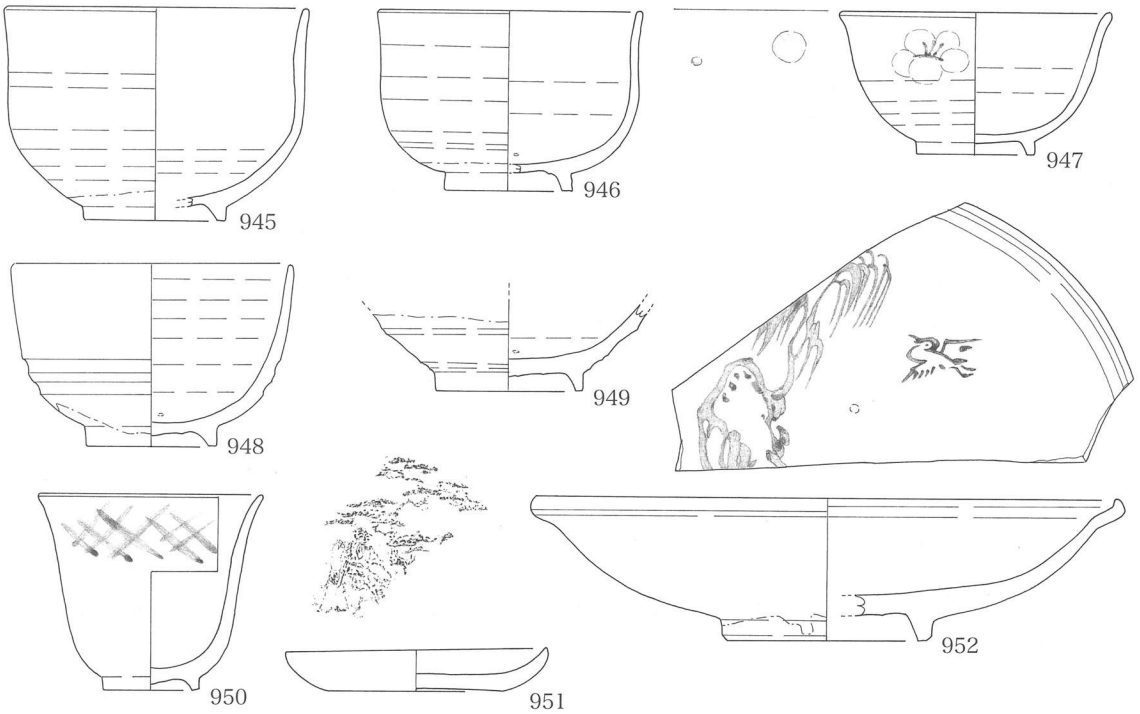
高知城跡昭和55年度調査　土塁 (925～938)



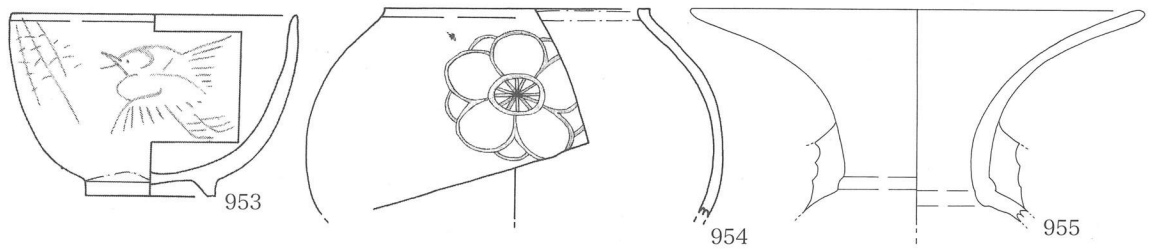
高知城伝下屋敷跡SX10 (939～942), SX15 (943), SX16 (944)

0　10cm

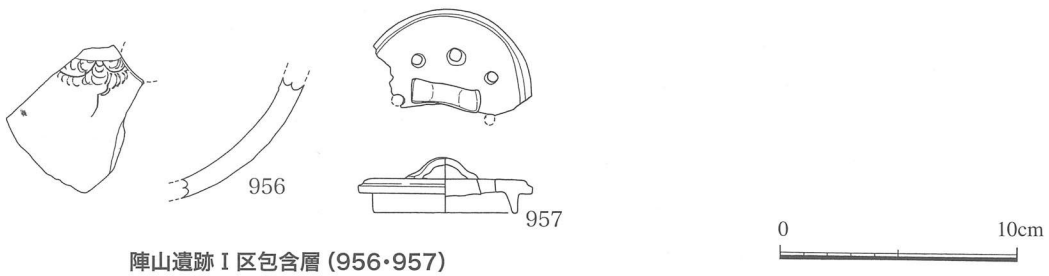
Fig.72　消費地遺跡出土の尾戸焼 (4)



高知城跡旧営林局跡地点SK6 (951), SK7 (947), SK8 (948), SK10 (945・946・949・950・952)



土佐中村一条氏遺跡包含層 (953～955)



陣山遺跡Ⅰ区包含層 (956・957)

Fig.73　消費地遺跡出土の尾戸焼 (5)

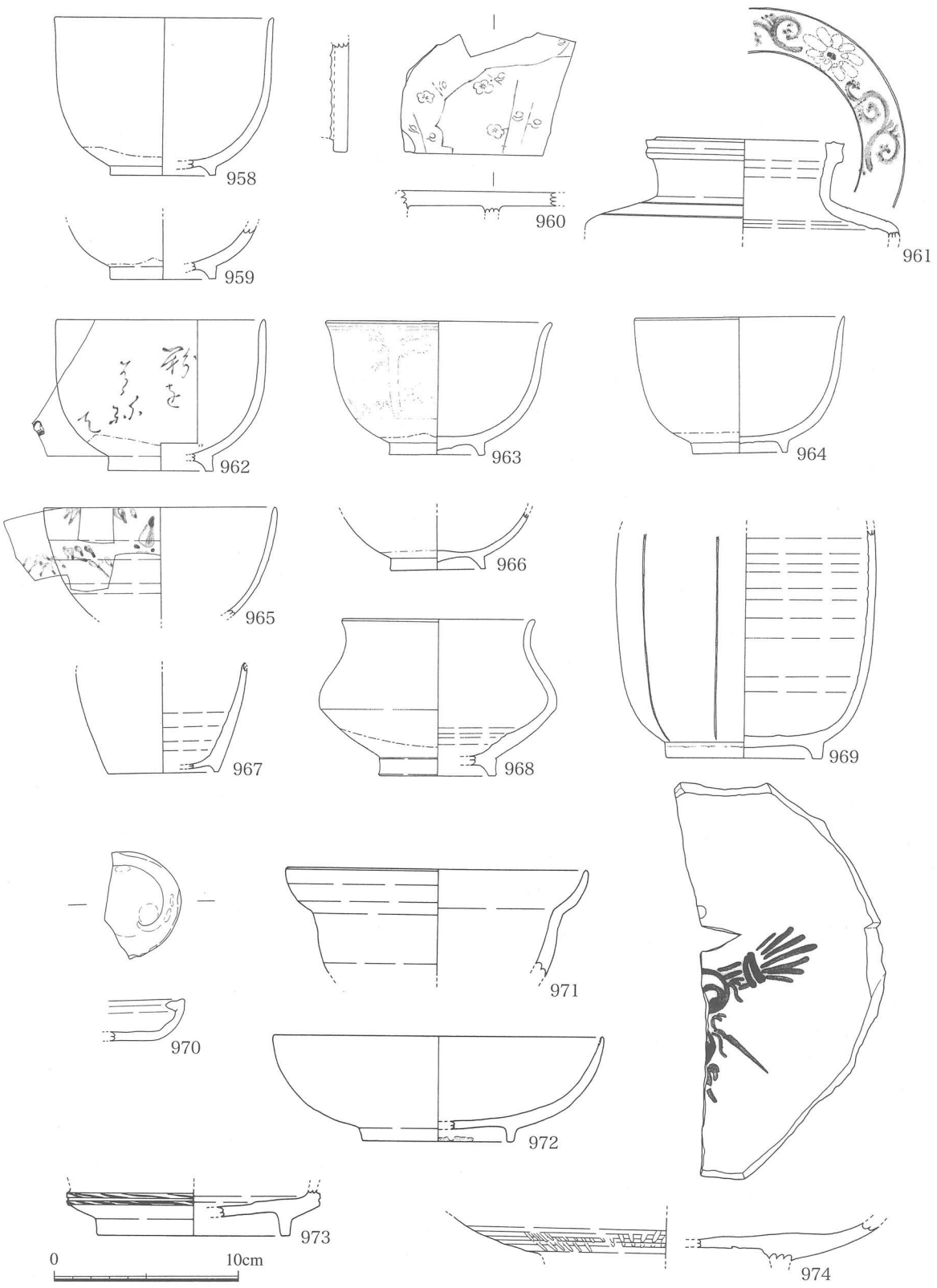
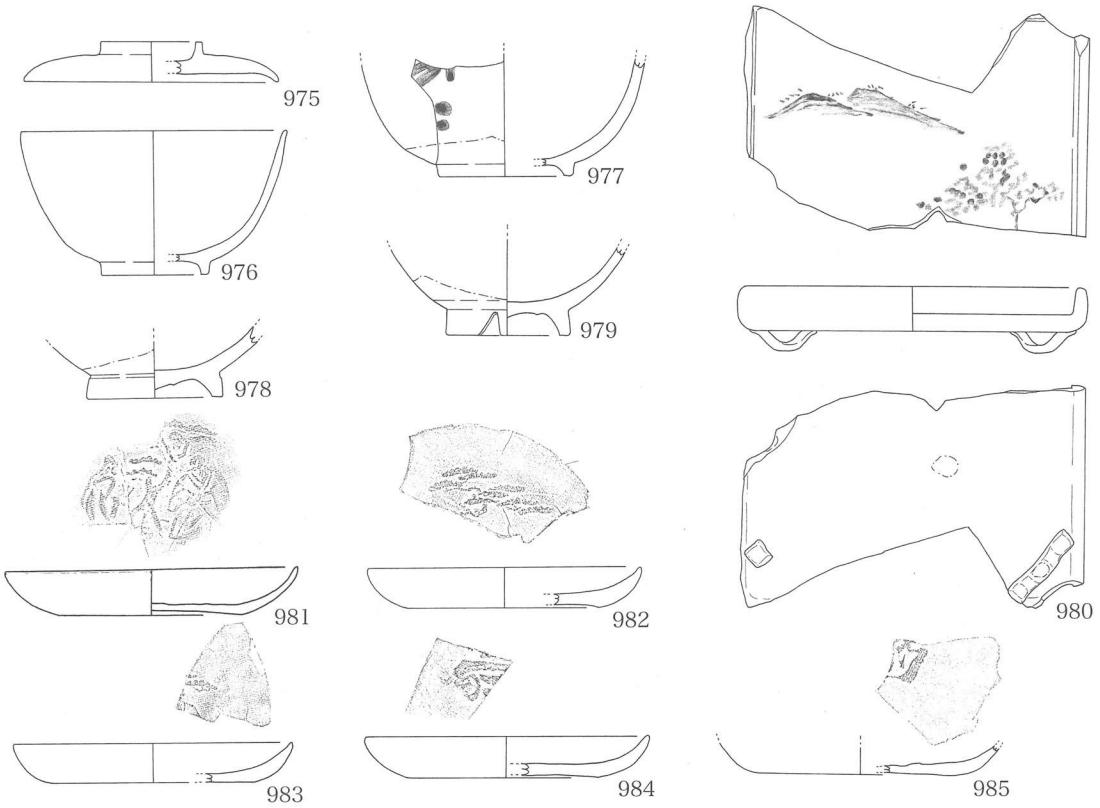
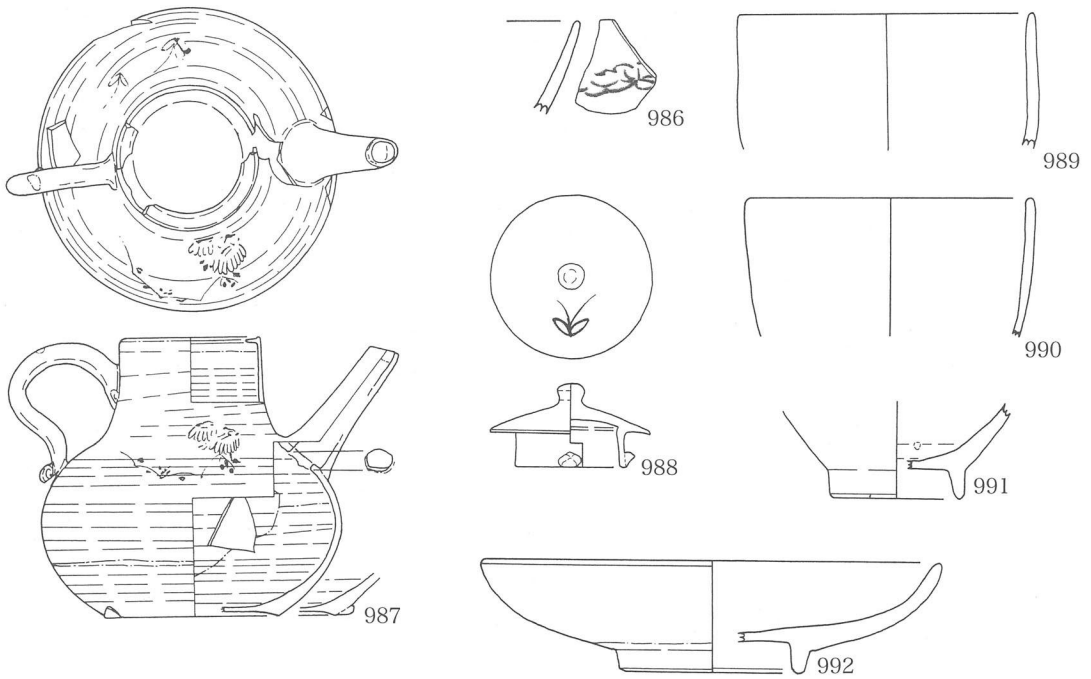


Fig.74　消費地遺跡出土の尾戸焼 (6)　小籠遺跡Ⅱ区SD78 (958～961), SE11 (962～969), SD69 (970), 〃一括廃棄土坑 (971～974)



小籠遺跡Ⅱ区SK89 (958～961), SE11 (981), SX10 (984), 包含層 (975～980･982)



田村遺跡ＢⅠ区SX113 (986～992)

Fig.75　消費地遺跡出土の尾戸焼 (7)

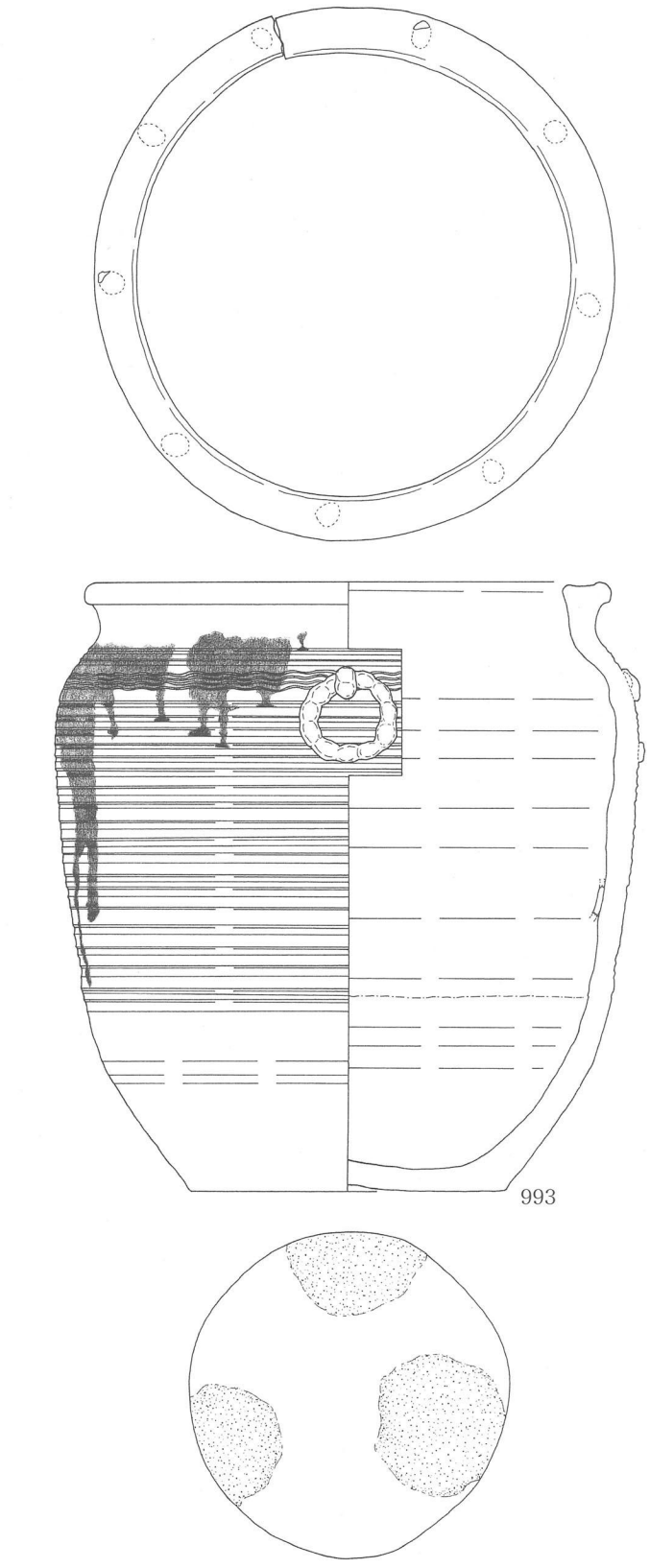


Fig.76　消費地遺跡出土の尾戸焼 (8)　　森田久右衛門墓所SK9 (993)

写　真　図　版

尾戸窯跡遠景（西より。江ノ口川南岸。2007年1月撮影。）

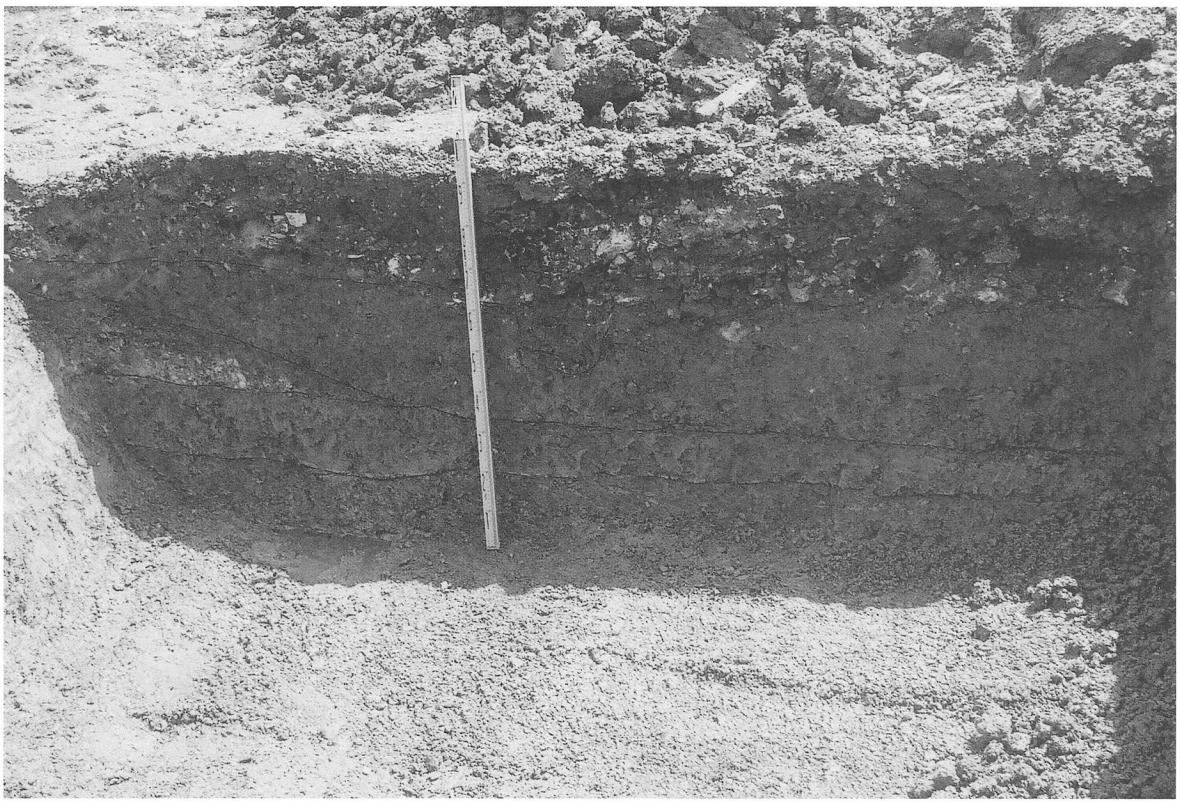
尾戸窯跡碑（南より。江ノ口川北岸。）

PL2

調査区風景（北より）

TP1 石列検出状況（南より）

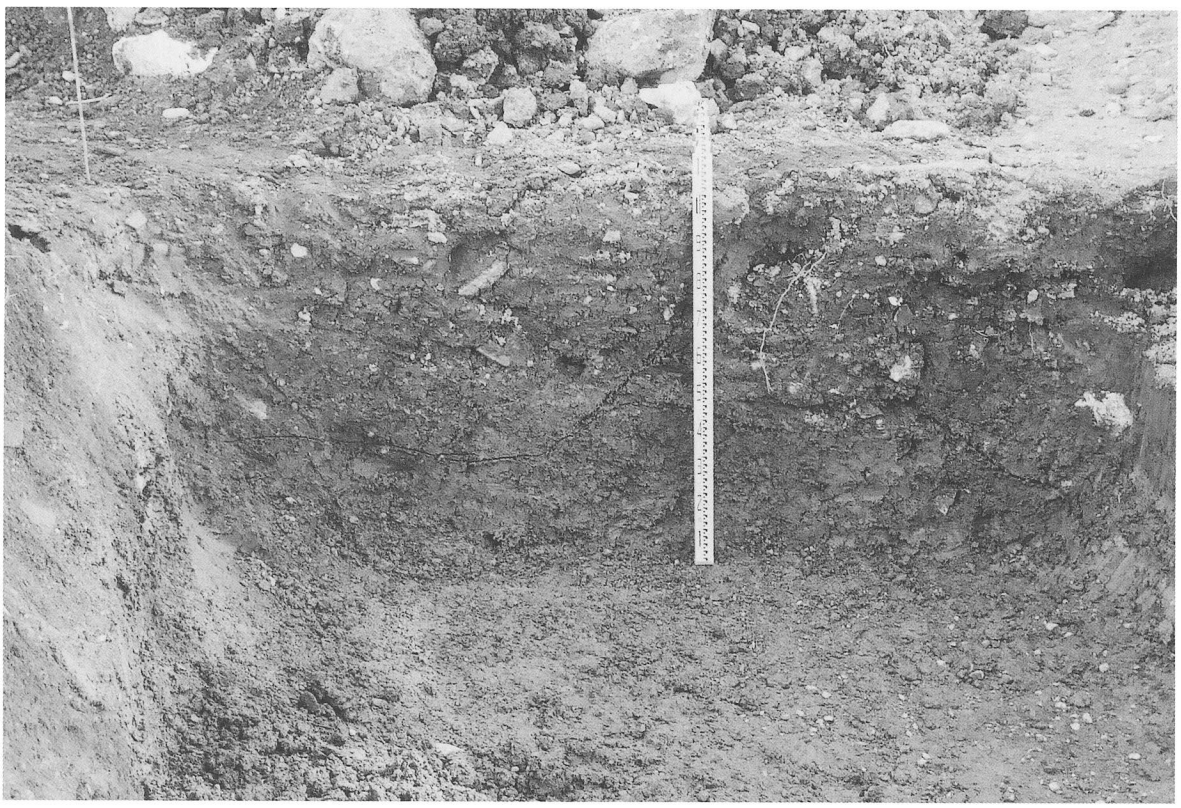
TP1 南壁セクション



TP2 東壁セクション

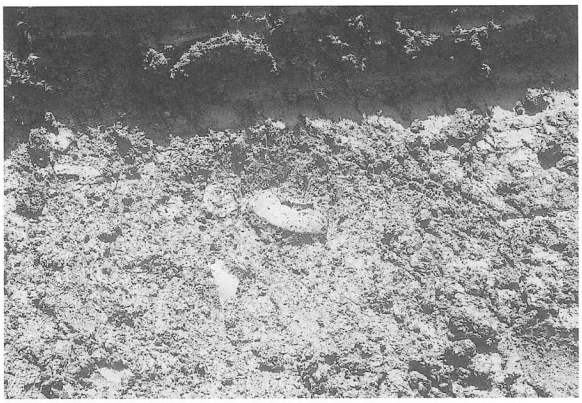
PL4

TP3 北壁セクション



TP4 北壁セクション

TP2 遺物出土状況



同上

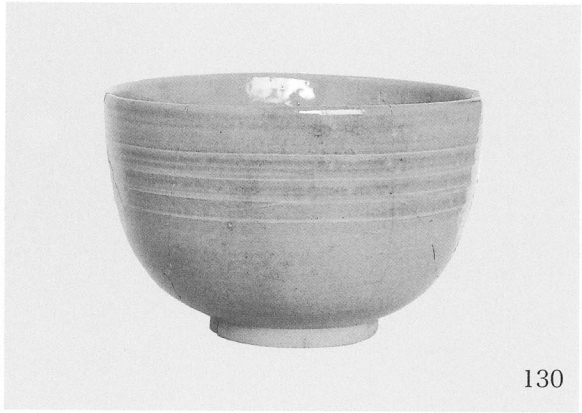
同上

TP1 石列（西より）

同左（上より）

PL6

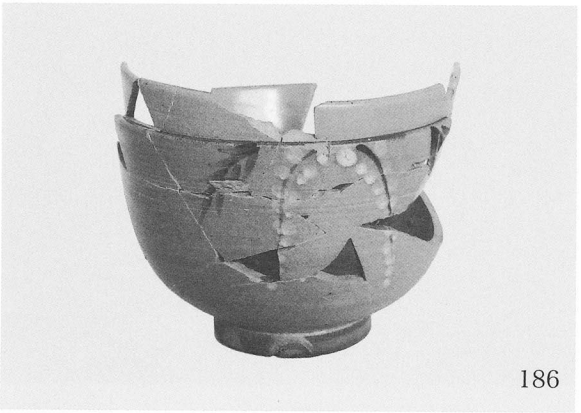
106


130

145

146

157


186

195

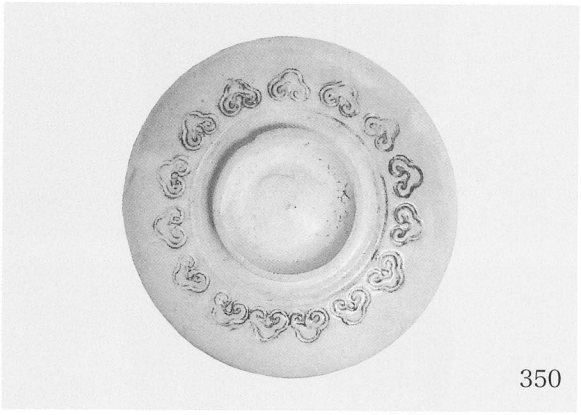
222

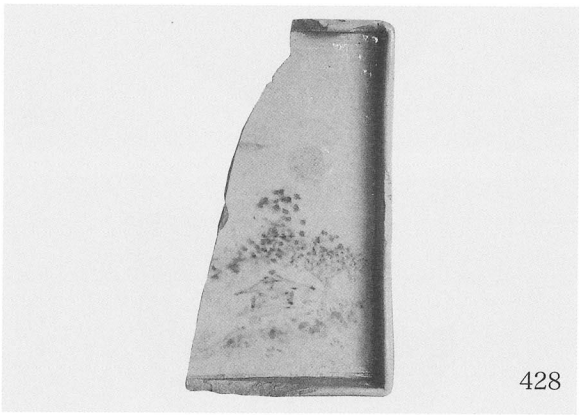
陶器碗

239

241

254


350


428

451

522

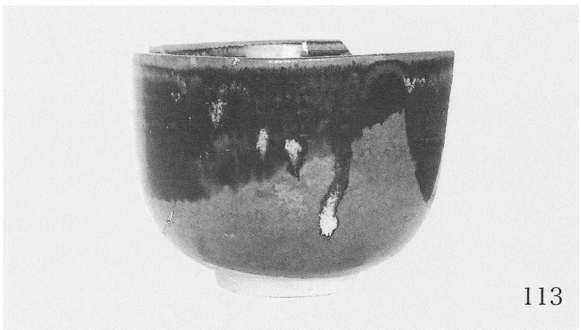
535

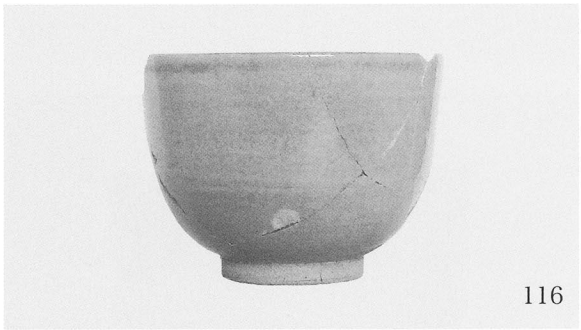
陶器碗，盖，皿，高杯，甕，灯明受皿

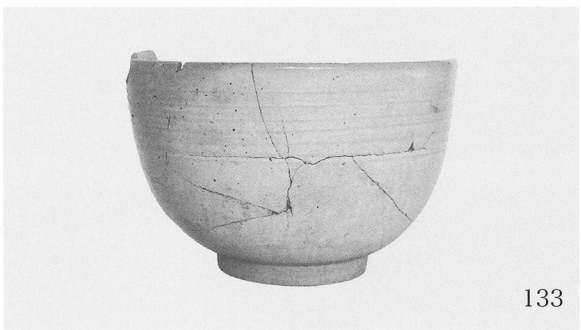
PL8

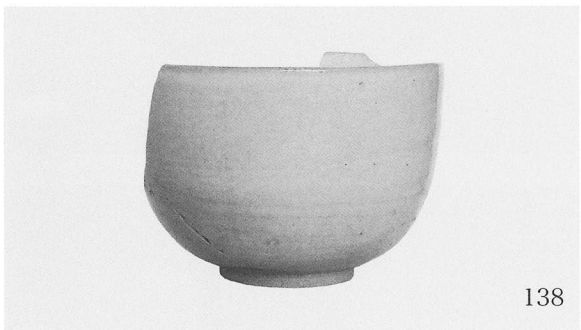
108

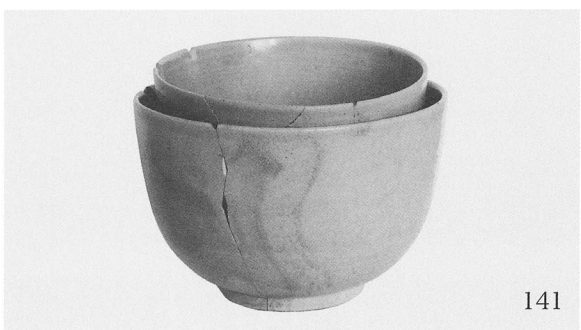
111

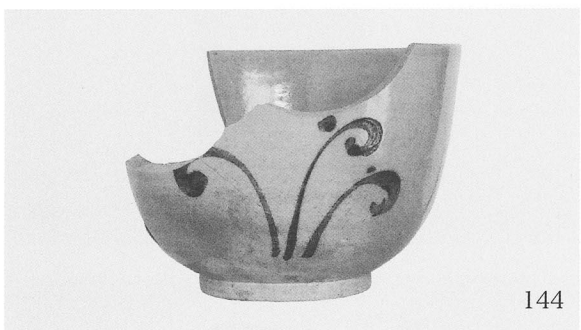

113


116

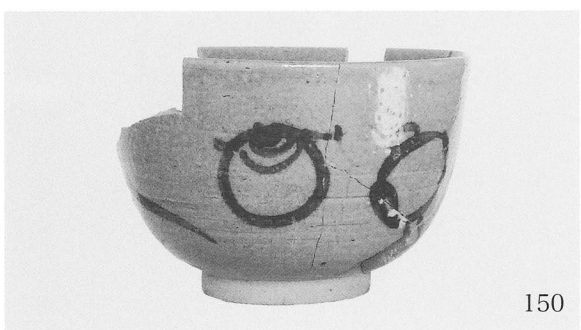

133


138


141

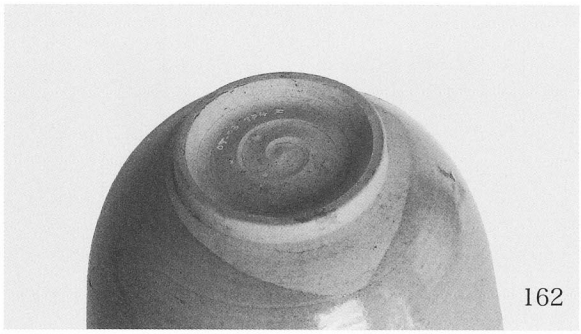

144

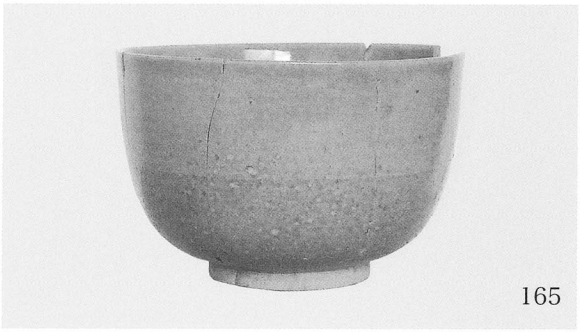
149

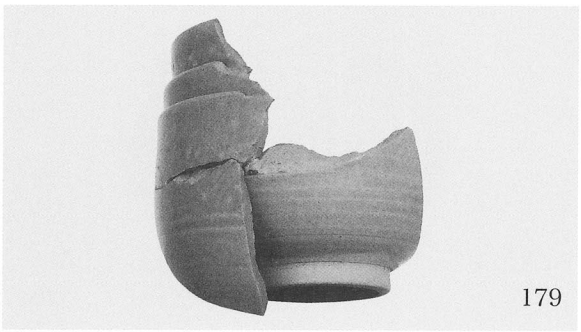

150

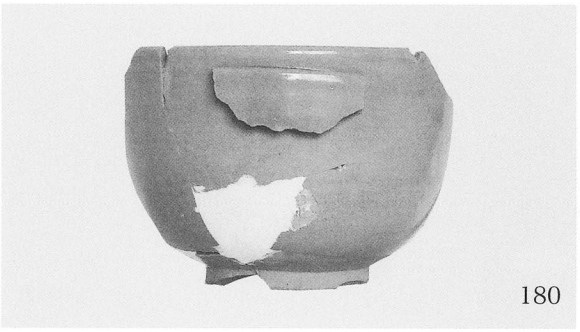
陶器碗

161

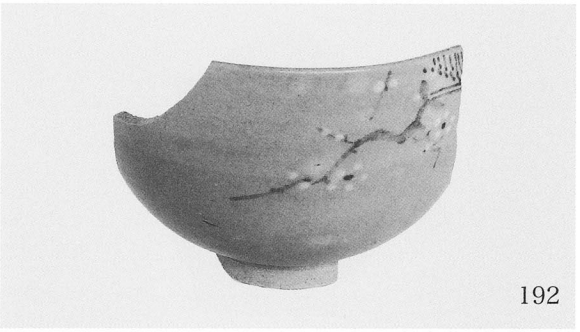

162


165

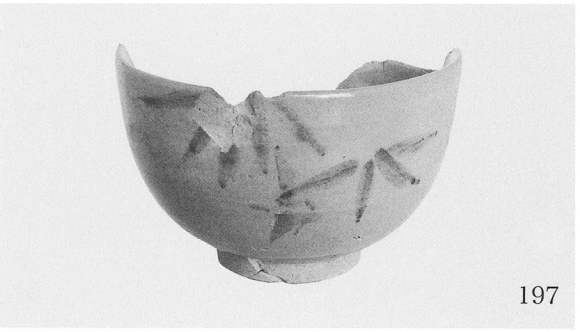

179


180

182


192

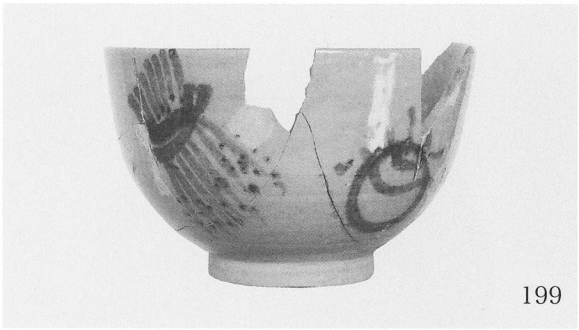
193

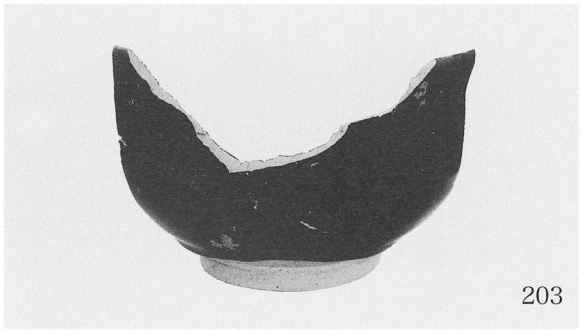

197

198

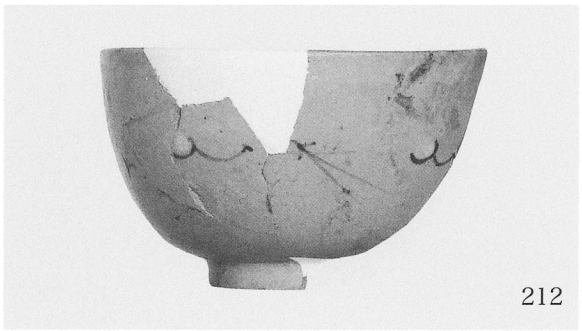
陶器碗

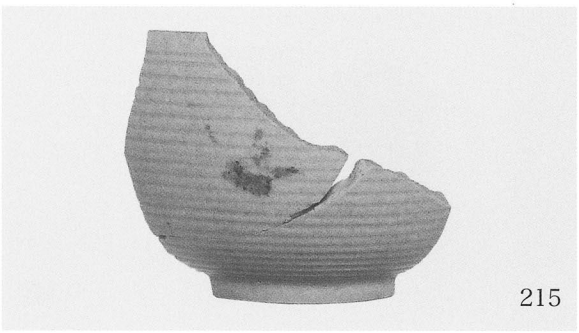
PL10

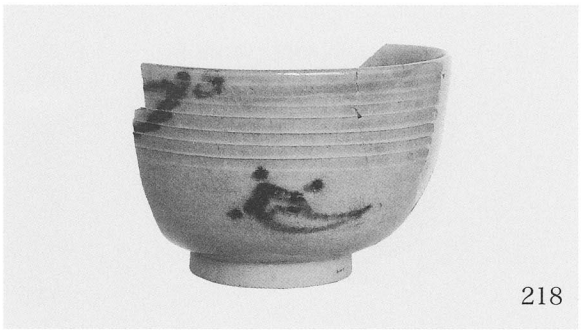

199

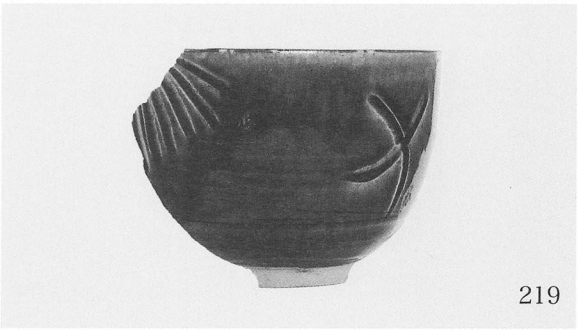

203

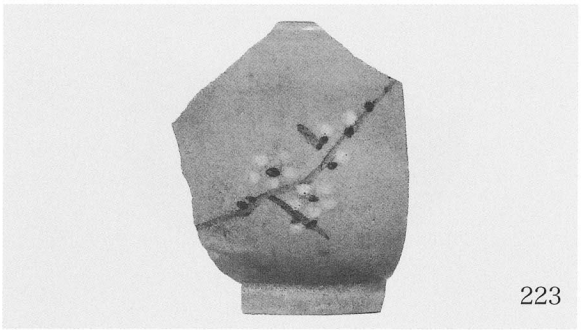
204


212

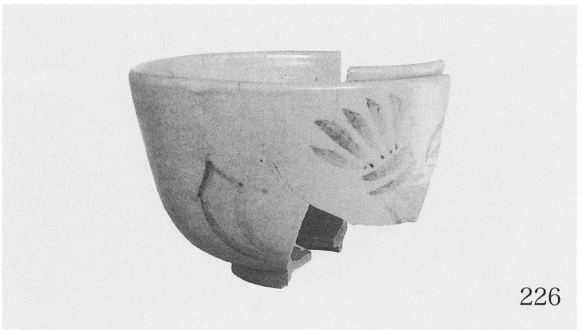

215


218


219

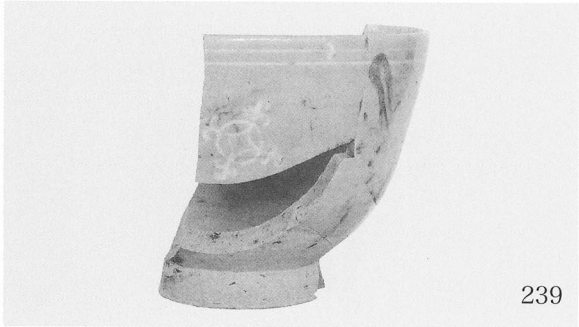

223

224

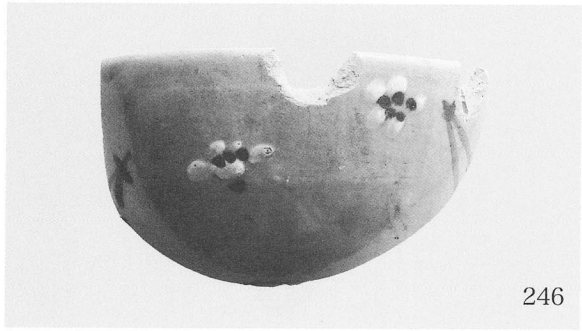

226

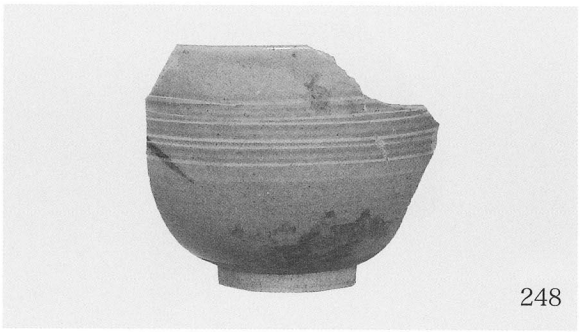
陶器碗

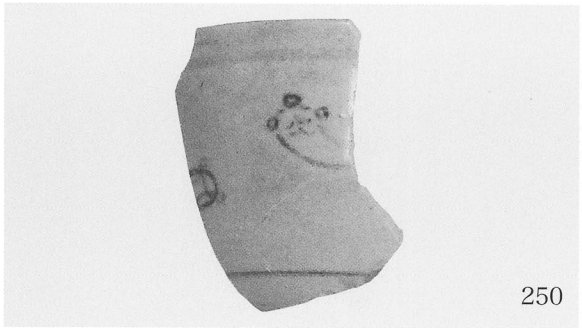
227

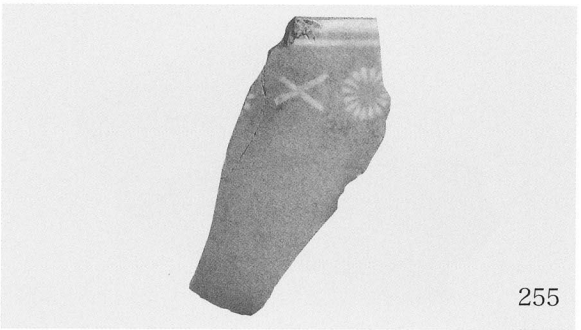

239

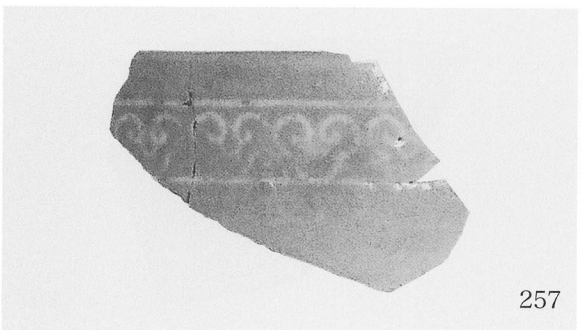
245

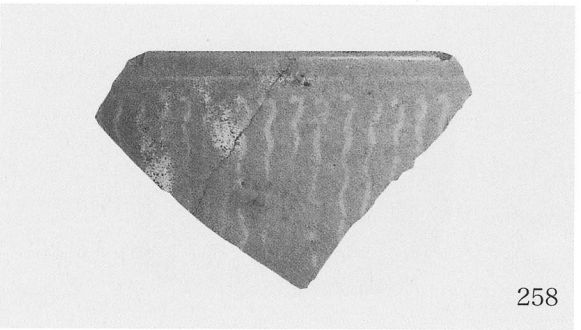

246


248


250


255

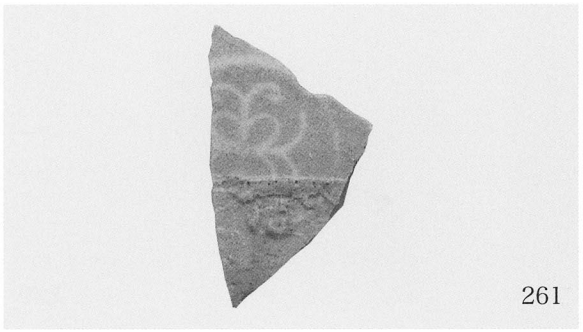

257

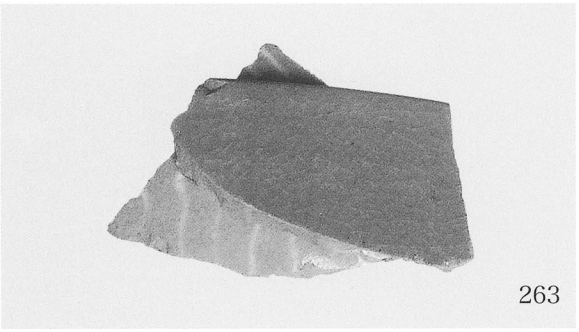

258

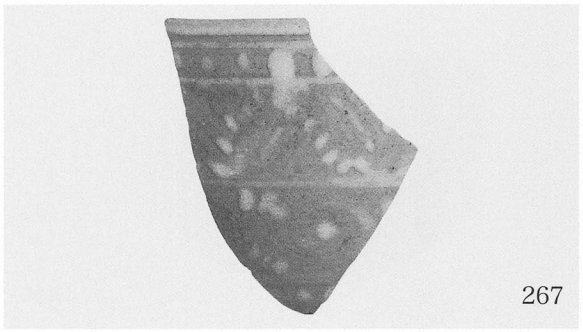
259

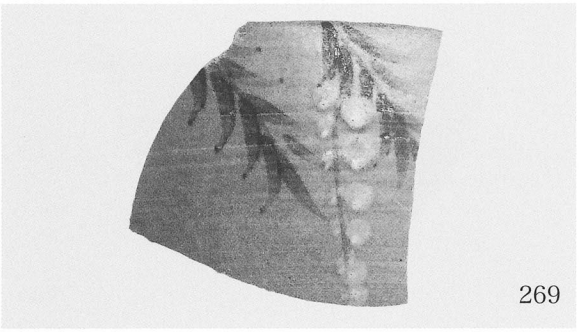
陶器碗

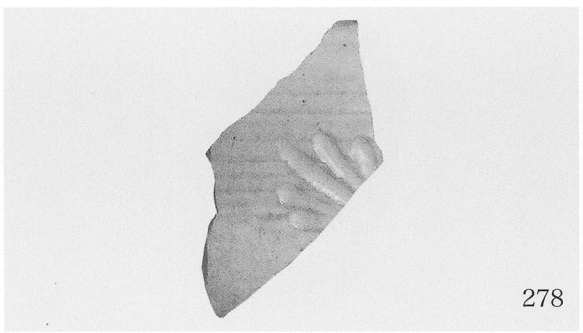
PL12

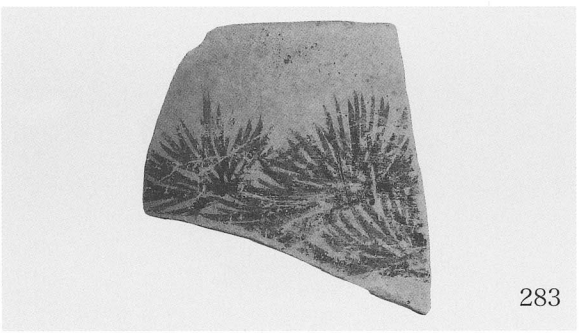

261

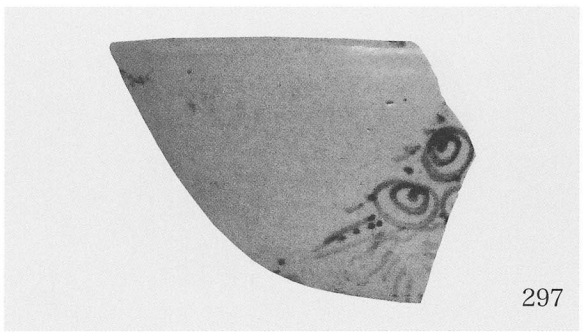

263

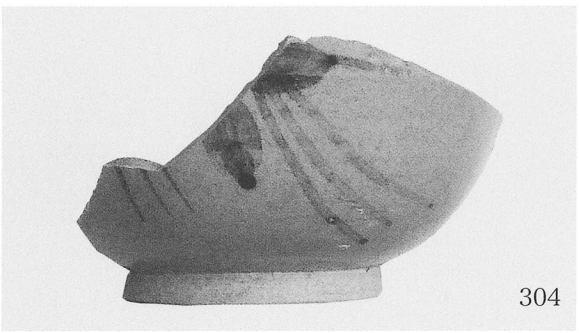

267

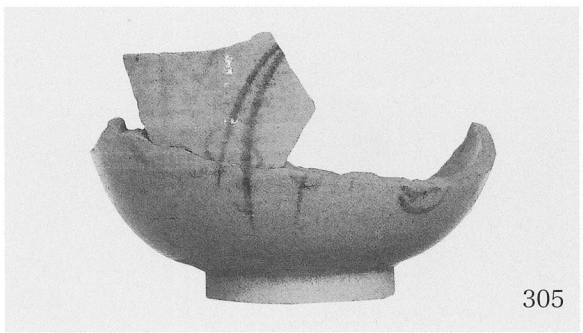

269

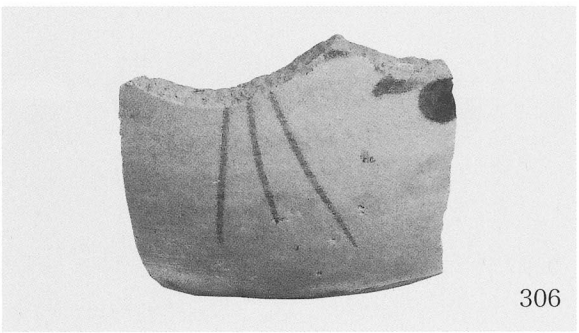

278


283

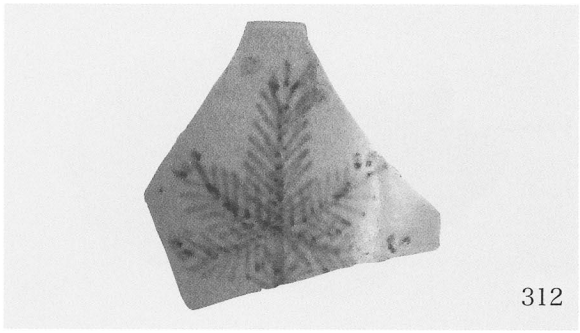

297

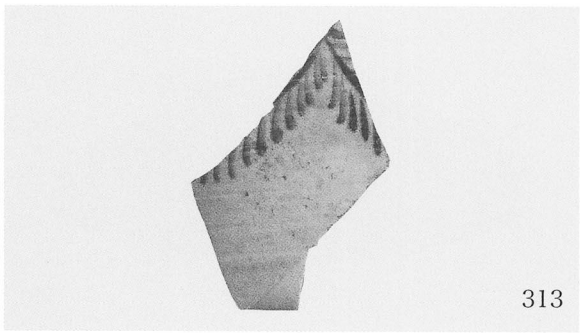

304


305

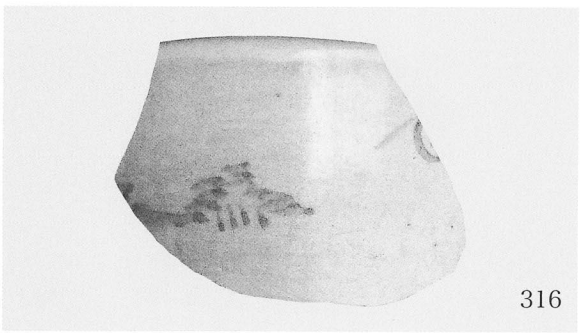

306

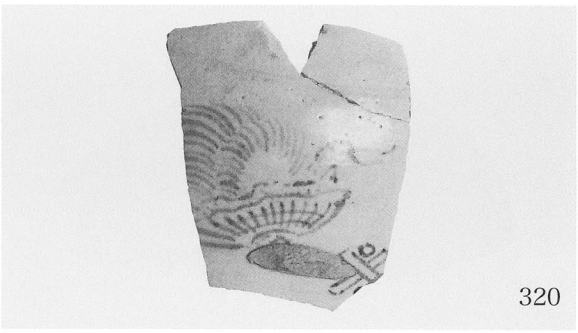
陶器碗

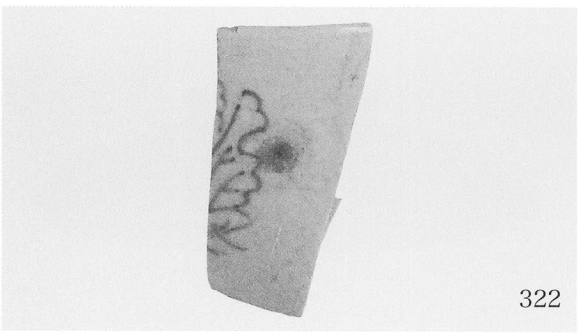

312

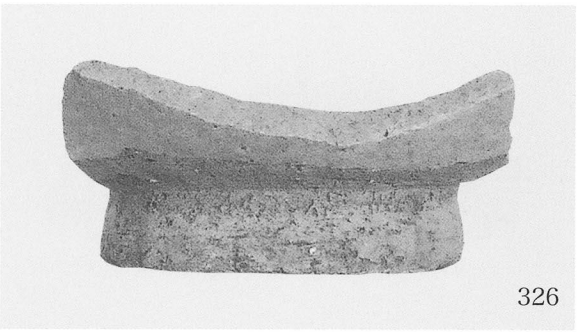

313

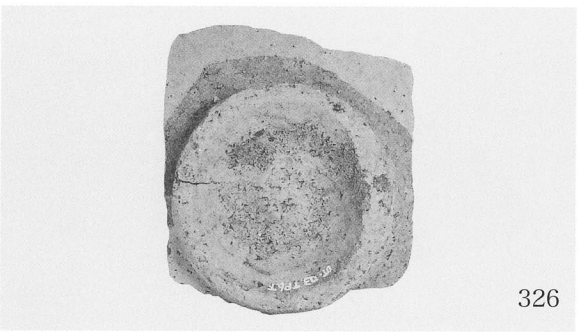
315


316

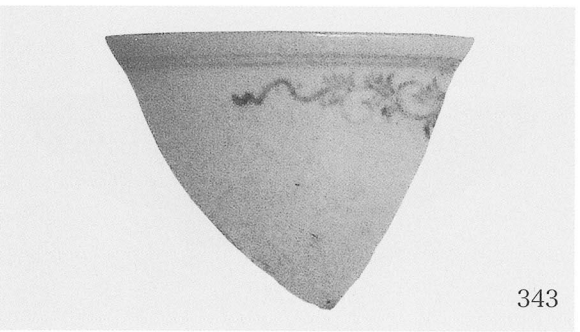

320


322


326


326

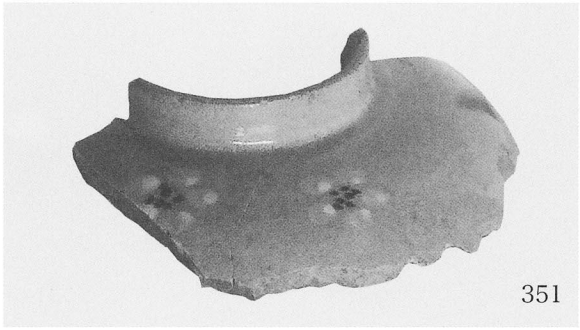
335

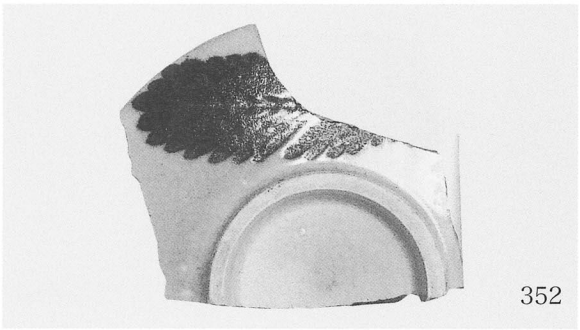

343

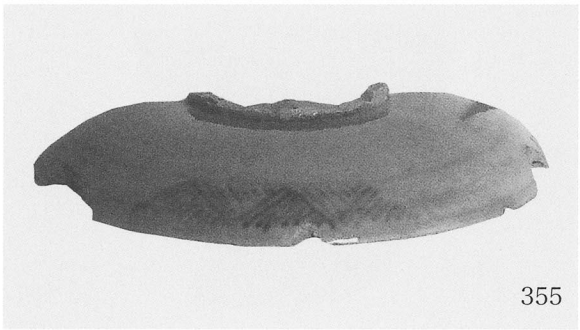
陶器碗

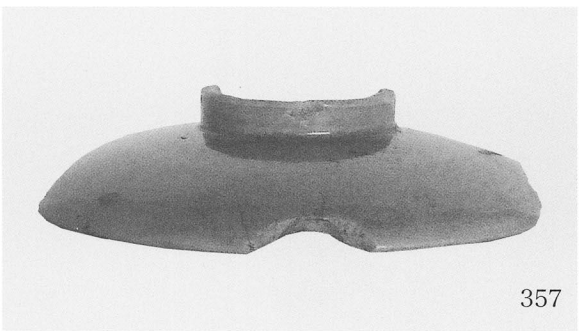
PL14

350


351


352


355

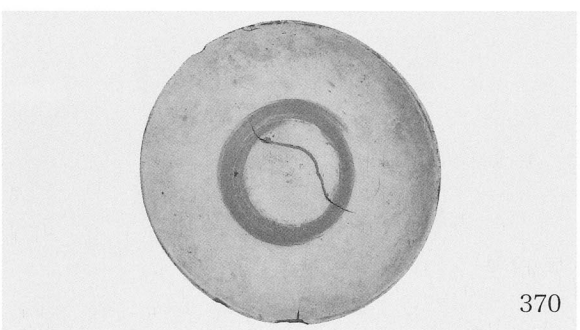

357

359

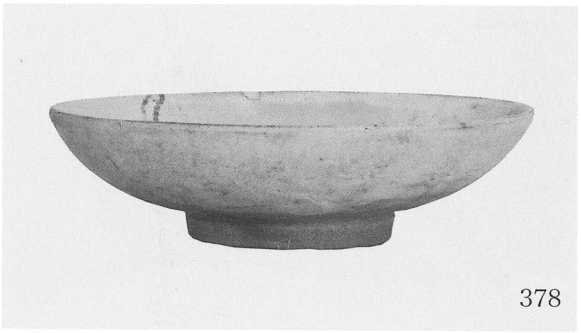
360

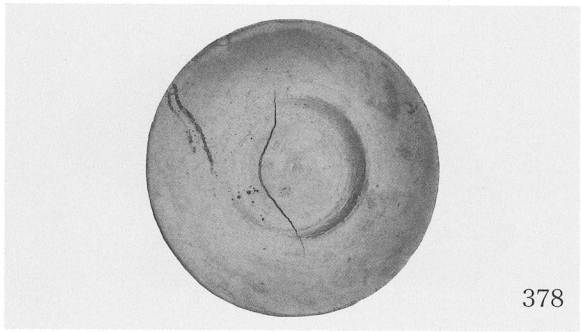
362

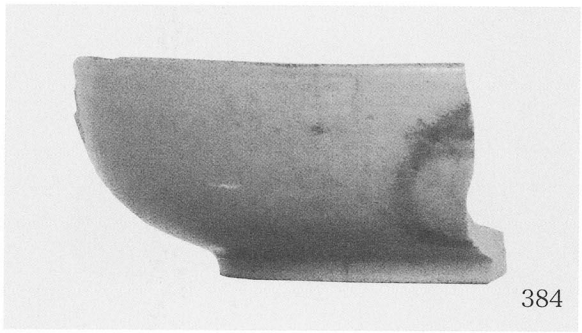
370

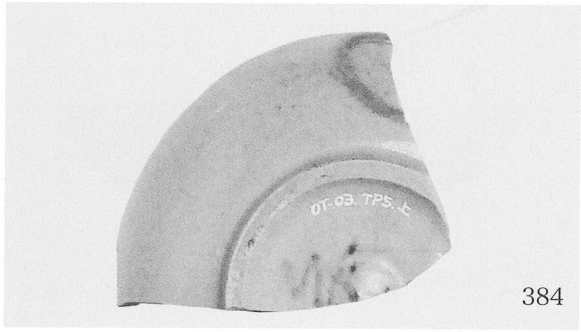

370

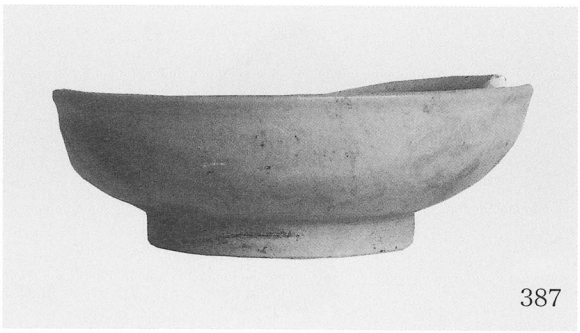
陶器蓋，皿

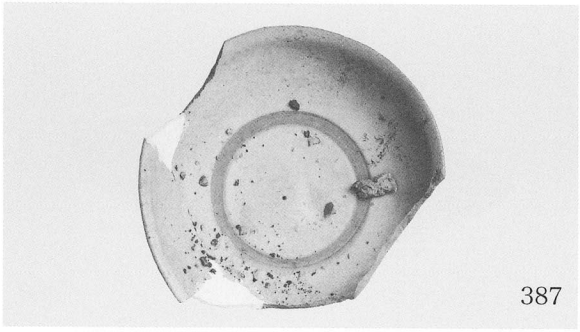

378

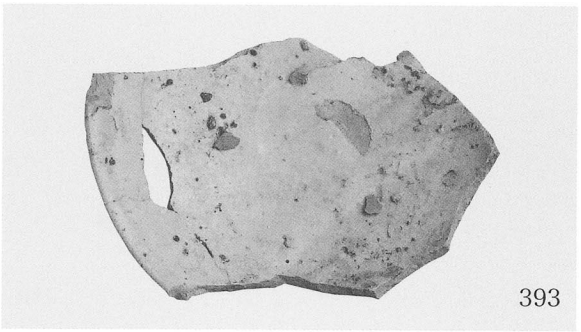

378

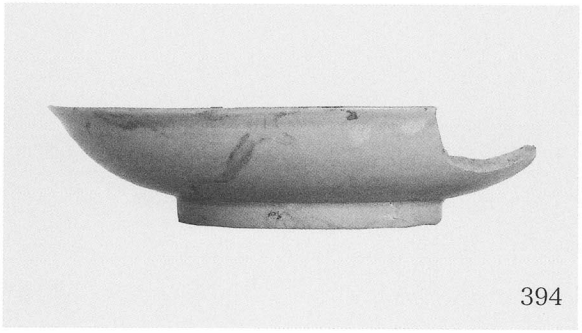

384

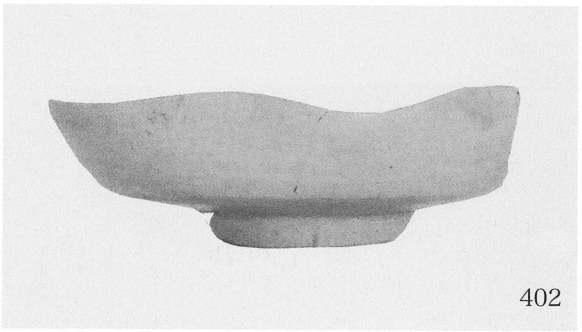

384

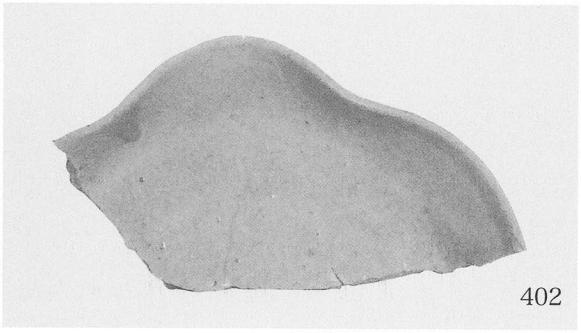

387


387


393

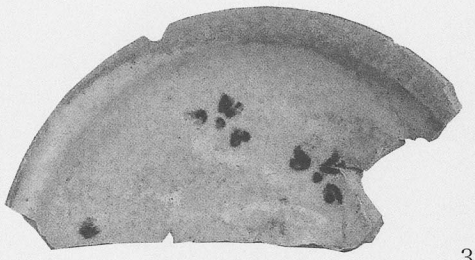

394

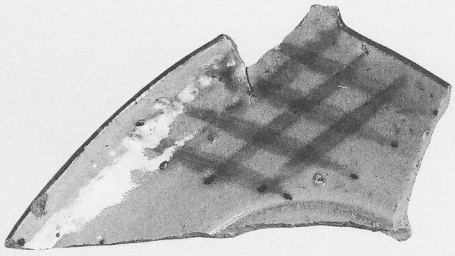

402

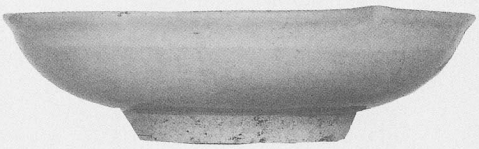

402

陶器皿

PL16


399

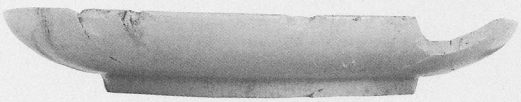

411


403

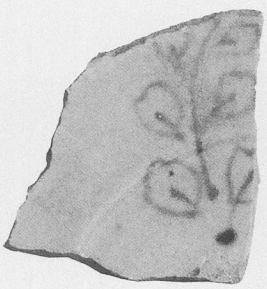
403

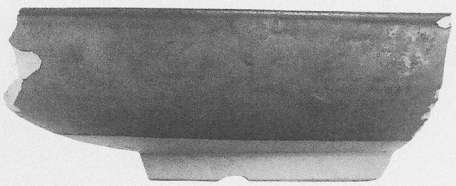
409

409


419

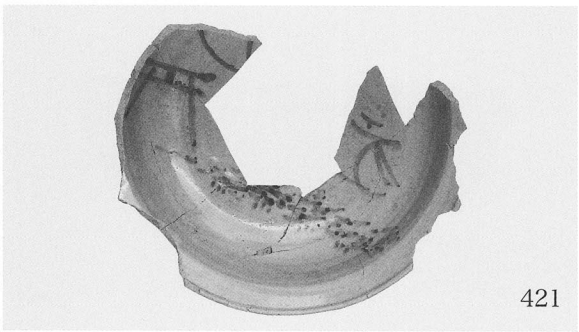
419

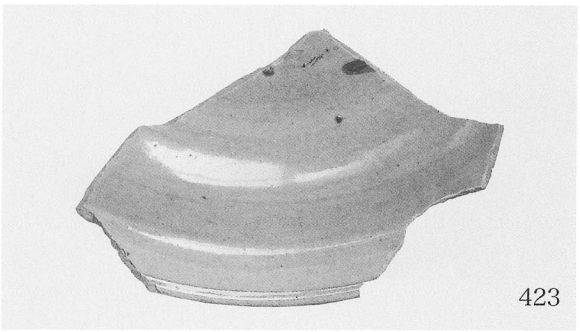

416

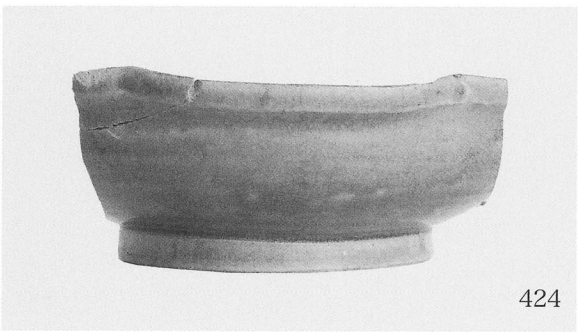

420

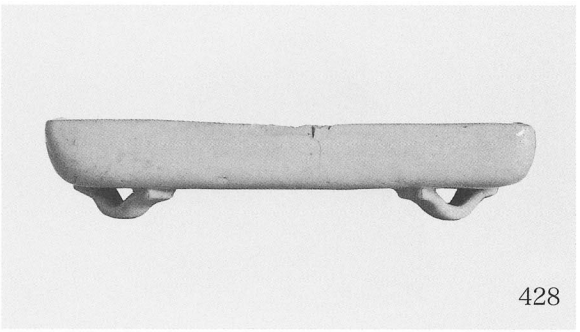
陶器皿

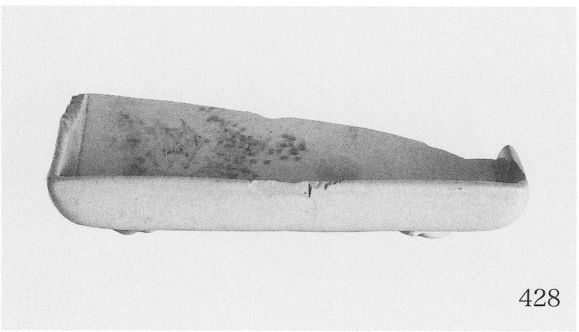
421

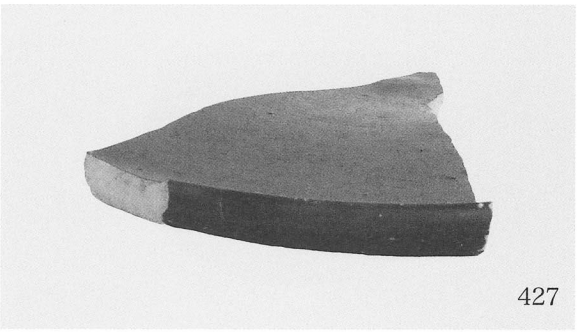

421


423

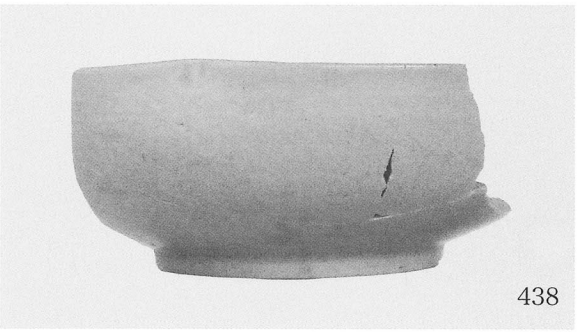

424

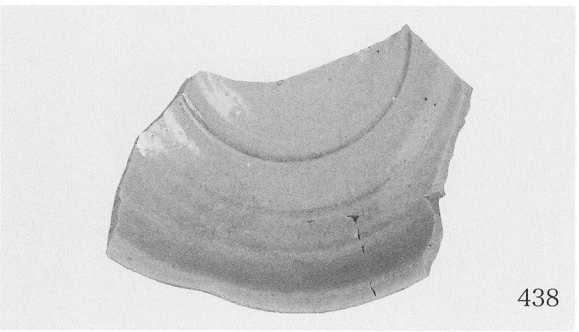

428


428


427

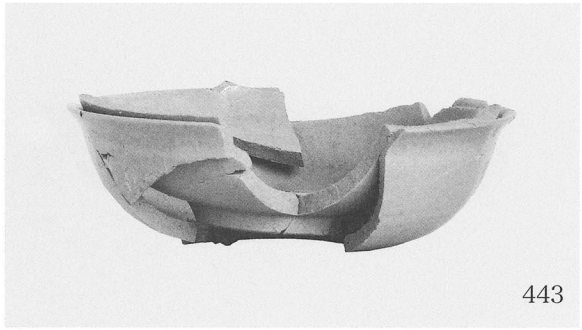
435

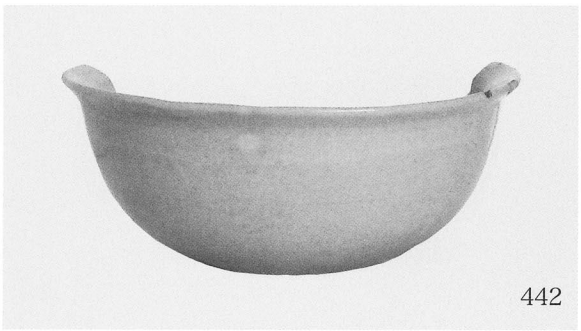

438


438

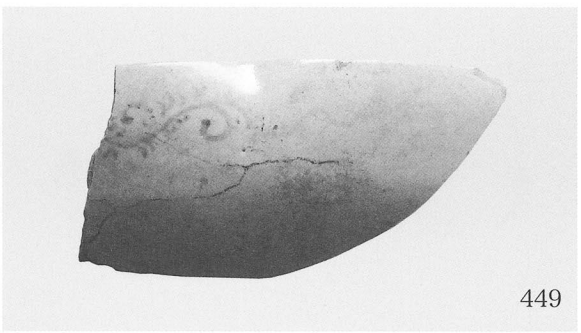
陶器皿，鉢

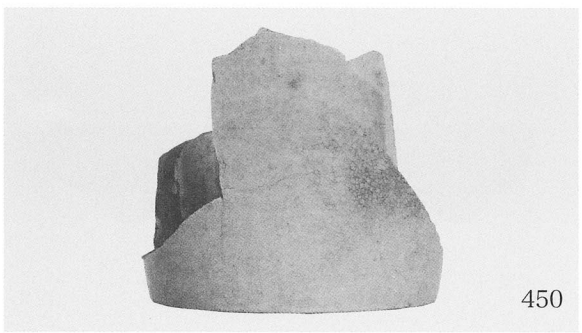
443

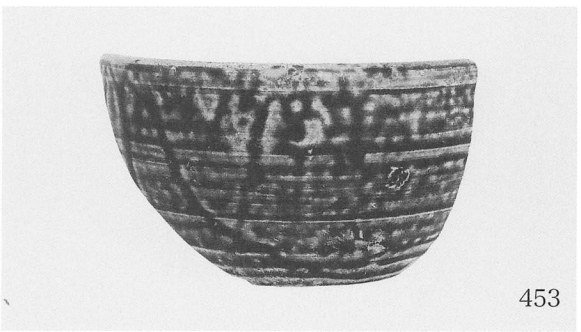

443


442

447

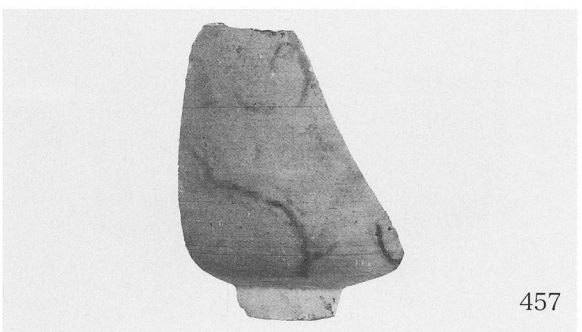

449


450


453

454

455


457

陶器鉢，猪口，捏鉢